

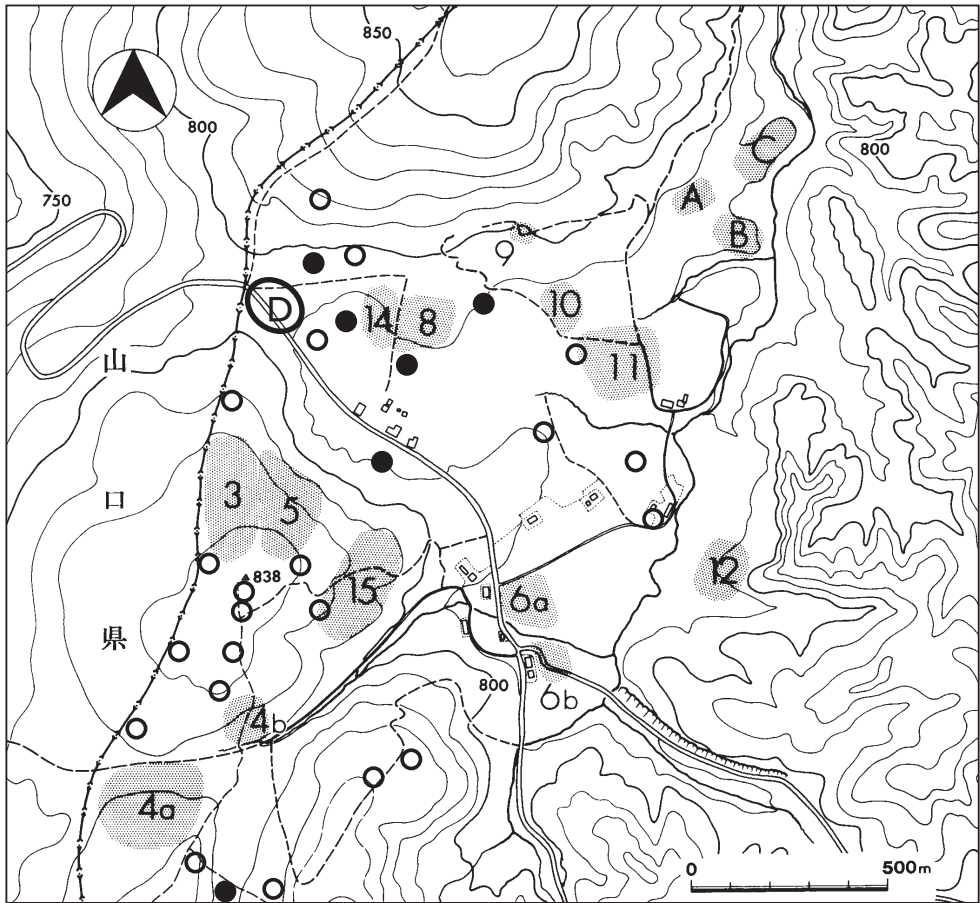
冠遺跡群における槍先形尖頭器の研究

—冠遺跡 D 地点第 2 次調査第 I 文化層出土資料を中心として—

藤野 次 史

1. はじめに

冠遺跡群は後期旧石器時代～縄文時代を主体とする著名な安山岩原産地遺跡である。遺跡群は中国山地脊梁部に位置し、広島県冠山南麓を中心に多くの遺跡が分布する。冠遺跡群の存在は 1960 年以前から知られていたが、旧石器時代の遺跡が初めて確認されたのは 1970 年の中国縦貫自動車道建設に伴う分布調査である（潮見 1985）。その後の継続的な分布調査により 10 地点あまりの遺物の集中的な分布地点が確認され、その内容は各地点ごとにある程度の特徴が指摘できることが明らかとなった（山崎 1974、藤野 1985）。冠遺跡群における発掘調査は旧石器時代遺跡の確認から約 10 年後の 1979 年で、中国縦貫自動車道冠山トンネル掘削残土捨て場造成に先立つものであり、国道 434 号線から残土捨て場に向かう仮設道および残土捨て場予定地が広島県教育委員会により試掘調査された。仮設道予定地内に位置していた第 10 地点（2 トレンチ拡張区）では、3 枚の文化層が確認され、最上層で良好な槍先形尖頭器石器群が検出された。（三枝 1983）。残土捨て場予定地では A～C 地点の 3 遺跡の存在が新たに確認され、1980 年に発掘調査が行われ、多くの石器群が検出されるとともに旧石器時代集落の一端が明らかにされた（梅本 1983）。1988 年には国道 434 号線改良工事に伴って冠遺跡 D 地点の発掘調査が（財）埋蔵文化財調査センターによって実施された（妹尾編著 1989）。始良 Tn 火山灰層の上下から 2 枚の文化層が検出され、冠遺跡群の成立が後期旧石器時代前半にさかのぼることが明らかとなった。さらに、1991～2000 年には広島県教育委員会によって冠遺跡群の総合調査が行われ、第 3・5 地点に隣接する丘陵頂部（第 39・50・52・56 グリッド）やその南側の丘陵頂上部（第 24 グリッド）などが発掘調査されるとともに、広範な地域に対して分布調査、試掘調査が実施された（沖・久下・岩井・藤野・妹尾編著 2001）。これにより、従来知られていた冠山南麓（冠高原）の範囲を大きく超え、冠山からその南に位置する標高 1030.9 m の鬼ヶ城山に至る地域やその周辺に連続的に多数の遺跡が形成されていることが判明した。



第1図 冠高原における主要遺物採集地点と発掘調査遺跡

(大数字は表面採集に基づく地点名であり、A～Dは発掘調査遺跡である。○印は総合調査時の試掘地点で、そのうち●印は槍先形尖頭器出土地点を示す。)

これまでの調査・研究により冠遺跡群は広範な広がりを見せることが明らかとなった訳であるが、遺跡の分布は安山岩原石の産状と密接な関係を持ちながらも、直接原石が採取できない丘陵地などにも多くの遺跡が立地していることから、原石採取・搬出とともに生業とも関連しながら形成されたことを予想させる。現在のところ、発掘調査された遺跡は冠遺跡A～D地点などわずかである。しかし、現状の出土石器群の内容を詳細に分析して遺跡の性格を明らかにし、遺跡相互の関係や遺跡群の成り立ちを検討することによってこの問題の一端に迫ることが可能となると思われる。こうした認識に基づき、その第一歩として冠遺跡D地点第2次調査第I文化層出土資料の分析を通じて冠遺跡群における槍先形尖頭器石器群の様相と遺跡の問題を考えてみた

い。なお、冠遺跡D地点第2次調査の成果についてはその概要を公表している（藤野1992）が、未だ詳細については未公表のままである。冠遺跡D地点出土資料は広島大学総合博物館（埋蔵文化財調査部門）が保管しており、ここに責任の一端を果たしたい。

2. 冠遺跡D地点の調査と槍先形尖頭器石器群

1) 冠遺跡群の概要

冠遺跡群は冠山南麓の通称冠高原と呼ばれる盆地状地形を中心に、その南側に広がる丘陵地でも多くの遺跡が確認されている。冠高原は広島県廿日市市吉和伴蔵を中心に、県境を越えて山口県側（岩国市錦町）に広がっている。盆地部は周囲約5km、主軸方向（北東－南西）で約2km、主軸と直交方向（北西－南東）で約1kmの規模をもつ。盆地部の標高は778～787m、丘陵部標高は830～880mであり、丘陵部頂上付近はかなり平坦な地形が広がっている。とくに山口県を含む西側丘陵地帯頂上部は広い平坦部を形成するとともに、西側斜面は急傾斜をなしており、宇佐川が形成した深い谷地形へと落ち込んでいる（谷底部との比高は約130m）。冠高原盆地部南東縁辺を吉和川が北東流し、吉和盆地（広島県廿日市市吉和）で中津谷川と合流して太田川となり、最終的には広島市で瀬戸内海に注ぐ。

次に、冠遺跡群を構成する各遺跡について概観しておこう。表面採集および試掘調査、発掘調査に基づく遺物分布の広がりには冠高原を中心に東側は吉和盆地境、南側は鬼ヶ城山北麓、飯山集落、飯山貯水池周辺などに点々と認められ、どの範囲を冠遺跡群とするか苦慮するが、当面のところ、遺跡群の範囲を冠高原にほぼ限定して話を進めたい。

まず、表面採集による遺物分布について概観する。石器類を中心とする表面採集調査は複数の団体や個人によって実施されており、それぞれに分布状況を記録している。ここでは広島大学の採集資料を主として述べる。広島大学文学部考古学研究室では大別11地点、細別13地点の遺物集中範囲を確認している。第3地点および第5地点は冠高原北西部の冠山スキー場に位置し、丘陵頂上～北側丘陵尾根部・北東緩斜面に隣接して立地する。両遺物分布は連続的である。遺物内容も共通点が多く、ナイフ形石器、削器、翼状剥片、同石核、盤状剥片、同石核、横長剥片、同石核、縦長剥片などナイフ形石器文化期の遺物を主体とする。国府型を含む横長剥片素材ナイフ形石器を特徴とし、少量の縦長剥片素材も認められる。石器群全体として大型品が多い。第15地点は第5地点南東の東へ延びる丘陵尾根部および南側緩斜面に立地し、ナイフ形石器

文化期を主体とする。ナイフ形石器、角錐状石器、削器、横長剥片、同石核、縦長剥片、同石核などが認められる。第14地点は盆地部の北西部の南へ延びる低丘陵西側緩斜面および山麓南緩斜面に立地する。ナイフ形石器文化期の遺物を主体とし、ナイフ形石器、翼状剥片、同石核、盤状剥片、横長剥片、同石核、縦長剥片などが認められる。ナイフ形石器は横長剥片素材を主体とし、縦長剥片素材が含まれる。横長剥片素材では国府型ナイフ形石器のほか、翼状剥片、同石核などが採取され、一連の瀬戸内技法関連資料が認められる。第8地点は第14地点の東に位置し、同一丘陵上に立地する。第14地点との遺物の分布は連続的で、低丘陵頂部に通じる小路を境に地点区分している。ナイフ形石器文化期の遺物を主体とし、ナイフ形石器、削器、翼状剥片石核、横長剥片、同石核、縦長剥片などが認められる。第10地点は盆地部北縁に位置し、山麓裾のきわめて緩やかな南斜面に立地する。ナイフ形石器文化期、槍先形尖頭器文化期の両期の遺物が認められ、ナイフ形石器、削器、槍先形尖頭器、縦長剥片、同石核などがある。後述するように、広島県教育委員会調査地点のひとつで、調査では槍先形尖頭器文化期石器群を中心に、ナイフ形石器文化期の遺物が出土した。第11地点は盆地部東縁部に位置し、南と北を小河川に挟まれる低地を中心に槍先形尖頭器期の遺物が採集されている。槍先形尖頭器、縦長剥片、同石核などが認められる。第9地点は第10地点北側の南緩斜面に立地する。槍先形尖頭器、縦長剥片、同石核が認められ、縦長剥片を主体として採集量は少ない。第12地点は盆地部南東部に位置している。槍先形尖頭器、楔形石器、縦長剥片などが採集されているが、採集量はきわめて少ない。第4地点は冠高原西南部に位置し、第3・5地点や第15地点の立地する丘陵の南斜面（第4b地点）や谷を隔てた丘陵北側裾緩斜面（第4a地点）に立地し、後者を中心に槍先形尖頭器文化期を主体とする遺物が分布する。槍先形尖頭器、削器、縦長剥片などが認められる。第6地点は盆地部西南部の微高地に立地し、小河川を挟んで第6a地点、第6b地点が存在する（第6a地点は近接地点の造成に伴う再堆積の可能性が高い）。縄文時代前期の遺物を主体とし、縄文土器、石鏃、横長剥片、同石核などが認められる。このほかに、広島県教育委員会による冠遺跡群総合調査において、上述の各地点隣接地を中心に遺物の分布が確認されている（沖2001）。

次に発掘調査遺跡について概観する。発掘調査は開発に伴って実施された冠遺跡第10地点および冠遺跡A～D地点、学術的調査として実施された冠遺跡D地点および冠遺跡群総合調査の第39・50・52・56グリッドなどがある。冠遺跡第10地点は冠山トンネル掘削残土捨て場仮設道建設に伴って、1979年に広島県教育委員会による発

掘調査が行われた（三枝 1983）。調査地点（12 トレンチおよび拡張区）は遺跡の中央部付近で、3 枚の文化層が確認された。第 1 文化層は第 V - 1 層を中心に包含され、槍先形尖頭器文化期に属し、槍先形尖頭器、ナイフ形石器、削器、石錐、加工痕ある剥片、横長剥片、同石核を組成とする。第 2 文化層は第 V - 2・3 層、第 3 文化層は第 VII 層に包含されるが、出土石器はわずかで、時期を特定できる資料を欠き、詳細は不明である。第 2 文化層は始良 Tn 火山灰上位、第 3 文化層は始良 Tn 火山灰下位の石器群で、いずれもナイフ形石器文化期に属するものと思われる。

冠遺跡 A・B・C 地点は第 10 地点（12 トレンチ拡張区）に続いて 1980 年に広島県教育委員会によって発掘調査が行われた遺跡で、冠高原北東隅に位置する（梅本 1983）。A 地点は山麓緩斜面に立地する。ナイフ形石器を主体に、台形様石器、削器、搔器、打製石斧、翼状剥片、横長剥片、同石核、縦長剥片、同石核などを組成とする石器群である。2 時期に細分できる可能性があるが、下層は時期を特定できる器種がほとんどなく、詳細は明らかではない。上層はナイフ形石器文化期後半期新期に位置づけられ、ナイフ形石器に 1 割強の国府型を含む。B 地点は東南東に延びる低丘陵平坦部に立地する。A 地点の南約 50m に位置し、A 地点とは同一地形面上にある。良好な出土状況を示し、大きくは 3 ブロック程度のまとまりを認識できる。ナイフ形石器、角錐状石器を主体に、削器、楔形石器、翼状剥片、同石核、盤状剥片、同石核、縦長剥片、同石核などを石器組成とする石器群で、ナイフ形石器文化後半期古期に属する石器群である。C 地点は A 地点の東に位置し、北東に延びる低丘陵平坦部に立地する。ナイフ形石器、台形石器、角錐状石器、削器、搔器、楔形石器、縦長剥片、同石核、横長剥片、同石核などが出土している。堆積層が薄く、複数時期の石器群が混在する可能性がある。堆積状態は必ずしも良好ではないが、特徴的な器種が出土している。中でも、縦長剥片素材のナイフ形石器、台形石器、角錐状石器（三面加工）は、A 地点の台形様石器などとともに、北部九州の石器群との関連が指摘できる器種である。また、調査区東端部で縄文時代前期前半を中心とする遺物群（縄文土器、石鏃、石匙など）が出土している。

冠遺跡 D 地点は国道 434 号線改良工事に伴って 1988 年に広島県埋蔵文化財調査センターによって行われた（第 1 次調査、妹尾編 1989）。詳細は後述するが、始良 Tn 火山灰の上下から 2 枚の文化層が良好な包含状態で検出された。上層の文化層は、ナイフ形石器、角錐状石器を主体に、削器、石錐、縦長剥片、同石核、横長剥片、同石核などを石器組成とし、ナイフ形石器文化後半期古期の石器群である。下層の文化層

は、台形様石器を特徴とし、削器、搔器、石錐など石器組成とする。ナイフ形石器文化前半期に位置づけられる石器群である。第1次調査に続き、1990年には遺跡の広がりや石器群の内容を検討することなどを目的として広島大学考古学研究室により発掘調査が実施され、北側の浅い谷地形に向かって遺跡が広がっていることが確認された。第2次調査では3枚の文化層が確認され、上層より第I文化層、第II文化層、第III文化層とされた(藤野 1991)。第I文化層は槍先形尖頭器を特徴とし、削器、石錐、楔形石器などを石器組成とする石器群である。第II、第III文化層は、それぞれ第1次調査の上層、下層文化層に対応し、本来の石器群の内容を復元するための重要な資料が追加された。

1991年から10年に亘った広島県教育委員会による冠遺跡群総合調査では、冠高原及びその周辺の分布調査が行われるとともに、冠高原全域に及ぶ試掘調査(報文では発掘調査)が実施された(大上・沖編 1998、沖・久下・岩井・藤野・妹尾編著 2001)。試掘調査は1992～1994年度に1×2mを単位とする調査区(一部1×1m)を合計35ヶ所に設定して実施され、17ヶ所で石器が確認された。1996～1998年度には、従来濃密な遺物分布地点としては認識されていなかったスキー場が位置する丘陵頂上部の発掘調査が実施された(39～56グリッド)。試掘調査、発掘調査では、第10グリッド、第12グリッド、第13グリッド、第24グリッド、第39グリッド、d第51・56グリッド周辺で良好な石器群が検出されている。

第39グリッドは冠遺跡3・5地点(スキー場)南側の丘陵頂上平坦部に立地する。3枚の文化層が確認されている。第Ⅲa層黄褐色土層上位を中心に石器ブロック3(第1文化層)、第Ⅲb層下位を中心に石器ブロック1(第2文化層)が検出され、第Ⅴa層灰褐色粘質土でも遺物(第3文化層)が出土した(沖 1998a)。第1、第2文化層はナイフ形石器文化前半期、第3文化層はナイフ形石器文化後半期である。第1文化層はナイフ形石器、削器、縦長剥片、同石核、横長剥片、同石核を石器組成とする。ナイフ形石器は縦長剥片を素材とし、素材打面側を斜めに断ち切るように調整した部分加工の形態である。第2文化層は、剥片、石核のみで、石器を組成していない。第1文化層、第2文化層は石器ブロックの平面、垂直分布の状況などから独立した文化層として成立し得るかはなお検討の余地がある(藤野 2001)。第3文化層は台形様石器、スクレーパー、剥片が少量出土したのみで、詳細は不明である。

第51・56グリッドは第39グリッドに隣接した南側緩斜面部に設定された調査区で、2枚の文化層が検出されている(大上・沖編 1999、沖・久下編 2000)。第1文化層

は第Ⅲ層黄褐色粘質土層に、第2文化層は第Ⅴ層灰褐色粘質土層（第Ⅴb層下位～第Ⅴd層）に包含される。第1文化層では、縦長剥片、打面再生剥片が少量出土した。詳細は不明であるが、隣接する第39グリッド第1・2文化層の石器群と関連をもつ可能性が高い。第2文化層は第56グリッドの大型剥片、大型石核を中心に遺物が高密度に集中している。一人で抱えるには余りある大型剥片や大型石核があり、接合資料が認められる。素材採取・素材分割に関連した場所と考えられる。出土石器は、台形様石器、ナイフ形石器、尖頭器様石器、搔器、削器、錐状石器、へら形石器などが少量が認められる。台形様石器は3cm以下の小型が主体で、折断加工を主体に成形しており、ナイフ形石器文化前半期古期の様相を示している。

第10グリッドは冠遺跡第8地点の南端部にあたり、2枚の文化層が検出された（沖1998b）。第1文化層は第Ⅰ層下部～第Ⅱ層に、第2文化層は第Ⅱ層に包含される。第1文化層は、槍先形尖頭器石器群で、槍先形尖頭器は中細形木葉形を主体としており、製作を行っている。第2文化層は、ナイフ形石器、石錐、削器、搔器、剥片、石核などを石器組成とし、ナイフ形石器文化後半期に位置づけられるものである。第12グリッド冠高原の中央部に位置し、北東にのびる低丘陵先端部に立地する。従来ほとんど遺物が採集されていなかった地点であり、第Ⅲ層黄褐色土層中でブロックが検出されている（沖1998b）。ナイフ形石器1、錐状石器1のほかは、剥片、石核である。ナイフ形石器は打面転位を繰り返す石核から剥離された縦長剥片を素材とし、素材長辺上半部に調整加工を施した部分加工の形態である。出土層準は第Ⅴ層で、第Ⅲ層の石器群とは時期を異にする可能性がある。第13グリッドはスキー場が位置する丘陵裾部に立地している。第Ⅲ層黄褐色土層下半を中心に遺物が出土している（沖1998b）。ナイフ形石器1、錐状石器1のほかは大半が剥片である。ナイフ形石器としているものは、素材打面側を切断加工によって成形し、素材末端側にもわずかに調整加工を施すもので、台形様石器というべき形態である。第24グリッドは冠高原西端部に位置し、東に延びる丘陵頂上平坦面の先端部に立地している。従来遺物の分布がほとんど確認されていなかった地点である。第Ⅲ層黄褐色土層上半部で石器ブロックと思われる遺物集中部が検出された（沖1998b）。ナイフ形石器3、削器1などのほかは、剥片・石核が主体である。ナイフ形石器は、一側線加工1、部分加工2で、部分加工のうち1点は一側線に近い形態である。

冠遺跡群周辺では旧石器時代～縄文時代の遺跡が知られている。冠遺跡群の約1.5km東には飯山貯水池（甘日市市佐伯町）があり、貯水池の東端部では縄文土器、

石鏃、土師質土器などが採集されている（飯山貯水池遺跡）。冠遺跡群の約 2.5km 南には鬼ヶ城山が位置する。山麓には良質の安山岩が転石（角礫）状態で広く散布しており、北麓では翼状剥片などが採集されているお鉢山遺跡が位置している。遺跡群の約 1.5km 南には飯山集落（廿日市市飯山）があり、縄文時代と思われる石器類が少量採集されている。また、遺跡群の北東約 3km には吉和盆地が位置しており、吉和盆地西南端部では佐伯郡吉和村頓原遺跡（三枝 1983）、半坂遺跡（桑原・道上 1983）が発掘調査されている。頓原遺跡では、ナイフ形石器、角錐状石器、石鏃、楔形石器、両面加工石器、剥片、石核などが出土し、旧石器時代～縄文時代早期の遺跡と思われる。半坂遺跡は縄文時代早期～前期を主体とする遺跡で、土坑、柱穴群などの遺構が検出され、押型文・条痕文などの縄文土器、石鏃、スクレーパー、楔形石器、石錘などが出土した。

2) 冠遺跡 D 地点の立地と調査区

冠遺跡 D 地点は冠高原盆地北西部に位置し、鞍部状の平坦地東緩斜面に立地する。遺跡の西側は南側のスキー場に位置する丘陵の北側尾根裾部と冠山南麓の尾根裾の間に形成された鞍部が幅 50～80 m の平坦部を形成しており、山口県へ抜ける峠となっている。この峠を境に北側では錦川へ連なる深い谷が形成され、南側は冠高原の盆地部が広がっている。錦川は山口県岩国市で瀬戸内海に注ぎ、冠高原を横断する吉和川は太田川と合流して広島県広島市で瀬戸内海に注いでおり、遺跡の西側の峠は分水嶺をなしている。峠を形成する鞍部状平坦地東緩斜面は遺跡付近では傾斜が非常に緩やかで平坦地状であるが、同時に吉和川へと連なる浅い谷頭部にあたっており、遺跡の東側では明瞭な谷地形となり、小河川の東流が始まっている。

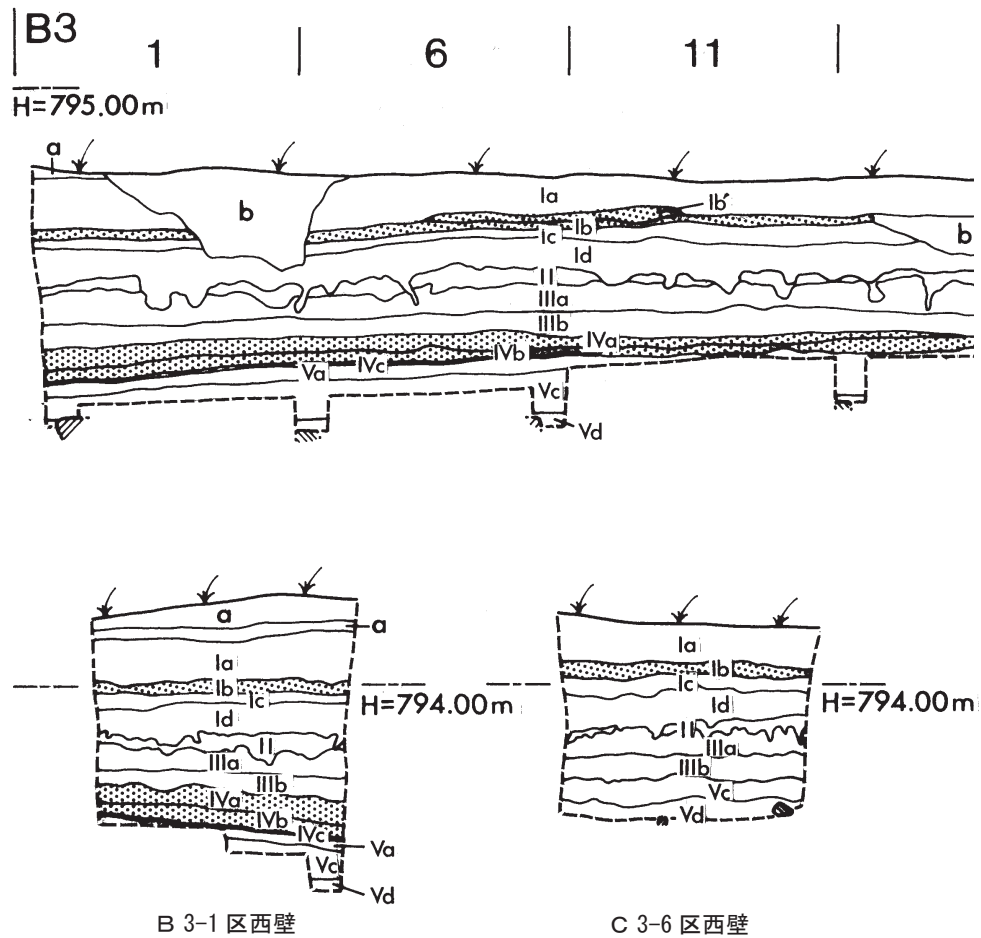
（財）広島県埋蔵文化財調査センターが実施した第 1 次調査の調査区は鞍部状平坦地端から東緩斜面を斜めに横断するように北西－南東方向（谷主軸方向）に設定された。調査区の規模は、幅 5 m、長さ 75 m で、調査区長辺を基線とし、一辺 5 m のグリッドを設定して調査を実施している。調査区名は北西端を 0 区とし、南東に向かって順次アラビア数字を当てて、南東端が 14 区である。調査では、始良 T n 火山灰（以下、A T と略す）の上下で旧石器時代の文化層が検出された。上層は 6～14 区、下層は 10 区西半～14 区で濃密な遺物分布が認められたが、上記の調査区より南東側で急速に遺物の分布が散漫となる状況が観察された。遺跡周辺の地形や遺物の分布状況から見ると、遺跡の中心は峠側の北西半部にあり、上層では北西側約 45 m、下層は北西側約 23 m の範囲が遺跡の中心部と想定される。ただし、峠部の調査は実施しておらず、



第 2 図 冠遺跡 D 地点の調査区配置図
 (網目は第 1 次調査地区、波目は第 2 次調査地区)

遺物分布は峠に向かって広がる様相を示しているので、北西方向に遺跡の範囲はさらに広がると考えられる。

広島大学が実施した第 2 次調査の調査区は、第 1 次調査上層文化層遺物分布の中央部（中央ブロック）である 11 区の東に隣接して、第 1 次調査区に直交する形で設定された。調査区は、11・12 区境界のグリッド基線を北東側に延長し、幅 2 m、長さ（南西－北東方向）14 m の規模で設定され、11 区隣接調査区は第 1 次調査のブロックの規模を検討するために、南東－北西方向に 4 m、東北－西南方向に 4 m の規模で南東側へ拡張して設定されている。調査区の設定は 1 辺 10 m のグリッド（大グリッド）を基本とし、南西－北東方向にアルファベット（西端を A とする）、西北－東南方向

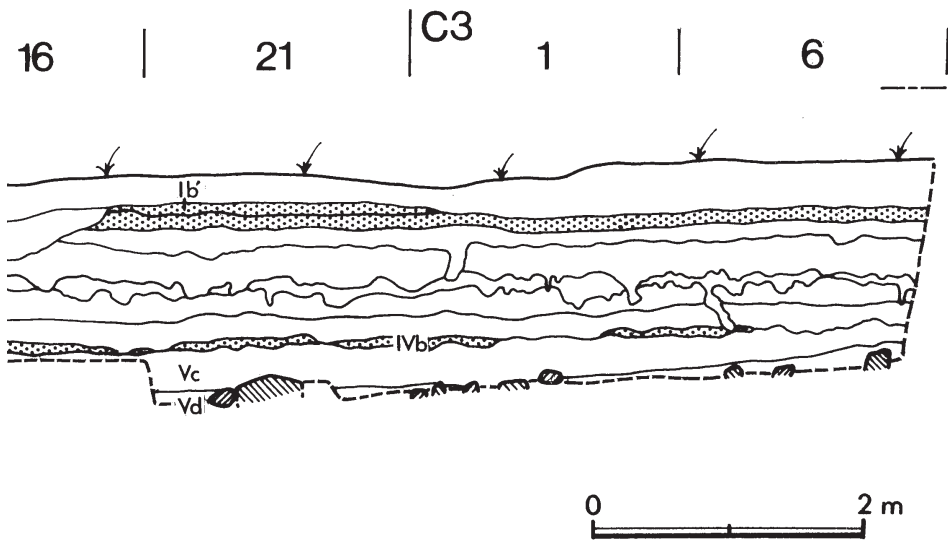


にアラビア数字（北端を1とする）を付し、両者を組み合わせて大グリッド名（B3区など）としており、大グリッドは1辺2mの小グリッドに分割している。小グリッドの呼称は、北西隅を1、南西隅を5、南東隅を25とし、大グリッド名と連結させている。たとえばB3-21区などである。したがって、第2次調査の調査区は、B3-1区～C3-6区（南北調査区）およびB3-2・3・7・8区（拡張区）である。

3) 層序と文化層

層序については、第2次調査が第1次調査の成果を踏襲しているため、基本的には同一である。しかし、第2次調査では第Ic層および第III層について土質や色調などから細分している。以下に基本層序の概要を示す。

客土



- | | |
|------------------|--------------|
| a 客土 | IV 火山灰土 (AT) |
| I 黒色土粘質土 (クロボク) | IV a 淡黄褐色土 |
| I a 黒色土。 | IV b 淡黄褐色土 |
| I b 黒橙色土 (アカホヤ) | IV c 淡橙褐色土 |
| I b' 黒橙色土 | V 灰褐色粘質土 |
| I c 黒色土 | V a 灰褐色土 |
| I d 黒褐色～暗褐色土 | V b 暗灰褐色土 |
| II 暗黄褐色粘質土 (漸移層) | V c 暗灰褐色土 |
| III 黄褐色粘質土。 | V d 灰褐色土 |
| III a 黄褐色土 | VII 礫層 (基盤層) |
| III b 黄褐色土 | |

第3図 冠遺跡D地点第2次調査の土層断面図

第I層 黒色粘質土 (クロボク)。

第I a層 牧場耕作土で、下半部に本来のクロボク堆積土が残されている場所が少なからずある。

第I b層 黒橙色土。喜界アカホヤを主体とする堆積層である。

第I c層 黒色土。

第I d層 黒褐色～暗褐色土。第I c層に比べ色調が明るく、やや黒が脱色したような色調である。また、しまりもよい。

第II層 暗黄褐色粘質土。第I層と第III層の漸移層である。

第III層 黄褐色粘質土。

第III a層 黄褐色土。粘性が強い。

第Ⅲ b 層 黄褐色土。粘性は強いが、第Ⅳ層（AT）を含む砂粒が多く包含され、第Ⅲ a 層に比較してしまりも良い。

第Ⅳ層 火山灰土（AT）。

第Ⅳ a 層 淡黄褐色土。細かい砂粒である。

第Ⅳ b 層 淡黄褐色土。粗い砂粒である。下半は良くしまっている。

第Ⅳ c 層 淡橙褐色土。粘質土である。層厚は数 cm と薄く、第 2 次調査区では調査区西端部で確認できるのみである。

第Ⅴ層 灰褐色粘質土。

第Ⅴ a 層 灰褐色土。

第Ⅴ b 層 暗灰褐色土。細粒砂のブロック状態堆積である。第 2 次調査区では確認できない。

第Ⅴ c 層 暗灰褐色土。安山岩を主体とする小礫を含む。

第Ⅴ d 層 灰褐色土。粘性が強い。

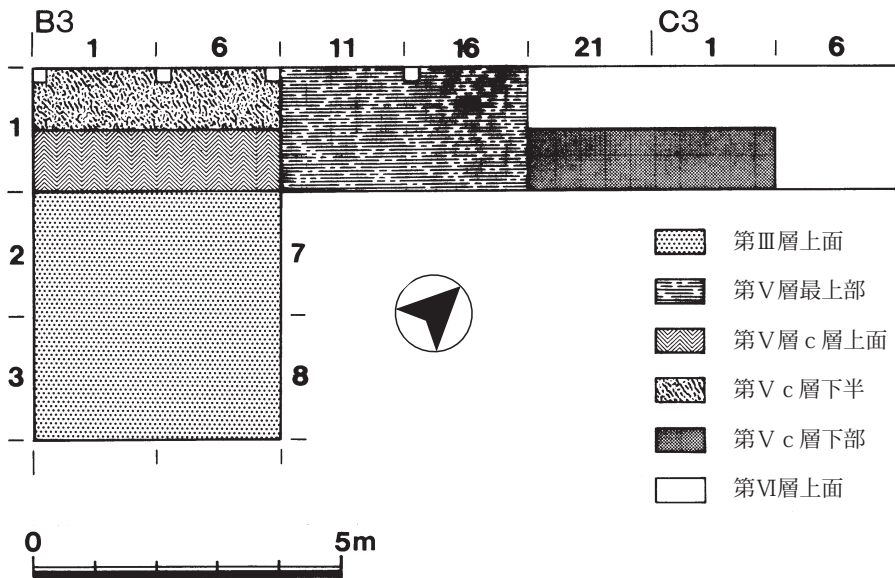
第Ⅵ層 暗褐色粘質土。第 2 次調査区では確認していない。

第Ⅶ層 暗青白色粘質土。第 2 次調査区では確認していない。

第Ⅷ層 礫層（基盤層）。

第 1 次調査では、10～14 区について第Ⅵ層まで調査を実施し、8～10 は第Ⅳ層上面まで調査した後、一部下層の状況を確認した後、遺物分布が認められた箇所では拡張して第Ⅵ層まで調査した。5～7 区は第Ⅳ層上面までの調査とし、0～4 区は第Ⅱ層まで調査した後、部分的に第Ⅳ層上面まで調査したが、旧石器時代の遺物は検出されなかった。第 1 次調査区の地形は西から東へ、南から北へ緩やかに傾斜しており、堆積層も地表の傾斜に沿うように緩やかに傾斜している。

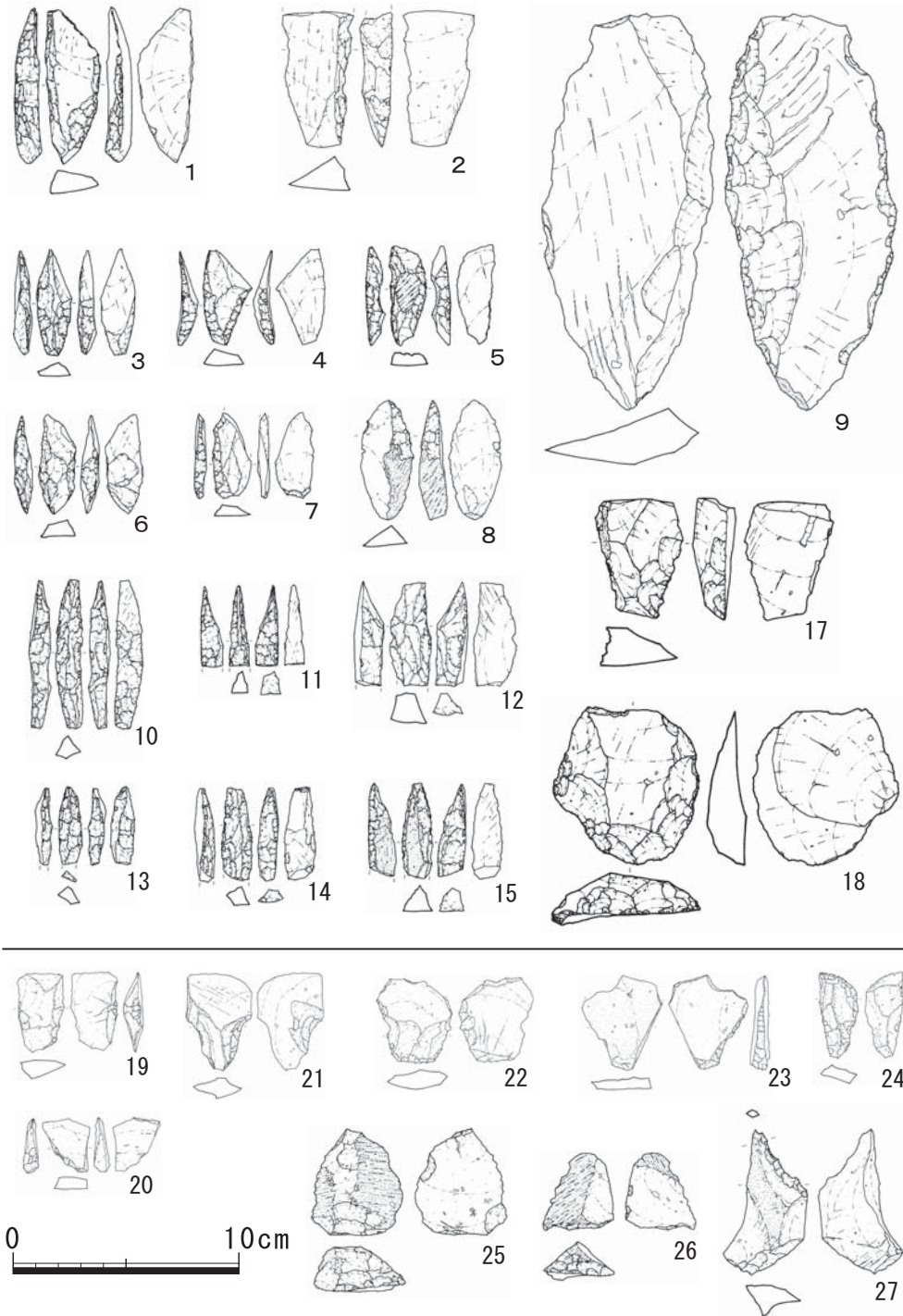
第 2 次調査では調査期間の制約から調査区北東部の B3 - 21、C3 - 1・6 で第Ⅵ層上面まで調査したほかは、小グリッドごとで調査深度を異にしている（第 4 図）。B3 - 1・6 西半部は第Ⅴ c 層上半、同東半部は第Ⅴ c 層最上部までの調査で、B3 - 11・16 は第Ⅴ層最上部、B3 - 2・3・7・8 は第Ⅱ層上面までの調査である。堆積層の北西 - 南東方向の傾斜は第 1 次調査の成果を変更する必要はなかったが、西南 - 東北方向では新たな成果があった。地表の東南 - 西北方向の傾斜は B3 - 1（南）から C3 - 6 区（北）に向ってきわめて緩やかに傾斜するが、礫層上面は逆に C3 - 6 から B3 - 1 区にむかって緩やかに傾斜している。したがって、第Ⅰ c 層以下の堆積層は B3 - 1 区に向って厚さを増すか、調査区の途中から堆積が始まっている。第Ⅳ層（AT）



第4図 冠遺跡D地点第2次調査の調査深度図

はB3 - 16区付近から連続的な堆積を示すが、それより東北側ではレンズ状の堆積となり、調査区東北端部では堆積を確認できない。第V層はC3 - 6区からB3 - 1区に向って厚さを増している。第V a層は調査区の南部にのみ堆積が認められ、B3 - 11区付近で途切れるものと思われる。第V b層については第1次調査では確認されたが、今回の調査区では認められなかった。また、第VI層、第VII層は確認していない。第2次調査区ではC - 1・6区で礫層上面まで調査したが、そのほかは部分的に礫層上面を確認したのみで、第VI・VII層が第2次調査地区まで及んでいないのかどうか判断できない。なお、第1次調査で見られた地層のズレは認められなかった。

次に文化層についてみると、第1次調査では調査区の多数の箇所堆積層が上下にずれているため、垂直分布図の提示はなされていないが、縄文時代が1時期、旧石器時代は2時期の文化層が設定されている。縄文時代は第I c層（原報告では第I c層上半）中心に包含され、第I d層は無遺物層とされている。旧石器時代の文化層は第III a層（原報告では第III層上半）を主体に、第II層下半を出土層準とするものと第V c層下半を主体に第V d層を出土層準とするものである。前者では、石器ブロック3、礫群3が検出された。ナイフ形石器、角錐状石器、削器、搔器、石錐、横長剥片、同石核、縦長剥片、同石核を石器組成とする石器群である（第5図上段）。ナイフ形石



第5図 冠遺跡D地点の第1次調査出土の石器群
 (1～18は第II文化層、19～27は第III文化層)

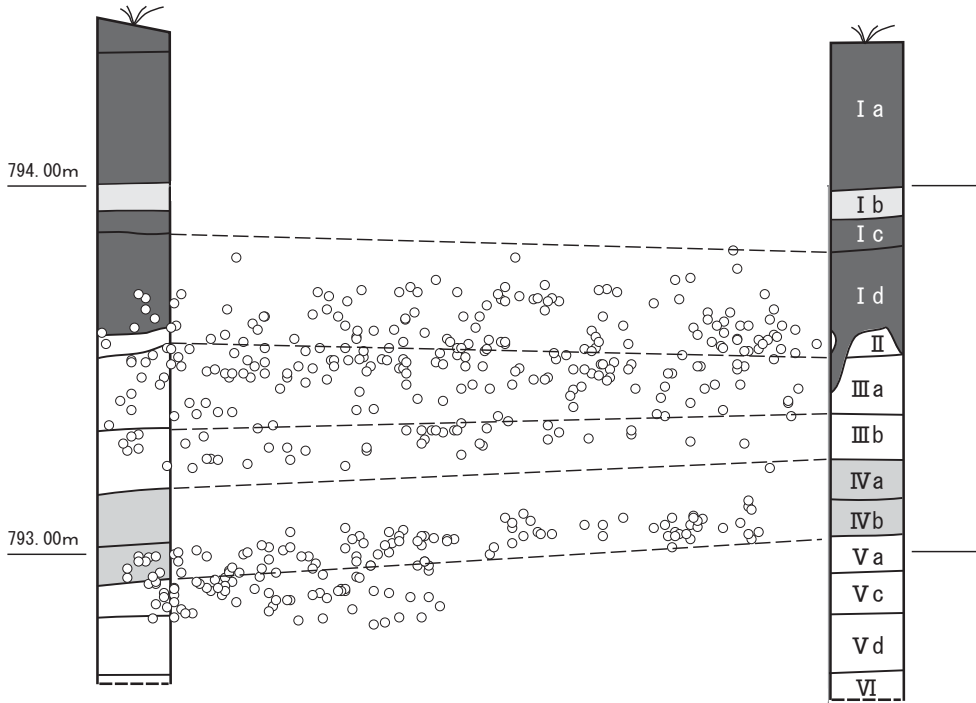
(妹尾編著1989より)

器は横長剥片を素材とした二側縁加工、一側縁加工の形態を主体としており、前者の割合がやや高い。二側縁加工は左右対称形に近く、刃部の長い形態と刃部が大きく斜行し切り出し状を呈する形態があり、後者が主体である。二側縁加工品は素材を斜めに利用しているものが多い。また、冠遺跡第3・5地点で採集されているような長さ15cmを超える大型品が少量認められる。角錐状石器は船底面側に素材面を残すものが多く、甲板面は未調整のものを主体とするが、両面に調整を行う三面加工品も少量組成している。平面形状は細身のもと幅広のものがあるが、調整の入念なものはおおむね細身であり、細身の形態を主とする組成と思われる。接合資料は70個体が検出されており、石核素材の製作から石器製作まで行われている様相を窺うことができる。

後者では、石器ブロック1が検出され、石器ブロックの北西に散漫な分布がいくつか認められる。台形様石器を特徴とする石器群で、搔器、削器、石錐、礫器、剥片、石核などを石器組成とする（第5図下段）。台形様石器は形態に斉一性は見られず、素材の変形は基本的に折断加工によっており、周辺部を平坦な調整を主として成形している。搔器は刃部が直線的で急角度のものが多い。石核は礫や分割礫を素材としており、適宜打面転位して多様な剥片を剥離している。接合資料は16個体が検出されており、石核素材の製作段階も認めることができるが、剥片剥離や石器製作を主としているものと思われる。

第1次調査では、上述のように、ナイフ形石器文化前半期と後半期の2つの文化層が検出された⁽¹⁾。第2次調査で検出された槍先形尖頭器期の文化層は検出されていないが、上層文化層の尖頭器として報告されているものの中に、形態や調整の状況から見て槍先形尖頭器と思われる資料3点が含まれている。また、石錐として報告されている1点も槍先形尖頭器の未成品先端部である可能性がある。第2次調査の成果やこれらの石器の存在からすると、第1次調査区にも少量ながら槍先形尖頭器文化期の活動範囲が及んでいる可能性が高く、第1次調査上層文化層の遺物に一定量の槍先形尖頭器関連資料が含まれている可能性がある。しかし、いずれにせよ、分布の中心は第2次調査区側にあり、第1次調査上層石器群の内容を大きく修正する状況ではない。

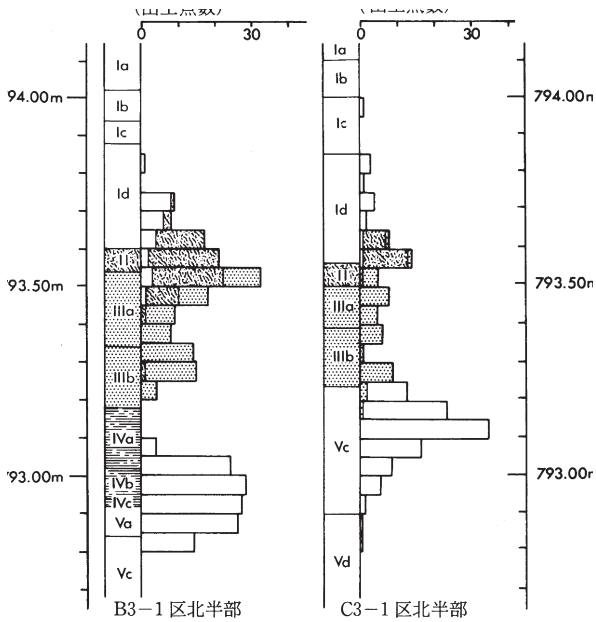
第2次調査では第I a層および第I b層中からはほとんど出土していおらず、明確に縄文時代とすることができる遺物の出土も認められないことから、調査区内における縄文期の活動は皆無か、きわめて希薄なものであったと想定される。遺物の出土状況は出土レベルからみると、第IV層(AT)を挟んで上下に明瞭な分布が形成されている(第6図)。ATより上部では第I c層から第III b層まで連続的な出土状況を示す。



第6図 冠遺跡D地点第2次調査B3-1区出土遺物垂直分布図

出土遺物は第I c層下部～第II層を中心に槍先形尖頭器などが出土し、第III層を中心にナイフ形石器・角錐状石器などが出土しており、この連続的な垂直分布は少なくとも2枚の文化層が重複しているものと想定できる。しかし、AT上位の遺物の垂直分布について詳細に見ると、均質な垂直分布状況でなく、出土レベルに濃淡があることがわかる。ただ、堆積層は東から西へ、北から南へ緩やかな堆積を示すため、出土遺物の断面投影図を作成した場合、調査区全域を対象とした投影図では遺物の包含状態を十分に把握することは困難である。

そこで、B3-1～C3-6区について北西半、南西半の1mずつで東西方向の小区画を単位とした5cmごとの遺物の出土状況を検討してみると、第II層付近にピークをもつものと第III a層から第III b層にかけてピークをもつものが認められた(第7図)。調査区によってはこれら二者のピークの間に明瞭な谷が見られない場合もあり、文化層の線引は必ずしも容易ではないが、上部を第I文化層(槍先形尖頭器を主体とする石器群)、下部を第II文化層(ナイフ形石器を主体とする石器群)と捉えることができよう。また、AT中からも若干の遺物が出土しており、その帰属時期が問題となるが、



第7図 冠遺跡D地点第2次調査調査区別出土遺物垂直分布状況図

(柱状図横の棒グラフは5cmごとの石器出土レベルを集計したものであり、同一棒グラフ内の区分は取り上げ時の出土層を示す)

少している。調査区東部では第V c層上部にピークが認められ、垂直分布は第III b層まで連続している。これは第V a層が欠落し、始良 Tn 火山灰層が途切り途切れのレンズ状堆積を示すなど調査区西北部と堆積環境が異なるためであろう。いずれにせよ、始良 Tn 火山灰層直下の堆積層に垂直分布のピークが調査区の東西で認められ、ここでは同一の文化層として捉え、第III文化層とする。なお、B3-21区では第V c層下部～第V d層でもうひとつのピークが認められるが、この集中部からは時期比定可能な石器などが出土しておらず、検討中である。第III文化層は台形様石器を主体とした石器群を検出している。ところで、第1次調査におけるAT下位の石器群の出土状況は第V c層下半に集中し、第V c層上半には浮き上がっていないとされており、第2次調査の遺物出土状況とは異なっている。B3-21区の第V c層下部～第V d層の遺物は第1次調査の出土資料に対応する可能性もあるが、第2次調査で出土したAT下位石器群の大半は、層的には第1次調査区の石器群より上位に包含されていることとなる。本稿の目的ではないので稿を改めるが、両石器群はほぼ同一の内容を示すものであり、基本的に同一時期の石器群である。第1次調査区の土層のズレが影響してい

ATの堆積状態はきわめて良好で、一部下層からの浮き上がりがあるにせよ、大半は第II文化層に帰属させても大過あるまい。

AT下位の遺物分布は調査区全域において礫層(第VI層)まで調査が及んでおらず、詳細な検討はできない。しかし、調査を実施した部分では始良 Tn 火山灰層直下から遺物が出土しはじめ、礫層上面まで遺物は連続的に出土した。出土レベルについてみると、調査区西部では第V a層から第V c層上部に垂直分布ピークがあり、それ以下では急激に減

るのか、同一時期の中での時間差を示すものなのか、検討すべき課題である。

3. 冠遺跡D地点第I文化層の石器群

1) 出土遺物

第I文化層出土の石器類は総数1569点である。石材の内訳は安山岩1551点、水晶15点、黒曜石1点、玄武岩1点、不明石材1点で、大半は安山岩で占められる。石器組成は槍先形尖頭器、小型幾何学形石器、削器、石錐、抉入石器、楔形石器、加工痕ある剥片、使用痕ある剥片などを主要器種としており、槍先形尖頭器を指標とする文化層である。剥片、碎片には槍先形尖頭器製作に関連するものがかなり含まれている。楔形石器をはじめとする個々の形態からは時期判定が困難な石器類については、隣接の第1次調査区で第I層中より縄文時代の遺物が出土していることから縄文時代に属する可能性があるが、第2次調査区内で明確な縄文時代の遺物が検出されていないことから全て本文化層に帰属させて考えている。

槍先形尖頭器（第8図1～5）7点出土しているが、うち3点は接合しており、個体数は5点である。いずれも製作途上で欠損し、放棄されたものと推定され、細身の中型品を主体とするようである。素材面を残している資料が多く、素材には厚手の剥片を利用している。素材面残存の状況から、素材の形状や素材面を利用しながら製作が進められている。調整の状況はおおまかにみると、左右いずれかの縁辺をまず集中的に調整し、次いでその反対側の縁辺を調整するという方法がとられている。

1は中央部で欠損した2点が接合したもので、完成すれば7.0cm前後の大きさであろう。先端の折損面は成形の比較的初期段階で先端部が折損した際の折損面で、欠損した先端部が本例と接合している（接合資料参照、第31図）。背面下部中央および腹面左半の剥離面が素材面であり、背面側が素材の主要剥離面である。腹面側の素材面は平坦かつ直線的で、そうした特徴を最大限生かして製品の形態に取込みながら調整を進めている。背面側はおおむね入念な調整がなされており、左側縁下部の調整は階段状剥離を生じている。調整のおおまかな順序は、背面右→背面左背面左→腹面右で、背面側の調整はおおむね基部側から先端部に向かって調整されている。本資料は背面左側縁中央の調整剥離の際に2つに欠損している。また、先端部、基部の作出はきわめて不十分であり、素材面を広く残すことなどから製作途上での欠損とみてよからう。2は下部を欠損している。やはり剥片素材で、背面左半および腹面下半に素材面を残しており、腹面側が素材の主要剥離面である。調整は腹面側がおおむね基部から先端部に向って進行しているのに対し、背面左側縁は先端部から基部に向ってなされてい



第8図 冠遺跡D地点第2次調査出土石器 (1) (1/2)

る。背面右側縁の調整は明確な規則性は認められない。調整の順序はおおむね背面左側縁→腹面右側縁→腹面左側縁→背面右側縁で、両面とも比較的入念な調整が行われている。欠損の原因は明確ではないが、先端部の作出が不十分であること、側面形状が整っていないことなどから未製品と判断され、製作途上の欠損と判断される。3は先端部および下半部を欠損している。背面中央～左半および腹面中央部に素材面を残しており、腹面側は素材の主要剥離面である。素材は横長剥片の可能性はある。調整の順序は腹面左側縁→背面右側縁・腹面右側縁である。腹面右側縁では比較的入念な調整がなされているが、全体に調整がやや粗く、広く素材面を残すことなどから製作の比較的早い段階での欠損と推定される。4は先端部のみの欠損品で、やはり両面に広く素材面を残している。剥片素材であり、腹面側が素材の主要剥離面である。素材は横長剥片かもしれない。調整は背面左側縁、腹面右側縁のみで、背面の調整が腹面に先行する。素材面が広く残されている割には厚さが薄く、素材と目的とする製品の形状は大差ないのかもしれない。そうであれば、推定される素材の大きさから製品は小型の可能性はある。5は先端部、基部、背面左側を欠損している。背面および腹面の平坦な剥離は背面左側の折損面（右側面）に先行するが、背面は左側縁中央部の剥離面はこの折損面を打面としている。背面右側縁（左側面）の調整は急角度で、右側面の折損面形成の後の調整かもしれない。両面調整品であるが、折損を考慮するにせよ、縁辺の調整状況や断面形などから槍先形尖頭器とするにはやや問題がある。製作途上で大きく欠損したため楔形石器などほかの器種に転用した可能性が高い。

槍先形尖頭器としては問題のある5を除けば、これらの槍先形尖頭器はいずれも剥片素材である。今回出土の槍先形尖頭器は中・小型品と推定され、1でやや厚手の素材を利用しているものの、全体的に素材剥片は目的とする製品の厚さと比べて極端に厚いものは利用されていないようである。素材の形状を有効に活用しながら槍先形尖頭器製作を行っている様相が窺われる。素材面を広く残しているものが多いことなどからみても製作途中の段階と推定されるが、調整が施されている部分ではかなり入念である。素材全体を万遍なく繰り返し調整するのではなく、素材の形状を最大限生かしながら（場合によっては素材面をそのまま残しながら）製品に仕上げているものと推定される。本文化層の槍先形尖頭器製作の特徴といえるかもしれない。また、今回出土の槍先形尖頭器については欠損品を中心とし、いずれも未製品と推定されるため本来目的とした形状を推定するのはやや困難である。しかし、1・2は全形を窺うことができ、細身の形態である。調整が進めばさらに細身になる可能性が強く、目的と

する形態は柳葉形であろう。3は器体の一部にすぎないが、両側縁は平行気味で比較的長手の器体が想定される。背面側の調整の進行具合からみて、製品となるまでにはかなりの調整が必要で、やはり柳葉形に仕上げられる可能性が強い。4は先端部のみで形態を決しがたいが、幅広の形態ではなさそうである。以上のように、今回出土品のみで見れば、第I文化層の槍先形尖頭器は中型の柳葉形を主体とする組成といえる。

小型幾何学形石器(第8図6～11) 三角形、台形など幾何学形の平面形状を呈する。素材の鋭利な縁辺を原則として1辺残し、その他の素材両辺に細かな調整を施しており、折断加工を併用する場合(6・8・10)もある。また、素材打面が残置され、縁辺の一部をなす場合(8・11)がある。刃部と考えられる縁辺には細かな剥離痕が残されている場合が多い。大きさはきわめて小型で、長さ1～2cmを主体とする。素材を横位に用いるもの(6～9)と縦位に用いるもの(10・11)がある。6点を検出したが、これらはかなり調整が連続的かつ顕著なものである。後述する加工痕ある剥片A類・B類は本器種の1類型とみなすことが可能で、そうであれば合計25点の出土となる。6は背面左側縁全体に細かな調整を連続させ、背面右側縁は折断加工している。上側縁にも連続的な剥離痕が認められるが、大きさなどが不規則で、使用痕の可能性が強い。腹面左側縁中央部に素材打面がわずかに残されている。7は素材打面部(背面右側縁)に腹面側から平坦な調整を連続的に施している。背面左側縁は素材縁辺がそのまま残されているが、蝶番剥離気味である。素材は槍先形尖頭器の調整剥片かもしれない。8は背面右側縁を折断加工の後、微細な調整を施している。背面左側縁は素材の打面で、未加工のまま利用している。9～11は非常に小型で、9はやや肉厚な剥片を素材としている。背面右側縁に急角度の調整を施している。調整は入念である。背面左側縁下端にもわずかに調整加工を施しているが、微弱である。10は先端部を欠損しているが、形状は大きく変化していないものと思われる。全体の成形は背面右側の折断によって(右側面の中央～上部は折断面)おり、背面左側縁および背面右側縁下端部に調整加工を施しており、両者は錯交剥離となっている。11は背面左側縁に平坦な調整を施している。背面右側縁は折断面であるが、素材剥離時に折れたものと思われる。下端部は素材打面で、そのまま残されている。

ところで、これら小型幾何学形石器とした器種と同様の石器は冠遺跡第10地点(12トレンチ拡張区)においても検出されており、「ナイフ形石器」として報告されている(三枝1982)。この第10地点出土の「ナイフ形石器」は、本地点同様、槍先形尖頭器に伴って出土しており、素材、大きさ、形状、調整法も共通した様相が認められ、

近接した時期の同種の石器とみてよからう。

石錐（第8図12～18）出土点数は8点を数える。大型（15・17）と小型（12～14・16・18）があり、錐部は未製品と思われる16を除けば断面三角形である。錐部の形状は鋭利なもの（12・14・18）とやや幅広で鈍いもの（13・15・17）があり、小型は概して前者である。錐部の作出位置は素材末端部の左右いずれかの角を利用するものが多い。調整加工は基本的に背面側の錐部周辺のみで、しかも錐部の左右いずれか一方の縁辺を主体的に加工して大まかな錐部の形状を作出しているものが多い。12はきわめて小型の剥片を素材としており、調整はわずかで錐部を中心としている。背面右上半を折断し、背面左側縁上半に微細な調整をわずかに施している。素材打面は残置されている。13はやや厚手の横長剥片を素材としており、調整加工は粗く、錐部に集中している。調整は背面右側縁上部が主体で、背面左側縁上部は加工痕は1枚のみである。下端部は急角度の調整で、素材末端部の鋭利な部分を除去しているのであろう。14は錐部周辺に調整加工を集中させている。左側面は素材剥離時に生じたと思われる折断面で、この折断によって素材はある程度先細り形状を呈していたものと考えられる。そのため、調整加工は折断面の反対側（背面上側縁）のみで、急角度の調整加工を中心に内湾状に施し、錐部を作出している。右側面も折断面で、形状を整えるための調整かもしれない。背面には広く自然面を残している。15は背面左側縁上半を主体に調整加工を施して幅広の錐部を作出しており、錐部背面右側は1枚の調整のみで形状を整えている。背面右側縁下端部にも調整を施して形を整えている。素材は槍先形尖頭器の調整剥片と思われる。16は背面上半部の両側縁に粗い調整加工を施して錐部を作出している。若干欠損しているものの、先端は鋭利さに欠け、調整の状態から見て未製品の可能性が高い。背面中央の稜線部（右側面左側縁上半部）や背面右側縁下半部（右側面右側縁下半部）に細かな調整を連続させており、鋭利な縁辺を調整しているのであろう。背面右半の大きな剥離面は素材主要剥離面である。17・18ともに錐部の調整加工は背面右側縁のみで、反対側は素材縁辺をそのまま利用している。17は錐部以外にも背面上側縁右端部、背面下側縁左端、腹面下側縁中央などにも細かな剥離痕が連続しているが、意図的な調整かどうか定かではない。背面右側縁の細かな連続した剥離痕は素材打面周辺の調整痕で、やや潰れ気味である。18の調整加工は錐部のみである。17・18ともに素材は調整剥片と思われる。

抉入石器（第8図19・20、第9図21）出土点数は3点で、幅広の剥片を素材とし、長辺部あるいは短辺部に抉り部を設定している。19は背面右側縁に入念な調整を施

してかなり深い抉入部を作出している。腹面右側縁にも調整加工を連続させており、浅い抉入部が2ヶ所形成されている。背面側が素材の主要剥離面である。20は素材の下端部に浅い抉入部を作出しており、抉入石器としてはやや異例である。背面左側縁にはきわめて大まかな調整を施しており、背面右側縁下端部にも粗い調整を行っている。搔器的な機能をもつものかもしれない。21は背面左側を大きく欠損し、下端部も欠損している。背面右側縁下半に比較的急角度の調整加工を施して、緩やかな抉入部を作出している。上半部にも剥離痕が連続しているが、刃こぼれ状の剥離で、加工とは認めがたい。

削器(第9図22～27) 6点を図示しているが、22を除けば典型的な削器とは言いがたいものも多く、形態的にも共通性に乏しい。22は細身の形態で、背面左側縁中央～上部および腹面左側縁上半に入念な調整加工を施して刃部を作出している。背面左側縁の刃部はやや内湾気味、腹面左側縁の刃部はやや外湾気味である。また、調整は前者は細かな剥離を連続させ、後者は平坦な剥離を主体としている。腹面左側縁下部に刃部作出後の調整加工が認められ、この加工に接して見られる剥離痕は素材のバルバスターである。素材剥離時に打面周辺を欠損しているが、打面はわずかに残されている。打面は本来的に小さかったものと見られる。23は背面左側縁下部に調整を施し、刃はやや内湾気味である。腹面左側縁中央部に細かな剥離痕が連続しており、使用痕かもしれない。24は上部を大きく欠損している。背面左側縁上半部および腹面左側縁下半部に調整加工を施している。背面側の調整は細かな調整が主体であるが、調整角度や連続性などから見て刃部としてよかろう。腹面側の調整はやや粗いが安定した刃部を作出している。25は素材打面側に刃部を設定している。やや特異な例であるが、素材打面は点状もしくは線状であったのであろう。腹面左側縁および背面右側縁下半に調整加工を施し、くの字状の刃部を作出している。腹面左側縁下半に刃こぼれ状の細かな剥離痕(背面下端にも連続している)が認められる。26は先端部のみの欠損品で、全体の形状は不明である。背面左側縁に調整剥離が連続しており、対応する腹面右側縁にも1枚の剥離痕が残されている。27も欠損品で、下半部を欠いている。小型品である。背面左側縁下半に調整加工を施しており、欠損部にも調整は連続している。

楔形石器(第9図28～31・33～35) 大きさは小型(28～31・34)を主体に、中型(33)、大型(35)がある。調整加工が顕著なもの(28・30・31)と調整加工が素材周辺を主体とし、素材面を広く残すもの(28・34・35)もある。裁断面を有さないものは左右、



第9図 冠遺跡D地点第2次調査出土石器(2)(約1/2)

上下とも縁辺が潰れているものが多い。28は上下縁辺を中心に剥離痕が連続しているが、背面下側縁（腹面上側縁）側が潰れている。背面の大剥離面が素材主要剥離面である。29は左右側面が裁断面である。右側面上端の剥離面は下方向の裁断面を切っており、左側面の裁断面と同時に生じたものと判断され、右側面の裁断面が生じた後も使用されている。下端部に機能部としての縁辺が残されており、潰れている。腹面は剥離面1枚で構成され、素材面の可能性が強い。30は左右側面が裁断面であり、上下側縁が潰れている。大きさに比較してやや厚手である。31は削片である。左側面が裁断面で、背面左側縁、腹面右側縁に上下端を中心に弱い潰れが認められる。33は腹面左半の大きな剥離面が周囲の剥離面を全て切っており、使用に伴うもの（裁断面）であろう。背面右側縁を除きその他の縁辺は潰れているが、背面下側縁はやや潰れが弱い。背面中央に自然面を残し、腹面左半上部の下方向からの剥離面は素材面かもしれない。34は上側縁が潰れており、機能部であろう。下側面は折断面状で、使用により生じた可能性が強い。右側縁は左右からの剥離方向を示す折断面であるが、裁断面かもしれない。背腹面に広く素材面を残しており、背面が素材の主要剥離面（中央部で蝶番剥離を生じている）である。35は右側面は折断面で腹面側にわずかに調整が見られるのみで、腹面下側縁は粗い調整が施されているだけで潰れは認められない。背面左側縁、背面上側縁、腹面右側縁には入念な調整が認められ、縁辺も潰れている。これらのことから、背面左側縁、上側縁が対象物に接して機能したものと推定される。腹面の大半を占める大剥離面は素材主要剥離面で、背面中央部の上方向からの剥離面も素材面の可能性が強い。

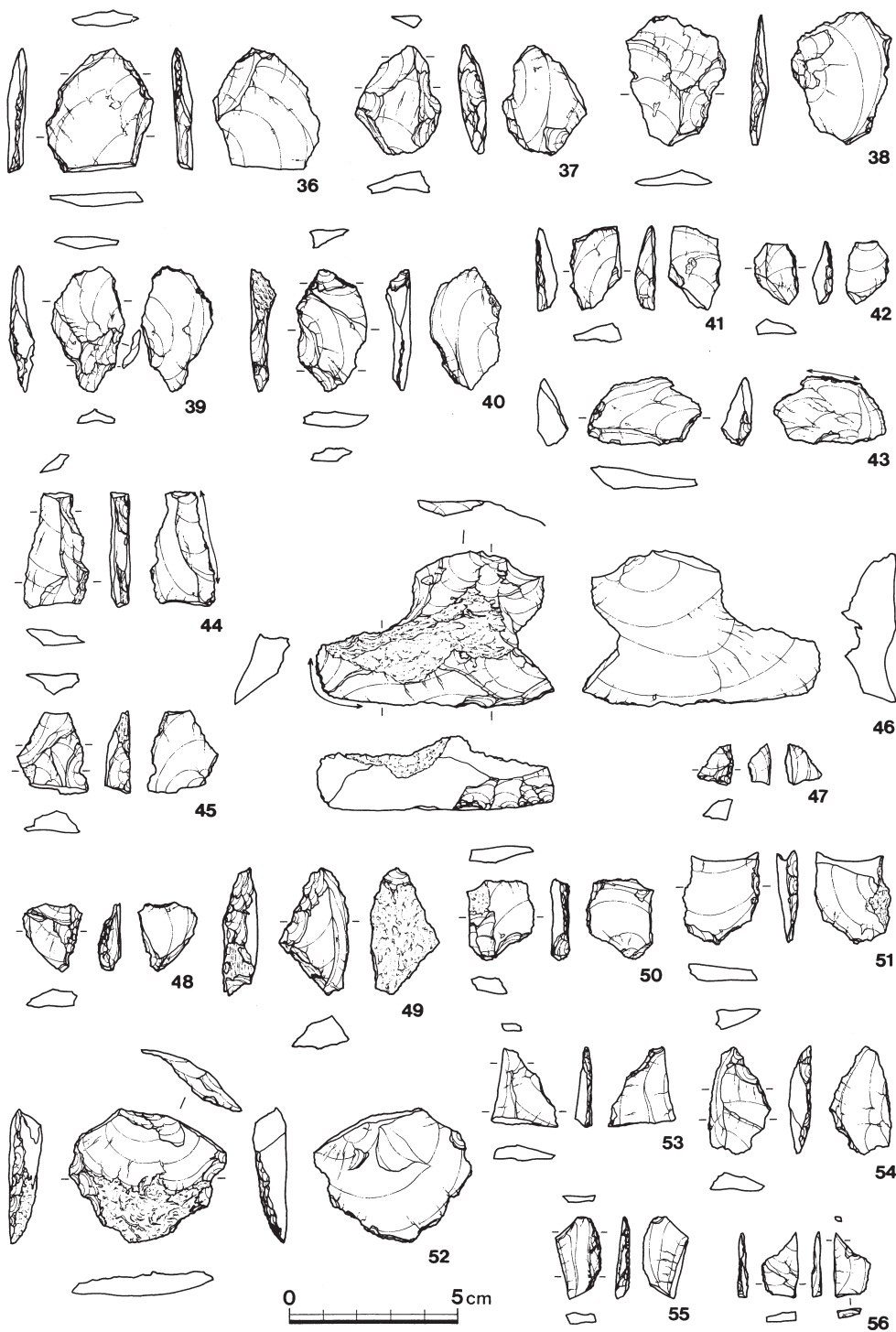
細石核様石器（第9図32）厚手で縦長の剥片を横位に用い、素材の末端部に細石刃様の剥離を施している。作業面（右側面）右半には左方向からの剥離面が残されており、まず最初に素材末端部の折断が行われた可能性がある。その後、上側面の自然面平坦部を打面に上方向から数回の直接打撃と判断される打撃が加えられている。得られた剥片は不規則な形状と思われ、細石核とはいいがたい。また、彫器とするには刃部形状や角度の問題がある。用途不明である。

加工痕ある剥片（第10・11図）定型的な石器以外で、加工痕の認められるものを一括した。加工痕の認定にあつたては連続性を重視しているが、数枚の剥離面で構成される場合でも素材を大きく変形しているものについては加工痕とした。また、「使用痕」との区分は剥離痕の大きさ、素材の変形度、剥離角などを基準にした。連続する比較的微細な剥離痕を加工痕として認定した場合もあり、「使用痕」との区分につ

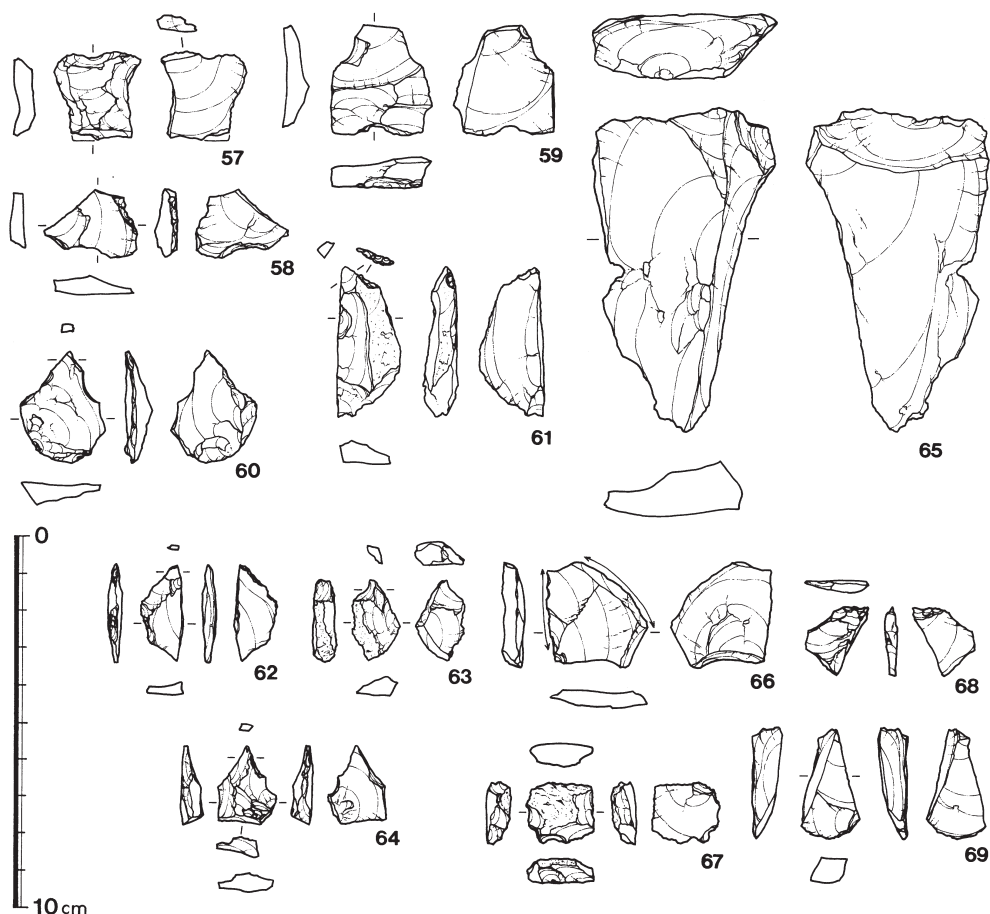
いては必ずしも明瞭でない部分もあるが、それらについては一部に明瞭な素材の変形を含んでおり、使用痕の状況とは異なっている。

61点を確認した。これらは形状や加工部位、加工痕の状態などから8類型に分類できる。A類は素材の一辺あるいは二辺に調整を施し、素材の鋭利な縁辺を一部に残しているもの(第10図36～46)で、調整はやや微細なものからブランディング状のものまでさまざまである。B類は折断加工によって素材を大きく変形し、折断面から平坦な調整を連続させるものである(第10図47・48)。C類は素材の一側縁を中心に調整が連続するもの(第10図49～56)で、調整が施されている縁辺以外はいずれも急角度で機能部としては不適である。調整痕の大きさは不揃いである。D類は素材縁辺の一部にノッチ状の調整を施しているもの(第11図57～59)で、通常の抉入石器に比較すると調整がきわめて粗い。E類は粗い調整あるいは微細な調整によって尖頭部を作出しているもの(第11図60～64)で、微細な調整を施すものは折断を併用するか素材の形状を巧に利用している。F類は1枚もしくは数枚の調整によって素材を大きく切断しているもの(第11図65・66)で、一部に素材の鋭利な縁辺を残しており、それらの縁辺には使用痕が認められる。G類は素材縁辺のほぼ全体に調整が施されるもの(第11図67)で、H類は側面が折断面あるいは折断面状の剥離面で構成され、残りの素材縁辺に調整が施されるもの(第11図68・69)である。

次に類型ごとに概観してみよう。A類は19例検出した。調整はさまざまであるが、やや微細な調整を主体とするもの(36・39・42・43)、1～数枚の粗い調整(折断を含む)を主体とするもの(37・44・45)、平坦な調整を主体とするもの(38)、急角度の調整を主体とするもの(46)、それらの調整が複合するもの(40・41)がある。また、一部に残されている素材の鋭利な縁辺には微細な剥離痕(図中の $\leftarrow\rightarrow$ 印。以下、同様。)が多くの場合認められる。36は背面右側縁上部、左側縁下半部、腹面左側縁上端部に細かな調整を連続させており、背面左側縁の調整は両面からやや不規則に剥離している。背面右側縁下半は折断面⁽²⁾状の剥離面であるが、素材の打点部に当たっており、素材打点部周辺を除去するための調整の可能性が高い。下端部は折断面であるが、調整痕が切っている。37は背面右側縁上半に粗い調整施して素材打点部周辺を除去している。調整に続く下半部は素材打面が広く残されている。背面左側縁の大半は折断面で、上端部にわずかに素材の鋭利な縁辺が残されている。腹面右側縁下端に1枚のみであるが折断面からの調整が認められる。38は背面右側縁に平坦な調整を行い、素材打面ををほぼ除去している。39は背面左側縁下半に比較的細かな調整



第 10 图 冠遺跡D地点第 2 次調査出土石器 (3) (1/2)



第 11 図 冠遺跡D地点第 2 次調査出土石器 (4) (1/2)

を施し、対応する縁辺には素材打面が残されている。40 は背面左側縁下半に粗い調整を施して素材打面部を除去し、腹面左側縁下半に微細な調整を行って尖り気味の基部を作り出している。背面右側縁先端にも調整を施している。41 は背面右側を折断ののち素材打点部周辺を断ち切るように背面右側縁下半に調整を施し、背面左側縁にも急角度の調整を連続させている。上側縁に素材の鋭利な縁辺を残しているが、発掘時の欠損面で覆われていて使用痕の有無は不明である。42 は背面右側縁に比較的細かな調整を連続させおり、腹面左側縁下端部にも剥離痕が認められる。腹面右側縁中央は折断面で鋭利な縁辺は上端部のみである。背面右半の素材剥離面はポジティブ面である。43 は背面左右両端から下側縁にかけて調整を施している。右側縁側は急角度で、左側縁側は平坦な調整である。44 は背面右側縁に不規則に調整痕が認められる。

腹面右半は折断面で、微細な剥離痕が不連続ながら全体に残されている。45は上下を欠損しており、背面右側縁に調整痕が認められる。1枚の粗い調整痕を中心にその上下に細かな調整痕が認められる。46は背面下側縁右半に急角度の調整を連続させている。下側縁以外の縁辺は折断面や素材打面などで、鋭利な縁辺はない。なお、56は背面右側面の折断面が意図的なものかどうか不明だが、A類に属する可能性が高い。

B類はわずか2例のみで、小型品である。いずれも平面は三角形を呈する。47は右側を折断の後、折断面を打面として背面側に細かな調整を連続的に施している。48も47と同様な製作状況で、上部2/3に平坦な調整が連続している。腹面右側縁下部は折断面である。

C類は9例検出した。調整痕の認められる縁辺以外は、刃部として不適な自然面、素材打面、折断面などで、多くは折断面である。折断面の成因として使用による折損も含まれ、本来は鋭利な素材縁辺を有していたものがあるかもしれない。49は背面上半に粗く調整を施しており、素材打面部を除去している。腹面先端部に剥離痕が認められ、背面側の調整を切っている。左側面下端部にも剥離面が認められるが、背面右側の折断面によって切られている。50は背面右側縁下端部に粗い調整を施し、腹面上半にやや急角度の調整を連続させている。背腹面で調整がほとんど重複せず、相互補完的に連続する。腹面右側縁の折断面は素材剥離時に生じたものと思われる。51は上半を欠損している。背面右側縁に急角度の調整を連続させているが、下半部は折断状の調整痕である。52は背面左右側縁を中心に不規則な調整を施している。背面左側縁中央部は比較的整った調整であるが、鋸歯縁気味で、上部は折損状の剥離面である。背面右側縁上半は不規則な大きさの剥離痕が連続し、下半は折断状の小剥離痕が連続している。腹面側にも剥離痕が認められ、おおむね背面に先行する調整である。53は腹面左側縁に調整を施している。調整は背面側からの加工を主体としており、折断面状の剥離痕が多い。54は背面右側縁上半に調整を施した後、腹面左側縁下半に調整を施している。背腹面で調整の重複がほとんどなく、相互補完的に調整が連続している。55は背面右側縁に比較的微細で急角度の調整を連続させている。調整の施されいる縁辺以外はいずれも折断面である。

D類は4例を検出した。抉入部の形状は1～2枚の剥離面で作出されている。57は背面上部に1回の調整で緩やかな抉入部を作出している。58は腹面下側縁に2回の調整を施してやや広めの抉入部を作出している。背面右側縁などに急角度の調整を施しており、上部の欠損部にも調整は続いているようである。59は背面下側縁に調

整を施して抉入部を作出している。抉入部の形状は中央の剥離面で作出されており、その左右に細かな調整が施されている。

E類は6点検出した。尖頭部の成形は素材の形状を利用するもの(60・63)と折断によるもの(61・62・64)がある。60は背面右側縁に折断状の調整を連続させて全体の形状と尖頭部を作出している。背面右下端部にも剥離痕が認められ、側面の調整痕を打面にして剥離している。61は背面右側縁上端および腹面左側縁上端に微細な調整を施して尖頭部を作出している。背腹面下端部や腹面左側縁中央などにも調整を施しており、全体の整形と考えられる。62は腹面右側縁先端部に微細な調整を施して尖頭部を作出している。背面左側縁にも調整を施し、形状を整えている。63は腹面1回の加工で先端部の厚さを減じ、次いで背面左上端部に急角度の調整を行って尖頭部を作出している。64は背面左側縁側を折断加工によって成形し、背面右側縁側は腹面側からの加工を主体に急角度の調整を行って、尖頭部を作出している。

F類は4例検出した。65は右側面は折断状剥離面で、成形を目的とする可能性がある。右側面の折断状剥離面の上端部に一枚の調整が加えられた後、1回の加工で上端部の素材形状を大きく変形している。66は下端部に背面側からの1回の加工で素材打面が除去されている。背面左右下端にそれぞれ剥離痕が1枚認められ、素材打面除去に先行する調整かもしれない。背面左側縁や右側縁の素材の鋭利な縁辺には微細な剥離痕が連続している。

G類は3例検出した。図示した1例(67)は背面左右側縁および下側面に粗い調整が連続し、上側縁は急傾斜の自然面である。腹面側にも若干の調整が施されている。

H類は2例検出した。68は上側縁の両面に丁寧な調整が施されており、縁辺は潰れている。背面右側縁(右側面)および背面左側縁下部は折断面であり、下方からの下撃によって同時に形成された可能性がある。69は背面下側縁右半に急角度の調整が認められ、左右は背面側からの折断面である。

これまで見てきたように、加工痕ある剥片は定形的な石器以外の石器を一括しているため、多様な形態があり、機能的にもいくつか分類される可能性が高い。石器の機能としては、切裁、削搔、刺突、穿孔、敲打などが推定され、機能により刃部の形状や角度、肉眼的に観察される使用痕などが異なると想定される。まず、各類型の機能部を推定すると、A類は素材縁辺が残されている。角度^③は20～55°に主体があり、最大でも65°で、縁辺部は鋭利な状況を示す(第2表)。この縁辺部にはしばしば微細な剥離痕が残されており、この部分が機能部である可能性が高い。ところで、

第1表 加工痕ある剥片類型別の加工部
角度分布一覧

類型 角度	A	B	C	D	E	F	G	H
0								
5								
10								
15								
20								
25								
30								
35								
40								
45				1				
50	3							
55						3	1	
60	2		2					1
65	2		1	1				
70	3		1	1	2			
75	4	1	2		1	1		1
80	3		3	1	1		1	
85	1				1		1	
90	1				1			
95								
100								
105		1						

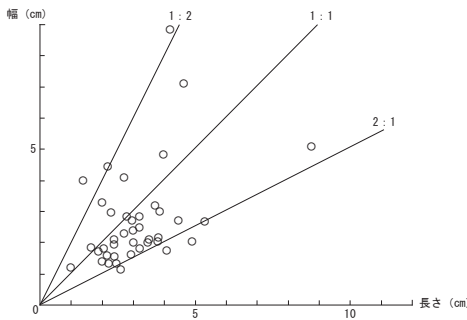
第2表 加工痕ある剥片類型別の機能部
(刃部) 角度一覧

類型 角度	A	B	C	D	E	F	G	H
0								
5								
10								
15								
20	3	1				1		
25	2							
30	1							
35	4							
40	2					1		
45	1			1		1		
50	2	1						
55	3						1	
60			2					1
65	1		1	1				
70			1	1	2			
75			2		1	1		1
80			3	1	1		1	
85					1		1	
90					1			
95								
100								
105								

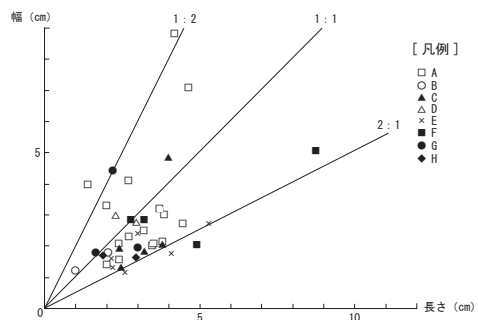
A類の加工痕は細かな場合が多く、加工の角度は70～80°に主体があり、60°以下の資料も若干存在する（第1表）。加工部縁辺が比較的鋭利な刃部としての角度を保持している場合もあり、加工部を機能部として想定することができる資料もわずかながら存在する。しかし、加工部を機能部とするには刃部の長さや加工状況の不揃いさなどの点で無理がある。やはり、残されている素材縁辺部を機能部と捉えておくのが妥当であろう。B類も鋭利な素材縁辺が残されており、それぞれ20°、50°である。折断部分は急角度であり、この部分に加工が施されている。加工は折断面から素材背面に施されており、加工部の角度は75°と105°である。加工が平坦な剥離であるため、素材折断時の角度とほとんど変化なく、むしろ角度がさらに鈍角になる場合もある。したがって、A類同様、素材縁辺部が機能部と想定される。C類は加工部位以外の縁辺は機能部としては適さない形状で、加工角度は60～80°に集中しており、比較的急角度である。加工部位は一定の範囲に及んでおり、直線的な縁辺と曲線的な縁辺があるが、前者が主体である。刺突に適した尖頭部は形成されていないことから、加工部が機能部と推定される。D類は加工部以外は折断面で構成されている場合が多い。加工部が内湾するという特徴ある形状を示しており、加工角度は65～80°で急角度が主体である。折断の偶発性に問題が残るが、加工部が機能部である可能性が高

い。E類は加工部が尖頭形を呈するという特徴ある形態を示す。加工角度は70～90°と急角度で、加工部以外は折断面、打面や自然面など機能部としては不適なものが多い。加工部位を機能部と考えるのが妥当であろう。F類は素材の鋭利な縁辺が広く残されており、微細な剥離痕が認められる。素材縁辺部はそれぞれ20°、40°、45°、75°である。全体から見ると加工部の占有率は小さいが、素材の変形度が大きく、加工角度は55～75°と比較的急角度である。素材縁辺が機能部と想定される。G類は縁辺全体に加工が施されており、平面は方形で尖頭部などの作出はない。加工角度は全体に急角度気味であるが、25～85°とバラツキが大きい。背面・腹面の素材面に使用痕は認められない。これらから、縁辺の一部または全体が機能部と考えざるをえない。H類は加工面を折断面が切っており、本来の形状の復元は困難である。縁辺の一部または全部が潰れているが、本来の縁辺は鋭角である（加工部の角度はそれぞれ60°、75°である）。縁辺部が機能部であろう。

大きさおよび形状について見ると、長さ、幅が5cmを超える資料は極めて少なく、比較的小型の資料が多い（第12図）。これは第1文化層出土の剥片の大きさと同様の傾向を示しており、槍先形尖頭器を除く定型石器の傾向とも基本的に一致している。長幅比についてはの2:1と1:1の間におさまる資料が多く、1:1と1:2の間におさまる資料を大きく上回っている。これは、後述の剥片の長幅比が1:1と1:2の間に片寄っているの対照的であり、素材の使い方と加工の結果によるものと思われる。類型別に大きさを検討する（第13図）と、A類は大きさの点では広範な分布を示し、長さ、幅ともに4cm以下の範囲にあり、加工痕ある剥片全体の大きさと同様範囲にあり、長幅比は1:1と2:1の間に片寄っている。A類は長軸に対して機能部(刃部)が平行するものと直交するものがあり、A類は後者の一部は類型の傾向とは異なり長



第12図 加工痕ある剥片長幅相関図



第13図 加工痕ある剥片類型別長幅相関図

幅比が1:1と1:2の間に位置する。B類は長さ、幅ともに約2cm以下と非常に小型で、長幅比はほぼ1:1、平面形は三角形である。C類も大きさの点では広範な分布を示す。長幅比では2:1寄りに分布が集っており、縦長の資料が主体となっている。横長の1点は平面形が楕円形に近い。D類は大きさの点ではややバラツキがあるが、2cm前後の小型品が多い。長幅比では1:1前後に集中しており、平面形も方形を呈している。E類も大きさの点ではバラツキを示すが、2～3cmの小型品と4～5cmの中型品があるといえるかもしれない。長幅比は1:1と2:1の間に納り、2:1側に片寄り気味で、縦長の形状で構成されている。F類はわずか3点で、大きさ、長幅比の点でもバラツキが大きく、傾向性を指摘できないが、加工痕ある剥片の中では大型に片寄っている。G類、H類は傾向性の指摘は困難である。

以上、類型別を中心に、機能部の推定と加工角度、大きさ、長幅比などの特徴を検討してきた。最後に各類型の機能について言及する。詳細な機能推定には使用痕の研究が不可欠であるが、安山岩では厳密な意味での使用痕の検出が困難である。ここでは、機能部の形態や刃部角度などから大まかな機能推定を試みたい。

ここでは、加工痕ある剥片を8類型に分類した。各類型はそれぞれ異なった機能を有するものと推定され、機能部の角度や形状がそれぞれ異なっているが、加工部が機能部（刃部）と推定されるもの（C、D、E、G、H類）と加工部は成形の役割を有し、残置された素材縁辺などが機能部と推定されるもの（A、B、F類）の大きく2つにまとめられる。A類は一部に残された素材縁辺を刃部とする。刃部は直線的で、角度は60°以下を主体とし、鋭利である。これらの機能部の特徴は切裁具として適した形状といえる。刃部は長軸に平行あるいは斜行するものと直交するものがあり、前者が主体である。両者の刃部の形状に大きな相違はなく、機能的には同一であるものと考えられる。これらは小型幾何学形石器と関連性が強く、加工度や形状の安定性がやや弱いものの、同種の石器と考えたい。B類も一部に残された素材縁辺部を刃部としている。やはり刃部は直線的で、角度は鋭角である。いずれも小型であるが、切裁具としての機能を有するものとみられる。平面三角形の形状を示し、小型幾何学形石器に比較して加工度が弱いものの、その一類型に分類される可能性が高い。C類は主軸に平行あるいは斜行する加工部を刃部とする。刃部は直線的で一定の長さを有する。刃部角度は60～80°とやや急角度である。削器や搔器に比較して刃部の加工状態に安定性を欠くが、同様の機能をもつ可能性が高い。直線的な刃部は削器的な機能に適しているかもしれない。また、平面楕円形に近い形状で、両側縁に刃部を有する資

料（第10図52）はやや外湾した刃部で、搔器的な機能かもしれない。D類は内湾する加工部を刃部とする。抉入石器に比べ内湾度や規模、加工度が貧弱であるが、機能部は $65\sim 80^\circ$ と急角度で、その形態的特徴からみても同様の機能である可能性が強い。E類は尖頭状の機能部が最大の特徴である。加工痕は微細なものを含め急角度で、尖頭部の断面は方形あるいは三角形を呈している。尖頭部の形状は鋭利さを欠くものもあり、石錐に比べ加工度が全体的に貧弱であるが、その形態的特徴からみて石錐の未製品あるいは穿孔の機能を推定するのが妥当であろう。F類は広く残された素材縁辺を刃部とする。刃部角度は $20\sim 45^\circ$ と鋭利で、切裁に適しているものと思われる。G類はほぼ全周を加工痕がめぐっている。加工角度が不安定で、特徴的な形状を示さず、機能部を特定できない。加工部全体あるいは一部が機能部であろうが、加工角度が平均して大きく、搔器的な機能があるのかもしれない。H類は折断面に挟まれた縁辺部が機能部である。この縁辺部には両面あるいは片面に加工痕があり、一部に潰れが認められる。折断面がこの縁辺部を切っており、全体に加工度は弱いものの、楔形石器あるいは類似の機能が推定できる。

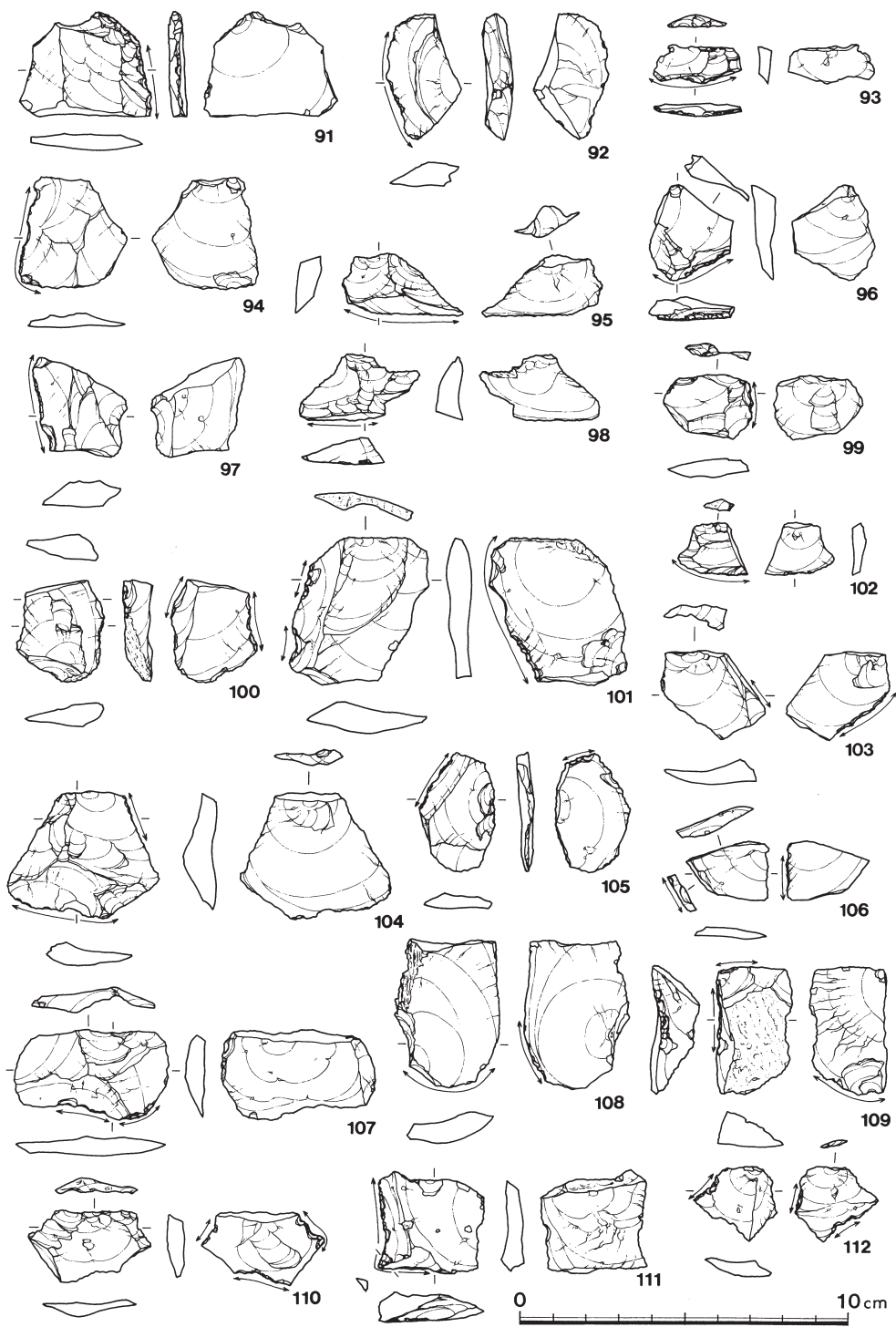
以上のように、加工痕ある剥片は8類に形態分類され、機能的には切裁（A、B、F類）、削搔（C、D、G類）、穿孔（E類）、分割（H類）の4種類にまとめられる可能性がある。A、B類については小型幾何学形石器との関連が強く、同石器の範疇で捉えておきたい。D類は抉入石器、E類は石錐、H類は楔形石器の範疇で捉えられる可能性が強い。C類は削器、搔器と同様の機能をもつのであろうが、刃部の安定性を考慮すれば、定型石器との間には対象物や使用のあり方などに相違が存在した可能性が想定できる。

使用痕ある剥片（第14・15図） 肉眼による観察によって細かな剥離痕⁽⁴⁾が縁辺の一定範囲に連続的に認められるものを対象とした。擦痕状、研磨痕状の使用痕が観察されるものはない。

52点を確認した。これらの資料について細かな剥離痕の残されている部位⁽⁵⁾に着目すると、大きく3類型に分類される。A類は長辺にのみ認められるもの、B類は短辺にのみ認められるもの、C類は2辺以上の縁辺に認められるものである。A類は細かな剥離痕の残されている範囲に着目するとさらに5類型に細分できる。a類は縁辺部の一部に認められるもので、上・下部や左・右部など縁辺端から一定の範囲に細かな剥離面が認められる（第14図70～78）。b類は縁辺部の一部に認められるもので、縁辺の中央部を中心としている（第14図79～84）。c類はほぼ縁辺全体に認められ



第 14 図 冠遺跡D地点第 2 次調査出土石器 (5) (1/2)



第 15 图 冠遺跡D地点第 2 次調査出土石器 (6) (1/2)

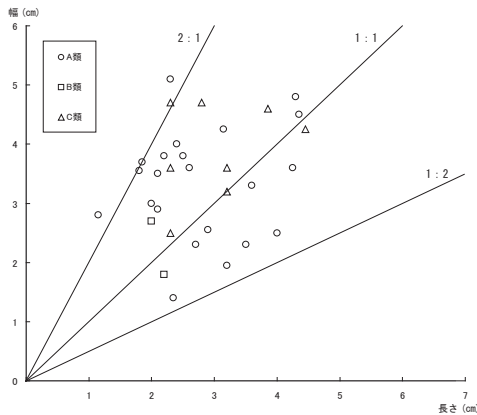
るが、上下あるいは左右両端部を中心としており、中央部で細かな剥離痕が途切れているものである（第14図85・86）。d類は背面あるいは腹面単位で見ると縁辺部の一部に認められるのみであるが、背腹両面の範囲がほとんど重複せず、両面で相互補完的となり、結果的に縁辺全体に細かな剥離痕が残されているものである（第14図87・88）。e類は縁辺のほぼ全体に認められるものである（第14図89・90、第15図91～97・102）。C類も細かな剥離痕が残されている部位によって3類型に細分できる。a類はいずれも長辺部に残されるもの（第15図100・101・103・104）で、b類は長辺部と短辺部に残されているもの（第15図105～110）である。c類は尖り気味の端部を中心にその両側の縁辺に使用痕が連続的に認められるもの（第15図111・112）で、素材の形状は方形に近く長辺と短辺の区別は明瞭ではない。

まず、類型ごとの様相を概観する。A類は34例認められ、内訳はAa類11例、Ab類6例、Ac類3例、Ad類3例、Ae類11例である。Aa類では使用痕が背面側に残されているもの（70～75・78）と腹面側に残されているもの（76・77）があり、前者はいずれも下部、後者はいずれも上部に使用痕が残されている。剥離痕は1mm程度あるいは1mm以下⁶⁾のきわめて微細な剥離痕が連続するもの（70・74・78）、2mm前後の細かな剥離痕が途切れながら続いているもの（73・75）、2～5mm程度の不揃いな剥離痕が連続するもの（71・72・76）、2～3mm程度の整った大きさの剥離痕が連続するもの（77）がある。2～5mm程度の不揃いな剥離痕が連続するものでは剥離痕の縁辺からの奥行があるもの（71・72）とあまり奥行のないもの（76）があり、後者は折れ面状の剥離痕をまじえている。剥離痕が残されている縁辺の形状（以下、縁辺形状と略す）は直線的なもの（71・72・76～78）と外湾気味のもの（70・73～75）が認められる。素材は縦長形状⁶⁾（70・72～75）、横長形状（71・76～78）のいずれも認められるが、縦長剥片、石刃に分類できるものはない。縦長形状のものは先細りあるいは先細り気味のものが多く、なお、71・75・77はこの類型に含めて説明したが、大きく欠損しており、他の類型かもしれない。Ab類は背面側に剥離痕が残されているもの（79～81）と腹面側に残されているもの（82～84）がある。剥離痕は1～2mmの細かな剥離痕が連続するもの（79・80・84）、1～2mmの細かな剥離痕を主体としながら4mm前後のやや大きな剥離痕をまじえるもの（81・84）、4mm前後の剥離痕を主体とし剥離痕の奥行も深いもの（83）がある。縁辺形状は外湾気味のもの（79・81・83）、直線的なもの（82）、内湾気味のもの（80・84）が認められる。素材はいずれも縦長形状の剥片を利用しており、先細り気味のものが多く、81・84は上部を欠損し

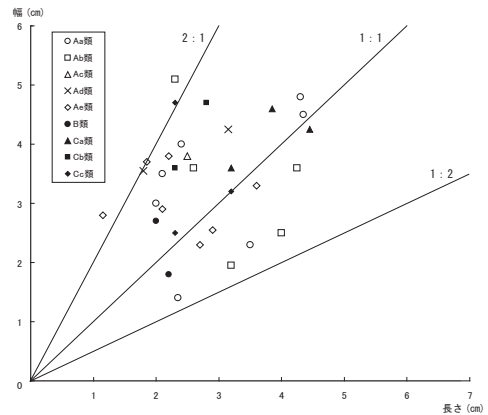
ており、Ae 類に分類される可能性もある。Ac 類はいずれも背面側に剥離痕が残されており、縁辺形状は直線的である。いずれも 1～5mm 程度の不揃いの剥離痕が連続している。素材は横長剥片である。2 点とも上端部または下端部を欠損している。Ad 類は両面に剥離痕が認められるが、いずれも背面側を主体としている。背面側が 3～4mm を主体とする剥離痕が連続し、腹面側は 2・3mm 程度の剥離痕が途切れ途切れに残されている。また、87 の背面側の剥離痕は比較的奥行が深いのに対し、88 の剥離痕は奥行が浅い。縁辺形状は直線的で、素材はいずれも横長剥片である。Ae 類はいずれも背面側に使用痕が認められる。1 mm 程度の微細な剥離痕を主体とするもの (98・102)、1～2mm 程度の細かな剥離痕を主体としながら 5mm 前後の大きな剥離痕を不規則に混じえるもの (92・94・97)、1～3mm の剥離痕を主体とするもの (93・96)、3mm 前後のやや大きな剥離痕を主体とするもの (91) がある。縁辺形状は直線的なもの (91・94・95・97・102) と外湾気味 (92・93・96) がある。素材は縦長形状 (91・94・96) と横長形状 (92・93・95・97・102) がある。91・97 は一部欠損しているが、剥離痕が折断面によってきられていることからこの類型に含めた。

B 類はわずか 3 例 (98・99) で、いずれも背面側に剥離痕が残されている。2mm 前後の剥離痕が途切れながら縁辺全体に残されているもの (98) と 2mm 前後の剥離痕がほぼ縁辺全体連続するもの (99) がある。全体的に剥離痕の奥行がなく、急角度の縁辺をなしているものが多い。縁辺形状は直線的なもの (98) と外湾気味のもの (99) があるが、湾曲度はきわめて弱い。素材は横長形状 (98・99) と縦長形状がある。

C 類は 19 例で、その内訳は Ca 類 7 例、Cb 類 5 例、Cc 類 7 例である。Ca 類は剥離痕が残されている縁辺が背面側 (104)、腹面側 (100)、背腹両面 (101・102) の 3 者が認められる。詳細は省略するが、細かな剥離面の状況は個体差がかなり大きい。縁辺形状はおおむね直線的で、部分的に内湾気味の個体 (100・101) がある。素材は縦長形状 (100・101・103) が多い。Cb 類では 2 側縁に剥離痕が残されるもの (106～108) と 3 側縁に剥離痕が残されているもの (105・109・110) がある。長辺部の剥離痕は明らかに縁辺全体に及ぶものはみられず、上半、下半 (右半、左半) のいずれかに主体をおくものが多い。素材は横長形状が主体である。剥離面は 1～2mm、あるいは 2mm 前後を主体とするもの (105・106) と 2～3mm、2～5mm、2～7mm などやや大型の剥離痕を混じえるもの (107～110) がある。縁辺形状は直線的なもの (105・106)、内湾気味のもの (109・110)、外湾気味のもの (108)、内湾・外湾気味の縁辺が組み合うもの (107) がある。Cc 類は 7 例である。縁辺形状は内湾気味であり、一



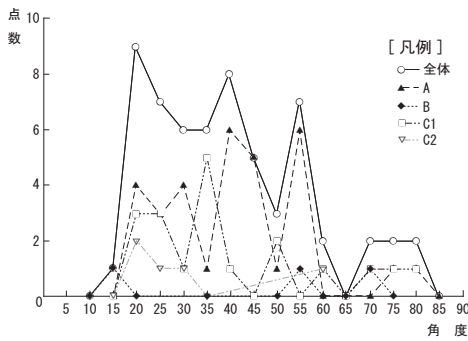
第16図 使用痕ある剥片類型別長幅相関図



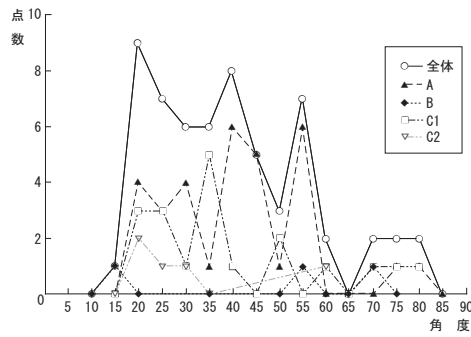
第17図 使用痕ある剥片細分類型別長幅相関図

端に先頭部を有する素材を利用している。尖頭部は111で1ヶ所、112で2ヶ所あり、断面三角形、あるいは紡錘状を呈する。細かな剥離痕は尖頭部周辺の縁辺部を中心に認められる。剥離痕は2mm前後を主体とする。

使用痕ある剥片は定型石器とは異なり、特定の作業を目的として使用された石器ではなく、かなり便宜的な利用法が想定されているが、一方では、上述したように細かな剥離痕の残され方は一定の共通性を持っていることから、使用法にもある程度の規則性を想定することも可能であろう。ここでいくつかの属性分析を試み、各類型の使用法想定材料としたい。まず、大きさおよび形状に注目してみると、長さ、幅ともに5cmを超えるものはきわめて少なく、後述の剥片と比較すると、幅の上で一回り小型である（第16図）。長幅比で見ると基本的に1:2と2:1の間におさまり、剥片全体の傾向と一致し、加工痕ある剥片とは対照的な在り方を示している。使用痕ある剥片は基本的に素材の変形を伴わないことから、大きさ上で若干の素材選択が行われていることなのかもしれない。類型別で見ると、A類は全体の傾向に一致し、長幅比についても同様である（第16図）。C類は長幅比が1:1と1:2の間に集中し、大きさの点では幅3～5cmに集中し、使用痕ある剥片の中では大きい方に片寄りを見せている。B類は資料数が少なく、傾向性を指摘できない。細分類型の状況について簡単に触れておくと、Aa類では長幅比1:2あるは2:1に近いものが多く、比較的是っきりした横長形状あるは縦長形状の剥片を用いている（第17図）。Ae類はAa類とやや似た分布を示しているが、縦長形状の剥片は使用してはいない。長幅比1:1と1:2の付近に集中し、2極化した分布を示す。大きさは使用痕ある剥片の中では



第18図 使用痕ある剥片刃部角度分布図



第19図 使用痕ある剥片類型別刃部角度分布図

中型に集中している。そのほかの細分類型は明確な傾向性は認められないが、使用痕ある剥片の中では大型に属するものが大半である。C類ではCa類とCb類の分布が対照的である。Ca類は長幅比1:1前後に集中するのに対し、Cb類は長幅比1:2付近に集中している。大きさについては、両類型とも使用痕ある剥片の中では大型に属するもので占められている。Cc類は点数が少ないが、長幅比1:1付近に集中し、大きさは中型で占められている。

刃部角度は、全体では20°、40°、55°、75°にピークをもち、角度が大きくなるにしたがってピークの高さ（個数）が減少している（第18図）。全体では細かな剥離痕が残される縁辺は大半が長辺で、その刃部角度は全体の傾向に基本的に一致している。一方、短辺の刃部角度は長辺に比べ35°以下の鋭角側に主体がある。類型ごとに刃部角度に検討してみると、A類は全体の傾向にほぼ一致するが、40°に最大のピークをもち、35°、50°の谷部を無視すれば20～55°を範囲とする正規分布に近い（第19図）。C類の長辺もピークの位置や分布範囲はA類と同様の様相を示すが、70～80°の急角度に属する資料数がA類に比較して多い。一方、C類の短辺は20～60°に分布し、20～30°の範囲に集中するなど短辺全体の傾向が一層明確な形で現れている。B類は傾向性を指摘できない。

A類の細分形態では、分布範囲を中心にみると、Aa類はA類全体とほぼ同じ分布を示し、おおむね20～50°の範囲に収まり、特定の角度への集中は見られない（第3表）。Ab類、Ae類はほぼ同じ分布範囲を示す。Ac類は50・55°、Ad類は40～55°が分布範囲で、50°前後の角度に集中している。C類の細分形態ではCa類は20～70°の広い範囲に分布し、集中範囲を指摘できない。Cb類、Cc類は長辺、短辺に関係なく広い範囲に分布するものの、その大半は20～35°の鋭角側に位置している。

第3表 使用痕ある剥片細分類型別刃部角度一覧

角度	類型	A 類					小計	B 類	C 類			小計	合計
		Aa	Ab	Ac	Ad	Ae			Ca	Cb	Cc		
5													
10													
15							1						1
20		2	1			1	4		1	3	1	5	9
25		1				2	3		1	2	1	4	7
30		1	2			1	4			2		2	6
35						1	1		1		4	5	6
40		2	2			1	6		1				7
45		2					3						5
50				1			1		1		1	2	3
55		2	1	2	2	1	8	1					9
60									1	1		2	2
65													
70								1	1			1	2
75						1	1			1		1	2
80		1					1				1	1	2
85													
90													

※C類は複数の刃に細かな剥離痕が認められる類型であり、刃を単位に角度を測定しているため、類型ごとの角度測定点数と個体数は一致しない。

C類を1辺単位ではなく、個体を単位としてみると、Ca類では長辺のうちの1辺は20～30°の範囲に分布し、残りの1辺は50°より大きい場合が大半で、C類の1辺単位と同様の傾向を示している。Cb類は長辺の角度が50°を超えるのに対して短辺が20～30°の鋭角であるもの、長辺と短辺の刃部角度が前述の例と逆であるもの、長辺、短

辺とも20～35°と鋭角であるものの3種類がある。Cc類は傾向性を指摘できない。

細かな剥離痕の形状についてみると、剥離痕が主体的に残されている縁辺を中心に連続性はおおむね良好である。剥離痕の大きさでは、2mm程度の大きさを基準にみると、2mm前後以下の剥離痕を主体とするものと2mm以上の剥離痕を主体とするもののおおきく2つのグループに区分でき、両者はほぼ同じ割合である。類型別にみると、A類はおおむね剥離痕の連続性が良く、2mm以下の微細なものを主体としており、2～3mm以上の剥離痕を主体とするものが一定量認められる。細分形態では、Aa類は連続的な微細な剥離痕が多数を占める。剥離痕の大きさは個体ごとでかなりばらつきがあるが、約半数は2mm以下の微細な剥離痕を主体としている。2mm以上の剥離痕を主体とするものでは大きさは不揃いのものが多い。Ab類はおおむね剥離痕は良好な連続性を示し、1～2mm程度の微細な剥離痕が主体である。Ac類は剥離痕が若干途切れ気味で、大きさは不揃いである。Ad類は背面の剥離痕が主体的で、連続性が強い。剥離痕の大きさは3～4mmとやや大きい。Ae類は剥離痕の連続性はおおむね良いが、途切れ気味ものが若干ある。剥離痕の大きさは2mm以下の微細な剥離痕を主体とするものと2・3mmのやや大きな剥離痕を主体とするものがほぼ半数ずつある。B類は剥離痕の連続性は比較的良好で、2mm前後である。C類も剥離痕の連続性はおおむね良い。剥離痕の大きさは2mm前後以下の微細な剥離痕を主体とするものと2mm以上のやや大きい剥離痕を主体とするもの(2～4mm主体)があり、前者の割合がやや多い。細分

形態でみると、Ca類は2mm前後以下の微細な剥離痕を主体とするものと2mm以上の剥離痕を主体とするものがほぼ同じ割合である。Cb類はCa類と同様の傾向であるが、長辺・短辺単位でみると、短辺では2mm前後以下の剥離痕を主体とするものが多い。Cc類は2mm前後の剥離痕を主体としている。

縁辺形状は直線的なもの(1類)、外湾気味のもの(2類)、内湾気味のもの(3類)の3者があり、1類の割合が高い。2類がそれにつき、3類は特定の類型に集中する傾向がある。類型ごとにみると、A類は1～3類が認められ、1類、2類が主体で、とくに1類の割合が高い。細分形態でみると、Aa類は1類、2類がみられ、両者はほぼ同じ割合である。Ac・Ad類はいずれも1類である。Ae類は1類、2類が認められ、1類に主体がある。それに対しAb類は様相が異なる。1～3類が認められるが、1類は1例のみである。B類は1類、2類が認められるが、2類は湾曲度が弱い。C類は1～3類が認められるが、C類全体としての傾向性は指摘しがたい。細分類型では、Ca類はいずれも1類で、Cc類はいずれも3類である。Cb類は1～3類が認められ、とくに傾向性はないが、長辺・短辺単位でみると、長辺は1類、3類が主体で、短辺は1類、2類が主体である。

以上、使用痕ある剥片を大別3類型、細分9類型に分類して属性分析を行った。器種全体としての属性分析では顕著な傾向性を指摘できなかったが、機能や作業内容との密接な関連が予想される刃部角度や使用痕の形状、刃部形状において類型ごとにある程度の傾向性を指摘することができた。これは、ここで設定した類型が対象とした作業内容が異なっていたと想定することとある程度支持しているものと思われる。以下、各類型の特徴を簡単にまとめてみる。

Aa類は比較的細身の剥片を使用し、刃部角度は 55° 以下に主体がある。約半数は2mm以下の微細な剥離痕を主体とするもので、2mm以上の剥離痕を主体とするものでは不揃いなものが多い。刃部形状は直線的か外湾気味で、剥離痕は背腹いずれかの面に残されている。Ab類は刃部角度が 20° ～ 50° に分布する。1～2mm以下の微細な剥離痕が主体で、刃部形状は外湾気味か内湾気味である。剥離痕はおおむね背腹いずれかの面に残されている。Ac類、Ad類は刃部角度は 50° 前後で、刃部形状は直線的である。Ac類は剥離痕の連続性でやや安定性を欠き、剥離痕の大きさは不揃いである。Ad類は両面に使用痕が認められるものの背面側が主体で、連続的である。剥離痕の大きさは3～4mmとやや大きい。Ae類は刃部角度は 15° ～ 55° に分布する。2mm以下の微細なもの 2.3mm を主体とするものがあるが、全体的に細かな剥離痕が主体で

ある。刃部形状は直線的なものと外湾気味のものが認められるが、前者が主体である。B類は刃部角度は15～70°の範囲に分布し、傾向性を指摘できない。剥離痕の大きさは2mm前後で、刃部形状は直線的である。Ca類は個体単位でみると、Aa類+Ae類が多く、刃部角度はAe類が20～30°を中心に、Aa類は50～70°を中心としている。剥離痕の大きさは2mm以下を主体とするものと2mm以上を主体とするものがあるが、縁辺を単位とした類型との整合性はない。刃部形状はいずれも直線的である。Cb類は個体を単位としてみると、Aa類+B類あるいはAe類+B類で、長辺、短辺ともに刃部角度は20～30°に主体がある。剥離痕の大きさはCa類と同様の傾向だが、短辺（B類）では2mm以下を主体とするものが多い。長辺・短辺とも縁辺形状は直線的な縁辺を基本とし、長辺は内湾気味、短辺は外湾気味の縁辺が多い。Cc類では刃部角度は20～30°が主体で、2mm前後の剥離痕を主体とし、縁辺形状は内湾気味である。

以上のように、A類は細分形態において一定の傾向性が指摘できる。C類は個体を単位としてみた場合、Cc類を除くと、有意な傾向性を指摘できず、縁辺を単位としてみる方が傾向性を指摘できる状況にある。C類にみられる剥離痕は個体としてよりもむしろ縁辺を単位として利用され、複合的な使用結果が集積されている可能性が高いといえよう。Ca・Cb類は縁辺を単位としてみると、Aa類、Ae類、B類の組合せであり、C類における縁辺単位の類型は、先に説明したAa類、Ae類、B類の特徴と整合的である。そこで、Ca類、Cb類は、Aa類、Ae類およびB類に統合し再整理してみる。A類の細分形態は刃部角度を中心にみると、20～45°前後に分布の主体をもつAa類、Ae類、50°前後に集中するAc類、Ad類および20～30°の鋭角に主体をもつAb類の3者がある。刃部形状は前2者では直線的な形態が主体であるが、後者では湾曲した形態が主体である。使用痕の大きさは前2者では細分類型ごとで様相が若干異なるが、Aa、Ae類では2mm以下を主体とするものと2mm以上を主体とするものがあり、Ac、Ad類は大きさが不揃いか、3～4mmを主体としている。後者は1～2mmの微細なものが主体である。

このように、その属性からAa・Ae類、Ab類、Ac・Ad類、B類、Cc類とまとめることも可能である。点数の上ではAa類、Ae類が大半を占め、その他の類型はAb類6例、Ac・Ad類6例、B類3例、Cc類7例と個体数が少ない。Ac類、Ad類は点数が少なく、Aa類、Ae類の一類型や複合型と理解することもできるため、変形Aa類、Ab類、Ae類、B類、Cc類の5類型について可能な範囲で使用法などを想定をしてみたい^⑧。Aa類は使用痕の認められる範囲が刃部の端部から一定の範囲に

限られており、対象物に刃部の一部が接する状態で、作業の進行に伴っても対象物との接触範囲が大きく変化しなかったと予想される。剥離痕は基本的に背面あるいは腹面いずれか一方の面にのみ残されていることから、作業の方向は単方向で、しかも刃部の背・腹面いずれかに安定して力が加わるような状況で作業が行われたと推定される。使用痕の大きさは大きくは2分されるが、いくつかの大きさの組合せが指摘できること、使用痕の大きさと刃部角度に相関性が認められないことから、個体ごとで作業強度に差があり、複数の対象物に用いられた可能性がある。刃部角度は20～55°を主体に分布し、刃部角度や刃部形状はナイフ形石器に共通する。これらのことから、Aa類は切裁、削搔に使用された可能性がある。

Ab類は刃部が湾曲しているところから中央部分を主体的に使用しており、搔器あるいは抉入石器的に利用された可能性がある。

Ae類は刃部全体に使用痕が認められることから、刃部全体が常に対象物と接触した状態で機能した、あるいは対象物に接触するの刃部の一部だが、作業の進行に伴って刃部の接触部分が変わり、結果的に刃部全体が対象物に接触するように機能したと推定される。使用痕は背面あるいは腹面のいずれか一方の面にのみ残されていることから、Aa類同様、作業方向は単方向で、しかも刃部の背・腹面いずれかに安定して力が加わるような状況で作業が行われたと推定される。使用痕の大きさは2mm以下の微細なものを主体とすることから、作業強度のあまり大きくないと判断され、対象物は軟質のものを中心としていた可能性がある。刃部角度は15～40°を主体に分布し、やや鋭角よりに分布の中心がある。これらのことから、Ae類はAa類同様、切裁あるいは削搔に使用された可能性があるが、「削る」作業では安定して刃部全体を使用することは困難が予想されるところから可能性は低い。

B類は短辺か長辺かを別にすればA類とほぼ同様の使用痕の特徴を有する。しかし、長軸に直交する短辺を基本的に利用することから、A類の使用法は困難であろう。器体を立て前後に動かす「搔く」ような作業に使用された可能性がある。使用痕の大きさは2mm前後で、作業強度はあまり大きくないものと推定される。Cc類は尖り気味の縁辺両側に細かな剥離痕が残されている。これらの剥離痕が同時に残されてものであるとするならば、刺突に用いられた可能性が強くなる。しかし、使用痕は背・腹面いずれか一方にのみ認められ、縁辺の潰れも認められないことから強度の回転は行っていないと推定される。

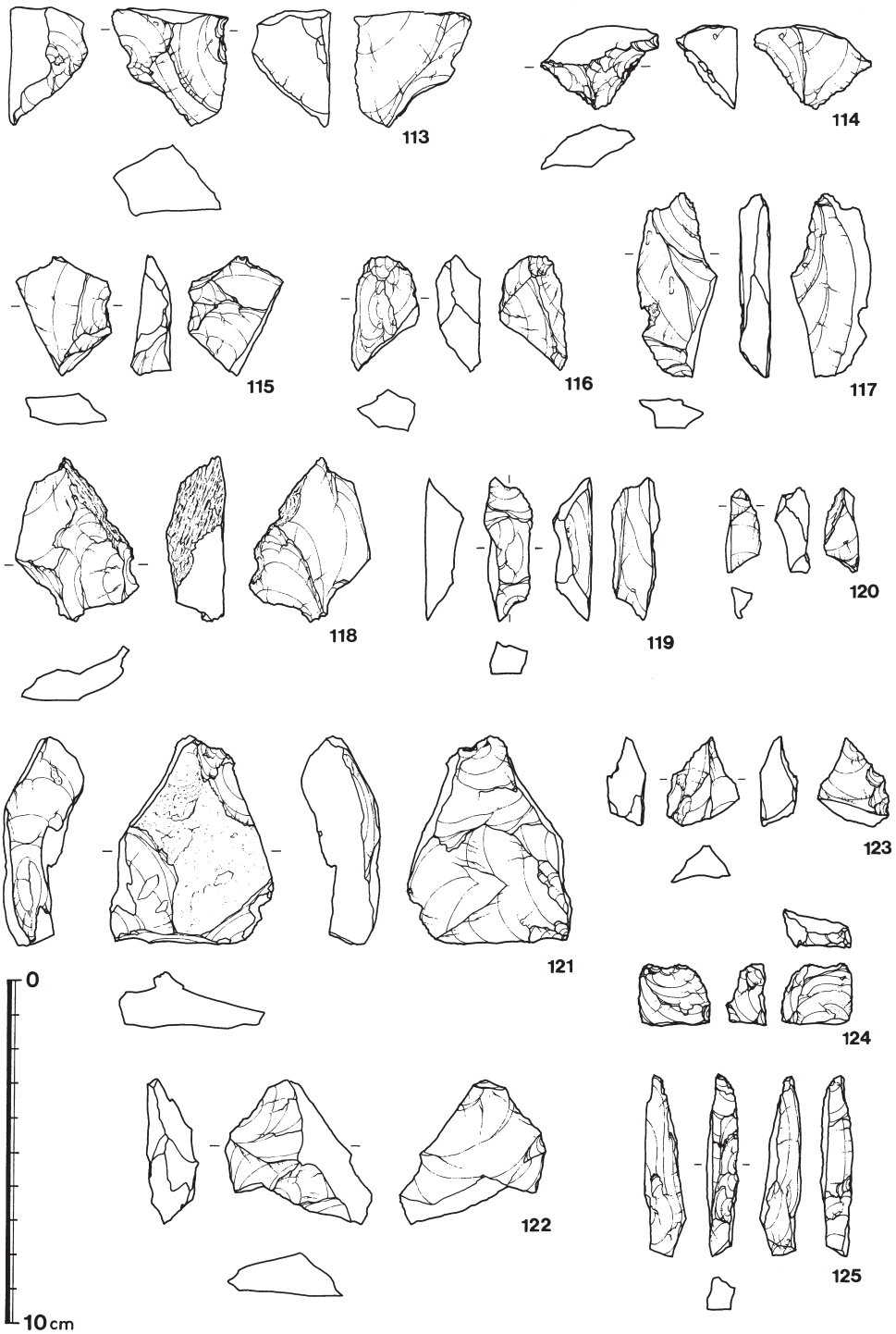
以上、細かな剥離痕の残存部位により大別3類型、細分9類型に分類し、最終的に

Aa類、Ae類、B類、Cc類の4類型に統合して使用法などについて検討した。使用痕ある剥片は1辺にのみ使用痕の認められるものと複数の辺に認められるものに大別できるが、後者はCc類を除き複数の作業に使用された結果と理解され、基本的に縁辺を単位として作業に利用されていると推定された。そうした場合、複数の縁辺に使用痕の残されている個体は1回の加工で縁辺を変えながら作業を行った(類型の異なる組合せの場合には一連の加工工程で異なる作業が行われたと仮定することも可能である)、時間を異にして何度も使用されたなどと想定することができるかもしれない。また、類型ごとの属性は一定の傾向性を示すものの、かなりの幅があり、素材選択にあつての基準が定型石器に比べてルーズであつたのであろう。

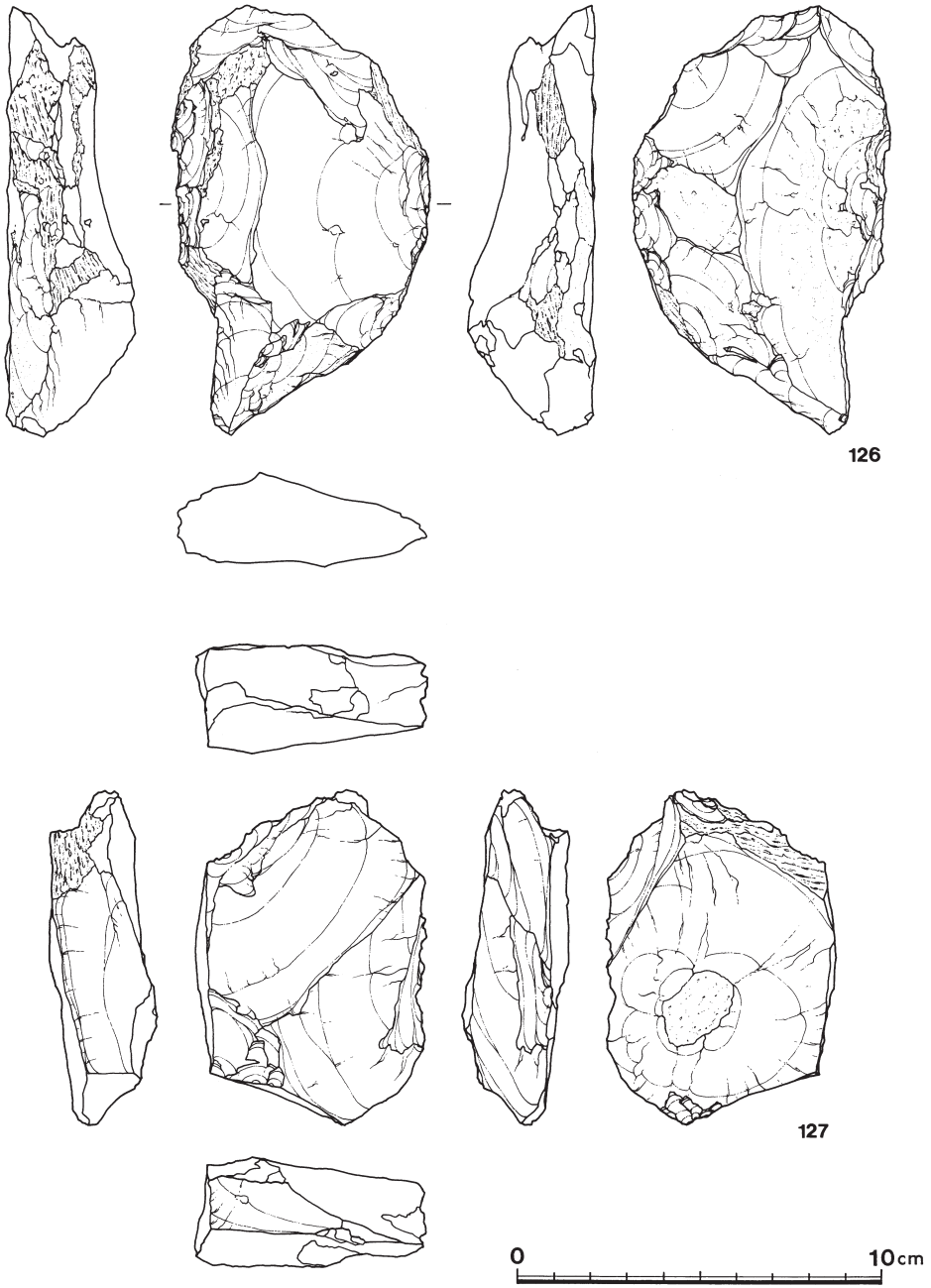
石核(第20～23図) 24点が出土している。石核は破損しているものが多く、全体の形状を窺うことができないものもあるが、出土資料が基本的に残核であること、破損品が多いことを考慮しても、長さ8cm以下の小型～中型品(113～125、130～133)が主体で、大型品(126～129)も若干認められる。打面を固定せず転位を繰り返しながら剥離作業を行う1類(113～129)が主体で、打面を固定して剥片剥離を行う2類(130・132・133)が少数ある。

1類のうち、小型、中型品は剥片、盤状剥片を素材としていると推定され、素材面を残すものが認められる(114・115・117・118・119・124・125)。おおむね石核背面側と腹面側を適宜交代させながら剥離作業をすすめており、幅広剥片を主体に多様な剥片を剥離したものと想定される。剥離された剥片は長さ5cm以下の大きさを主体としているものと思われ、後述する剥片の様相に一致している。剥片剥離作業面の選択についても適宜変更しており、素材長辺部を中心に利用している。残核は断面菱形となり、一端または両端が尖り気味となるものが多いが、素材周辺全体に剥離作業が及ぶ円盤状の形態は出土していない。大型品は厚手の盤状剥片(127)、礫(128)を素材としており、128・129も礫素材の可能性がある。

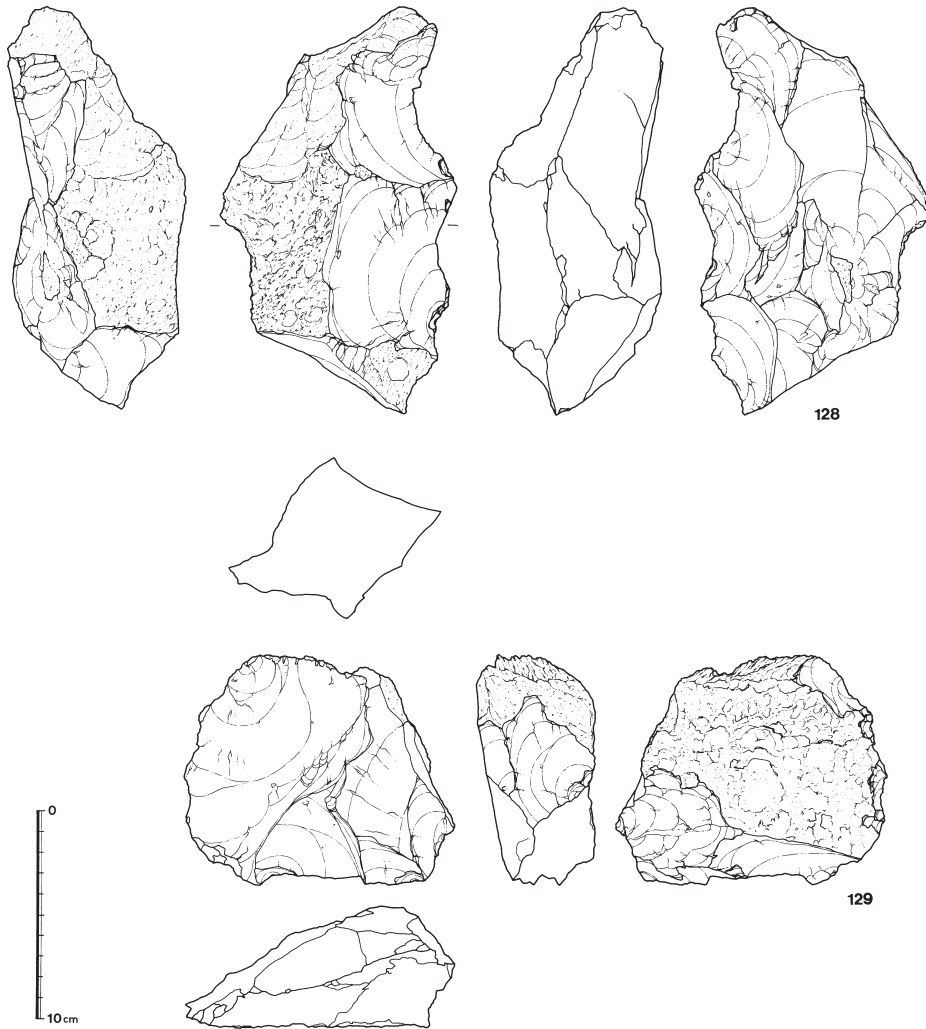
113～116は大きく欠損しており、一端が尖る形態である。114の腹面右半、115の背面左半は素材主要剥離面である。117は背面左半、腹面の大半が素材面で、小型の剥片を数枚剥離しているのみである。118は背面左半、腹面右半に素材面が認められ、腹面側が素材主要剥離面である。数枚の小型剥片が剥離されているのみである。119・120・123は石核端部の破片である。119は腹面が素材主要剥離面で、右側面は折れ面状の剥離面である。123は先端が鋭利に尖っており、腹面左側縁下半に細かな剥離が連続している。石錐に転用しているかもしれない。121は背面に広く自然面を



第 20 図 冠遺跡D地点第 2 次調査出土石核 (1) (1/2)

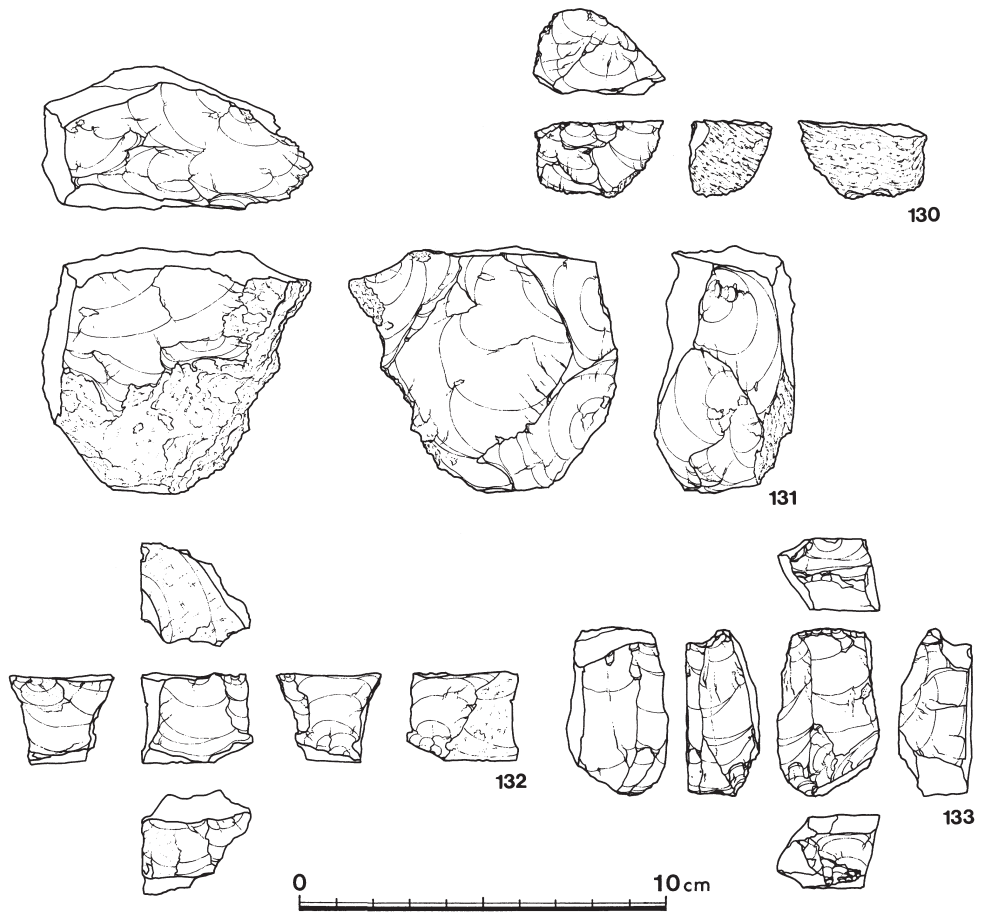


第 21 図 冠遺跡D地点第 2 次調査第 I 文化層出土石核 (2) (1/2)



第 22 図 冠遺跡D地点第 2 次調査第 I 文化層出土石核 (3) (2/5)

残すが、素材の周辺全体を剥離作業に利用している。122 は下半を欠損している。中型の剥片を主に剥離している。124 は非常に小型であり、剥離された剥片の大きさから見て石核とするには問題があり、楔形石器の素材かもしれない。125 は左右側面が折断面であるが、背面中央部には右側面から加撃された小規模の剥離が数枚認められる。縦断面は端部が先細りとなる紡錘形に近く、欠損した石核を楔形石器の素材と強いるのかもしれない。126 ～ 129 は大型品で、127 ～ 129 は盤状剥片石核である。126



第 23 図 冠遺跡D地点第 2 次調査第 I 文化層出土石核 (4) (1/2)

も背面左側縁中央部や腹面左側面中央部などに比較的小さな剥離面が集中しているが、そのほかおおむね石核面の 1/4 ~ 1/2 を占める大剥離面であることから盤状剥片石核であろう。127 は腹面が分割面の可能性があり、礫を半分程度に大割して素材としている可能性がある。128 は大型の角礫を素材としているものと思われ、礫の平坦面を打面として盤状剥片を生産している。129 は石理を意識しながら、石理に比較的沿うように盤状剥片の剥離を進めている。

2 類は素材分割面などの平坦面を利用するもの (130・132) を主体とする。130 は亜円礫の分割礫を素材としている可能性があり、打面は分割礫をさらに分割した平坦面を利用している。石核正面 (背面側) を剥片剥離作業面として、小型の幅広剥片を剥離している。132 も小型の石核で、分割礫を素材とする可能性があり、打面は分割

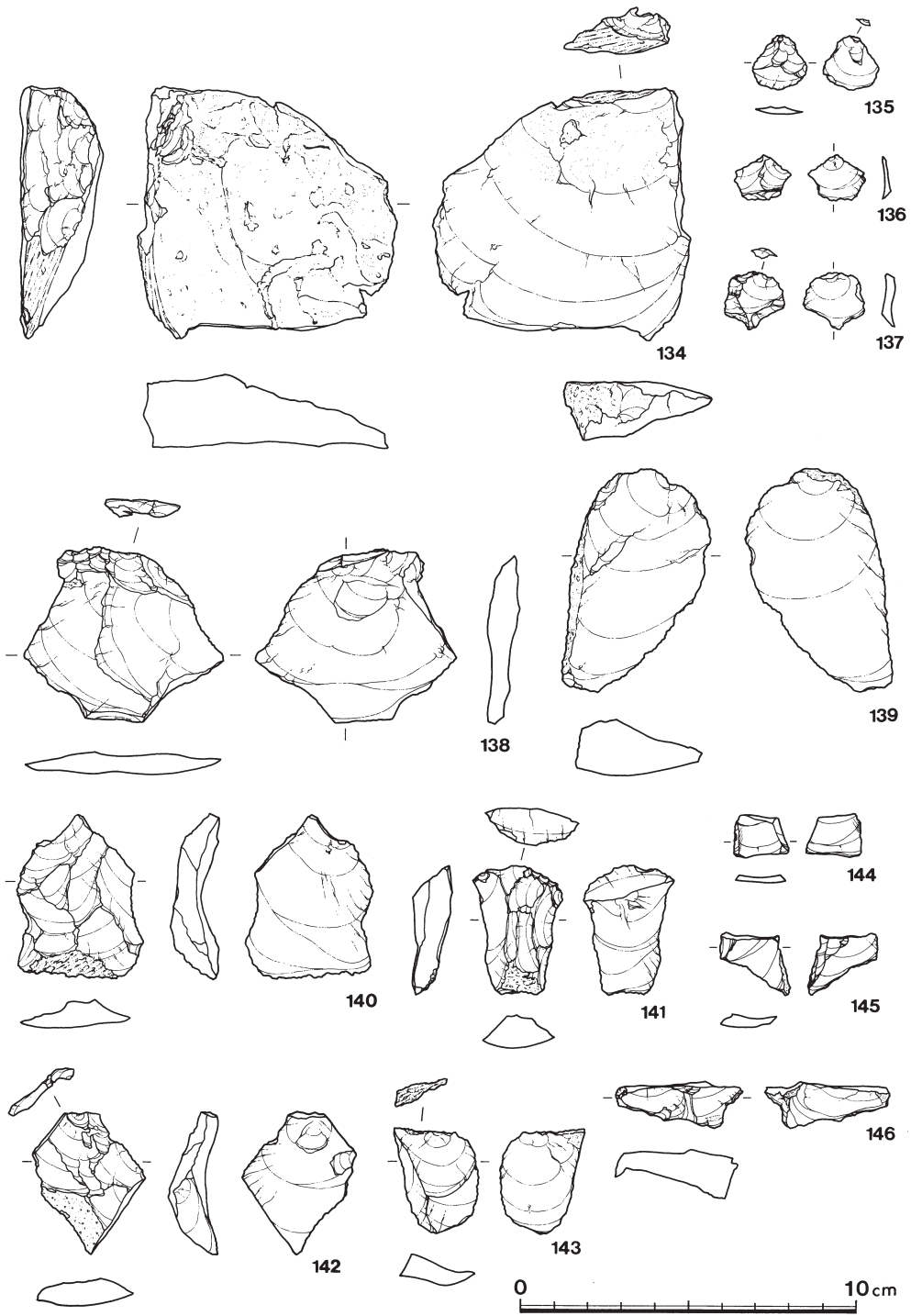
面である。上部の打面を主体に幅広の剥片を剥離しているが、下部の打面からの剥離を行っている。下部の打面は2枚の剥離面で構成されており、打面転位型石核の可能性も残している。133は上部打面を利用して剥離作業を行っている。石核正面(背面側)および左側面を剥片剥離作業面としており、幅広の縦長剥片が剥離されている。現状の剥片剥離に利用された打面はわずかに残るのみであるが、平坦打面と思われる。裏面側から打面を再生するように剥離されているが、途中で蝶番剥離を起こし、平坦面を形成していない。右側面および石核裏面(腹面側)は石核成形面あるいは素材面である。剥片剥離作業面は平坦で、打面が比較的狭く、楔形石器的な趣がある。

なお、131は背面は平坦な剥離面と自然面で、上側面は背・腹面を折り取るように剥離されている。腹面は中央に広い平坦な面の周囲を数枚の剥離面が取り巻いており、上部の剥離面は上面から剥離されている。盤状剥片石核の可能性もあるが、上面は石理に直交するように剥離されており、石核祖型(剥片剥離前の石核)としておきたい。

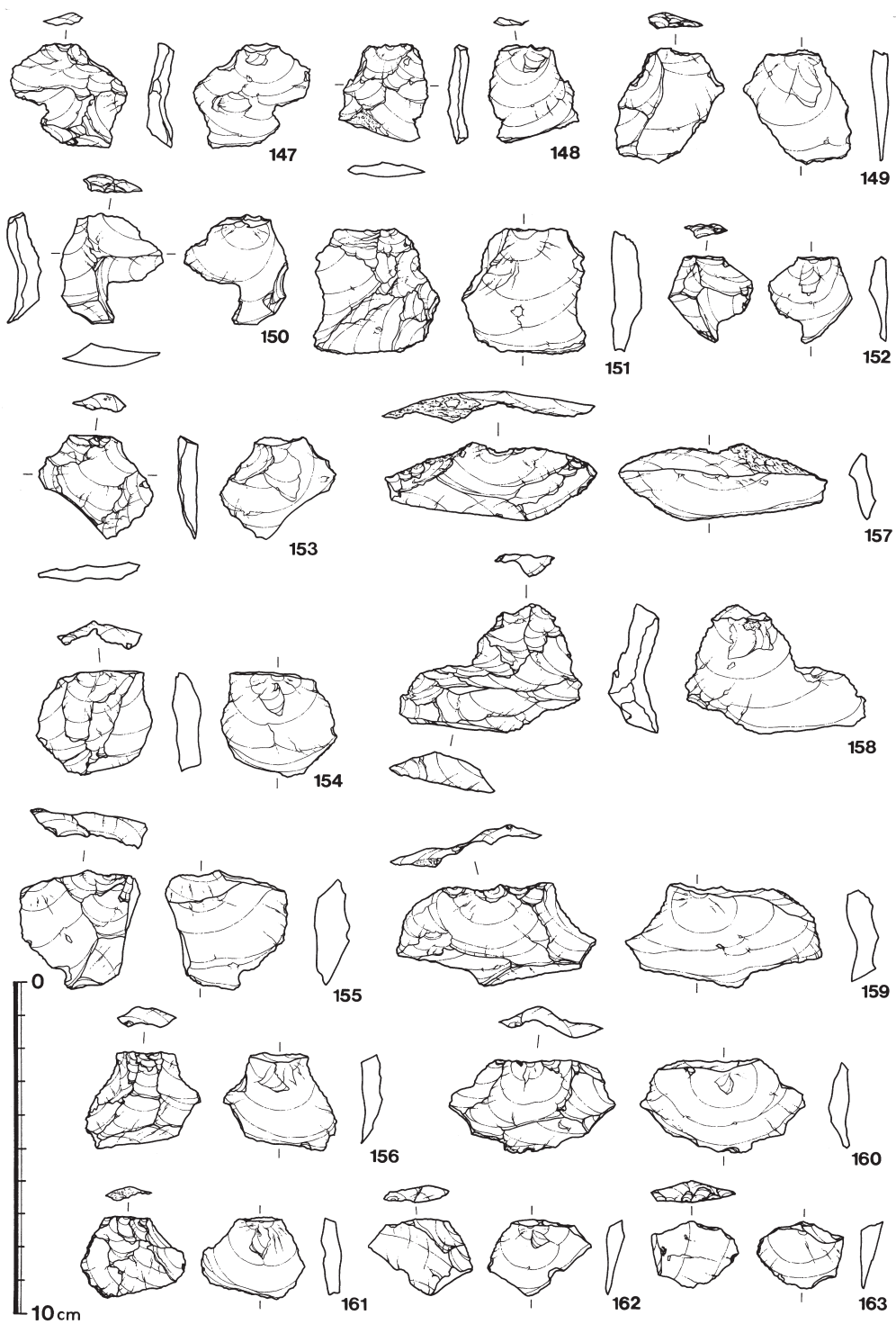
剥片(第24～26図) 石材は安山岩がほとんどで、水晶6点(145・146)、黒曜石1点(144)、玄武岩1点である。水晶は小型の石核1点が出土しており、剥片も小型であり、整合性がある。ほとんどが安山岩であるため、安山岩剥片の特徴について説明する。

剥片は長さ、幅ともに5cm以下の大きさが主体を占め、10cmを超える大型は剥片はない。剥片の背面はおおむね剥離痕で覆われており、原産地遺跡ではあるが、背面を全面、あるいは広く自然面で覆われる資料は予想外に少ない(具体的様相は後述)。剥片の形態は縦長剥片や石刃のように整ったものは認められず、横長剥片も実際には多くない。大半は長幅比1:1前後の幅広剥片である。

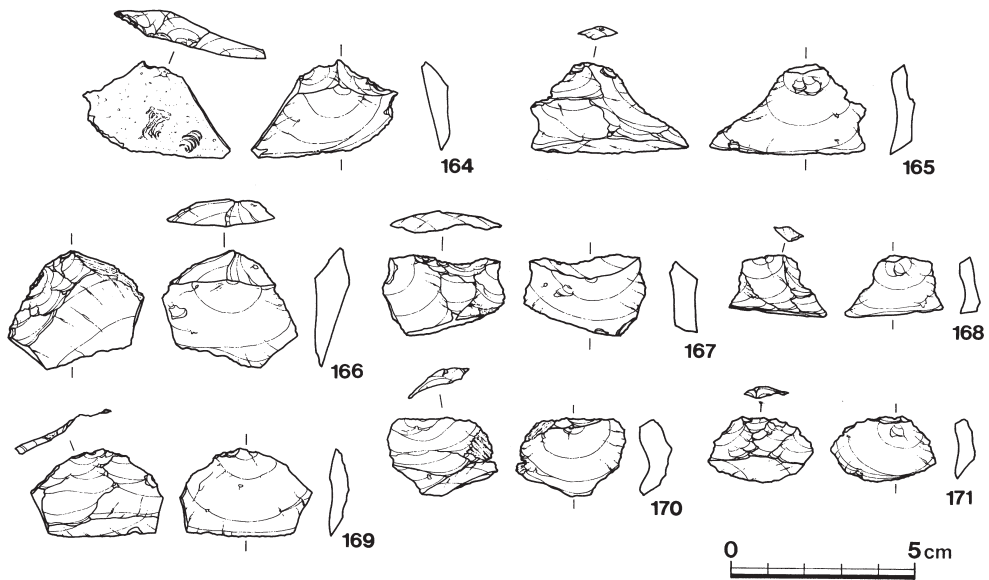
槍先形尖頭器製作に関わる剥片を多く含んでいると想定されるため、打面は見かけ上調整打面のような状況を呈するものが一定量あるが、石核や復元される剥片剥離技術の様相から見て調整打面は認められないと考えてよからう。打面は複剥離打面と平坦剥離面が認められ、前者は先行の剥片剥離作業によるもの、槍先形尖頭器の調整によるものなど、後者は素材剥離面、あるいは打面の大きさ等に起因して複剥離とならなかったものなどを主体としていると思われる。打面の形状は明確に打面を形成するものが多くを占めるが、極端に打面の小さな点状剥片、打点は確認できるが背面と腹面が接している線状打面(136・151)、打面が完全になくなっているものも一定の割合で認められる。点状打面は3cm以下の小型剥片を主体とするが、線状打面や打面が飛んだものは大きさとの相関性は基本的にない。明確な打面を持つものは打面の大



第 24 図 冠遺跡D地点第 2 次調査第 I 文化層出土剥片 (1) (1/2)



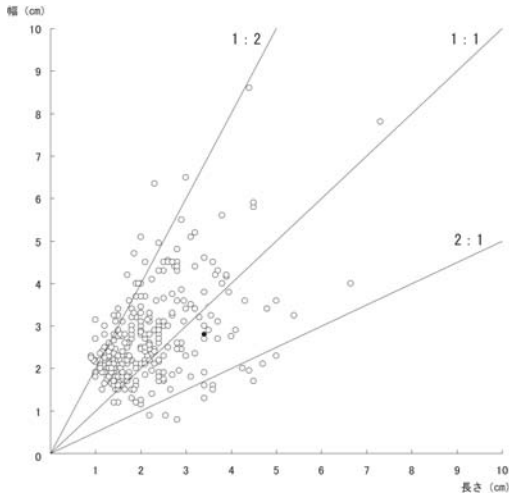
第 25 图 冠遺跡D地点第 2 次調査出土第 I 文化層出土剥片 (2) (1/2)



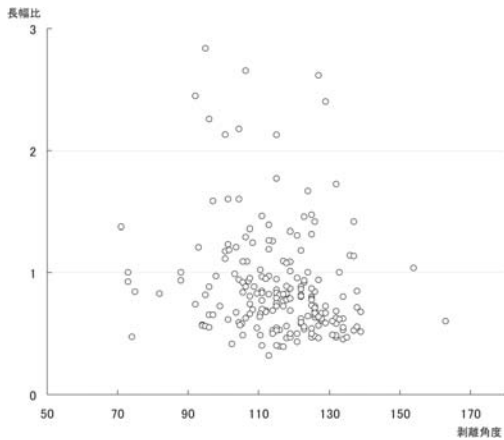
第 26 図 冠遺跡D地点第 2 次調査出土第 I 文化層出土剥片 (3) (1/2)

きさに対応して一定の大きさを有しており、剥片幅の 1/3～1/4 程度が標準的であるが、剥片幅とほぼ同じ程度の幅広のもの (141・157・154・155・159・164・166・167) や逆に剥片幅 1/5 以下で点状打面に近いもの (135・137・165) がある。前者は横長剥片あるいは横長形状のものが多く、後者は 3cm 以下の小型剥片に多い。

大きさを無視して平面形状に着目すると、通常の打面を有し、下方に向かって幅広となり、長さの中央部付近で最大幅となり、先端に向かって先細りとなる、あるいはほとんど幅を減じずに先端に至る形態 (147～150・152・153 など) がもっとも標準的な形状である。このほかに、標準的な打面や点状打面、あるいはそれに近い小規模な打面を有し、先端に向かって下膨れとなり、平面三角形や水滴形となるもの (135・165・168・171)、打面が広く、打面付近に剥片幅の最大値があり、大きく幅を減じることなく下端部に達し、平面長方形、平行四辺形状を呈するもの (141・143・154・157～160・166・167・170)、通常打面を有し、打面近くに剥片最大幅があり、先端に向かって先細りとなるもの (139) などが認められる。平面三角形、水滴形の剥片は小型が多く、打面近くに最大幅があり、先端に向かって先細りとなるものは点数は多くない。線状打面を有するものは打面が広く平面長方形、平行四辺形状を呈するものに類するが多い。側面は曲線を描くもの (140・142・147・150・158 など) と直線的なもの (134～139・141 など) が認められる。前者は標準的な形状の剥片



第 27 図 剥片長幅相関図



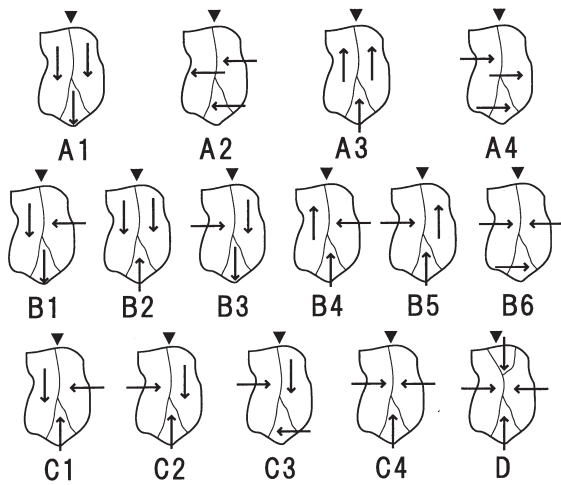
第 28 図 剥片長幅比と剥離角度相関図

のほか、平面三角形状、水滴形のもの（165・168）に認められる。後者は標準的剥片のほか、打面の広く平面長方形、平行四辺形状のものが多い。

ここまで剥片の概要を述べたが、ここで剥片の属性を分析しておきたい。まず大きさであるが、長さ、幅ともに5cm以下のものが主体であることをすでに指摘した。本文化層の剥片は大半が欠損品であり、半数以上が1/2以上を欠失して全形を窺うことができない資料である。一方で、約1/3（296点）は完形あるいは2/3以上の残存部を持つ資料で、約1割（91点）は1/2以上の残存部を有して元の形状をある程度まで復元することができる。大きさの面で両者の内容を比較すると、基本的に同様の傾向を示すことから、ここでは前者の資料を代表させて分析を進める。改めて大きさについてみると、長さ、幅ともに5cm未満に95%以上の資料

が分布する（第27図）。長さ5cm以上の資料は8点、幅5cm以上の資料は16点、長さ、幅ともに5cm以上の資料はわずかに1点（第24図134）である。長さ、幅ともに8cmを超える資料はなく、大型剥片は認めることができない。長さ5cm以下の試料の分布は連続的であるが、とくに長さ3cm以下、幅3.5cm以下に集中する傾向がある。

長幅比は0.5（1:2）と2.0（2:1）の間に約80%の資料が分布し、縦長で細身のもの、かなり幅広のものが一定量見られる。分布の主体となる長幅比0.5～2.0では0.5～1.0の間に約80%の資料が分布する。長幅比0.5以下の39点を加えると、全体の約75%



第 29 図 剥片長背面構成分類模式図 (藤野 2004 より)

第 4 表 剥片背面構成類型一覧表

I 類	14	II 類	A 類				合計		
			A1	A2	A3	A4			
			219	11	13	16			
			B 類						
			B1	B2	B3	B4	B5	B6	合計
			49	123	58	12	12	12	
			C 類				合計		
			C1	C2	C3	C4			
			16	6	12	4	38		
			D 類				1		

められず、剥離角度も連続的分布を示している。剥片の平面形態の分析とも整合的結果といえる。

剥片の背面構成は複数面からなるものが大半で、自然面を残すものはあまり多くない。自然面を何らかの形で残存する資料は検討を行った 581 点中 131 点で、全体の 2 割強である。そのうち、背面全体あるはほぼ全面に自然面を残すもの 14 点、3/4 を超えるもの 18 点で、全体の 5% 程度である。石材原産地に立地することを考えると予想外に低い数字かもしれないが、石核の様相と整合的であり、一定の成形を行って石核、石核素材、石器素材が搬入されていると想定される。

剥片の背面構成についてみると、一面のみで構成されるもの (I 類) と複数面で構

が長幅比 1.0 以下である。長幅比 0.5 以下と 2.0 以上の分布域では前者が 39 点、後者が 18 点で、長幅比 0.5 ~ 2.0 の間の分布状況に対応するあり方を示している。剥片の形状は数値の上からはいくつかに分ける状況ではなく、長幅比 1.0 (1 : 1) 前後の寸詰まりで幅広の剥片を主体とし、その主体はやや幅広の形態寄りであるといえよう。

剥離角についてみると、58 ~ 163° の間に分布し、92 ~ 139° 以外はきわめて点数が少なく、意図的な打撃である可能性は低い (第 28 図)。92 ~ 139° の間で見ると、100° 以上の角度に多くが分布し、とくに 111 ~ 134° の範囲に集中している。また、平面形状 (長幅比) と剥離角度の相関は認

成されるもの（Ⅱ類）に区分され、大半は後者である。Ⅱ類は背面を構成する剥離面の方向で、A類：1方向、B類：2方向、C類：3方向、D類：4方向の4種類に区分される。さらに、主要剥離面の剥離方向との関係を検討すると、A類が4類型、B類が6類型、C類が4類型に細分される（第29図）。分析対象資料は578点で、不確定要素の残る半分以上の個体も含めて分析を行った。類型別に見ると、Ⅰ類はわずかで、Ⅱ類を主体とする。Ⅱ類は、A類、B類がほぼ同数あり、両者で、全体の9割以上を占める。背面構成では、1方向、2方向が主体で、3方向、4方向で構成されるものは非常に少ないことがわかる。石核では剥片、盤状剥片を素材とし、素材長辺を中心に剥離作業に利用されるものが主体であること、素材全周を利用するものは基本的に認められないことなどの特徴と整合的といえよう。A類ではA1類が約85%、B類ではB2類を主体に、B1類、B3類が一定量を占めている。剥片の剥離方向と背面の剥離方向が一致するものが主体を占めているといえるであろう。一方、B2類、B4類、B5類やC類の多く、D類は剥片の剥離方向とは逆方向の剥離を背面にとどめるものであり、187点を数える。全体の約3割を占め、少なくない割合である。石核の様相と整合的であると同時に、槍先形尖頭器製作に関わる剥片が一定量含まれていると想定されることも整合的である。槍先形尖頭器の製作については接合資料の項でも触れるが、槍先形尖頭器製作に特徴的な調整剥片（ポイントフレーク）は、背面構成は他方向を主体とし、打面は比較的小さく、打瘤の発達が弱く、側面が湾曲するなどの特徴があり、出土剥片中にも特徴に一致するものが散見される。

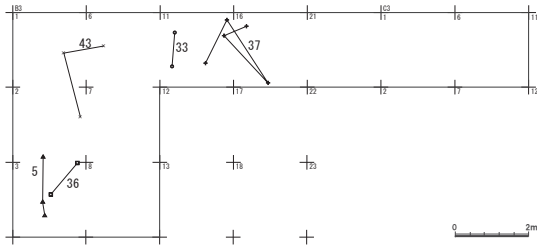
これまで分析してきたように、出土剥片の諸特徴は、石核から復元される剥片と整合的であり、同時に槍先形尖頭器製作も行われたことを予想させる。一方、石核には盤状剥片石核が含まれているが、剥片においてはその関連資料は皆無といっていよい。

2) 接合資料と剥片剥離技術

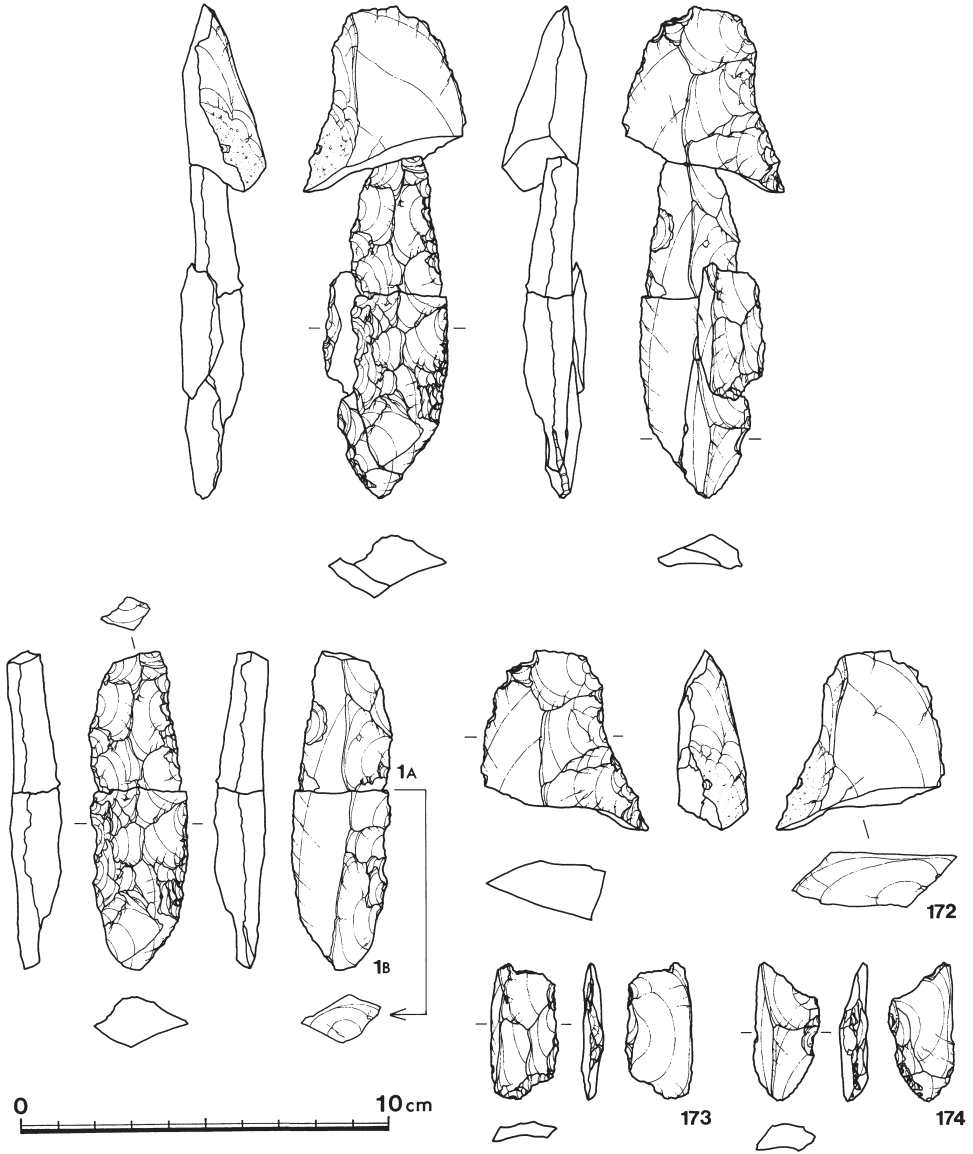
2-1. 接合資料（第31～33図）

第Ⅰ文化層における接合資料は5例検出された。接合資料はいずれも遺物分布が集中する調査区南半部から出土しており、槍先形尖頭器資料（第31図、接合資料37）を含んでいる。接合点数は槍先形尖頭器製作に関連する接合資料が5点と最も多く、そのほかは2～3点の接合で、いずれの接合資料も相互に近接した場所から出土した。（第30図）。

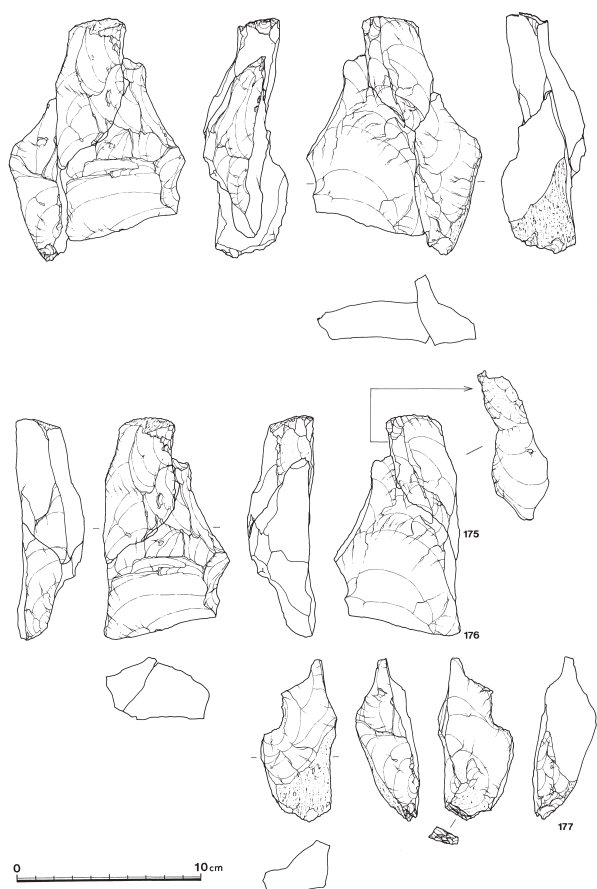
接合資料32（第31図） 槍先形尖頭器製作を示す資料で、槍先形尖頭器未成品（1）に欠損した先端部（172）や調整剥片（173・174）が接合している。盤状剥片を素材



第30图 冠遺跡D地点第2次調査第I文化層接合資料分布図 (1/200)



第31图 冠遺跡D地点第2次調査第I文化層接合資料 (接合資料37) (1/2)



第 32 図 冠遺跡D地点第 2 次調査第 I 文化層接合資料
(接合資料 5) (1/4)

から欠損して廃棄されている。

製作の比較的初期に欠損した先端部との接合状況を見ると素材背面側の形状が比較的よく残存しており、素材の厚さを減じる作業は主として素材腹面側で行われたことがよくわかる。素材背面側は平面の成形と腹面側調整の打面の役割を果たしている。廃棄直前で厚さ 1.5cm 弱で、完成形にかなり近づいており、幅もすでに約 2.6cm で、完成形の長さが 8cm 程度とすれば幅が大きく減少することはないと想定される。廃棄段階の形状が完成形に近づいているにもかかわらず、腹面の約半分には素材面が残されており、完成形に近い素材が用意されていると推定される。製作初期段階に製作された祖型（藤野 2004）平面は完成品に比較的近い形態で、作業の進行によって厚さを減じるとともに少しずつ幅狭に調整されたと推定されるが、長さは大きく変

としており、素材を上下に二分するように分割し、末端側を利用して製作を開始している。製作開始時の大きさは長さ 14cm、幅 5.0cm、厚さ 3.0cm 程度と推定される。初期の調整は分割面を打面として行っているが、この調整中に先端部が折損している。調整は腹面右半のみで、背面は素材主要剥離面と分割面のみで調整痕は認められないことから成形段階の比較的早い時期に欠損したものと推定される。さらに当初目的とした大きさをひとまわり小さく修正し、製作が継続されている。成形はかなり進んでいるが、背面左側縁中央部の調整中に器体中央部



第 33 図 冠遺跡D地点第 2 次調査第 I 文化層接合資料（接合資料 33・36・43）（1/4）

化しなかったものと思われる。

接合資料 5（第 32 図） 盤状剥片石核と加工痕ある剥片の接合資料である。接合 3 点のうち 2 点は石核（176）と破損部（175）の接合で、破損部は石核腹面側の大剥離面が形成された際に同時に石核から剥離したものと推定される。石核背面下半の剥離面と腹面側の剥離面の切り合い関係は不明瞭で、腹面側の大剥離面形成時に同時に生じたものと思われる。さらにその際に加工痕ある剥片（177）も同時に剥離した可能性が高い。剥離作業は石核下側縁側を主体に行われており、比較的大型の盤状剥片が剥離された可能性がある。加工痕ある剥片は腹面下端部に粗い調整が施されており、厚手で先端が尖る棒状の形態を示す。

先端部や背面左側縁上半などが利用された可能性がある。

接合資料 33（第 33 図上段） 剥片 2 点の接合資料である。2 点とも小型の剥片で、点状打面に近い小打面である。178 の背面右側の剥離面は打面付近に収束点があり、179 の打点位置もあわせて考えると、打点を少しずつ左にずらしながら直線的に後退させている。小型石核では対応する石核が明らかでなく、剥片の形状などから槍先形尖頭器製作にかかわる資料かもしれない。

接合資料 36（第 33 図中段） 本例も小型剥片 2 点の接合資料である。180 は幅広の打面であるが、薄く、側面は強く湾曲している。184 は小打面である。背面はいずれも剥離軸が相互に斜行する剥離面で構成される。剥片剥離は 180・181 の半分程度の剥片を含みながら近接した範囲を左右に打点を移動しながら後退している。剥離された剥片はいずれも厚さ 1cm 未満の薄手の剥片と推定され、本例も槍先形尖頭器の製作に関連する可能性がある。

接合資料 43（第 33 図下段） 剥片 2 点の接合資料で、うち 1 点（183）は欠損した末端部（182）が接合している。いずれも幅広、厚手の打面で、平面形は方形状であ

る。183は剥片自体も厚手である。先行する剥離も含めて直線的に打点が後退している。打面や側面は平坦な剥離面で、立方体状の石核の一端を直線的に打面を後退させながら剥片剥離を行っているものと思われる。しかし、左側面や183(+182)背面には異なる方向からの剥離痕も残されていることから打面を転位しながら剥離作業を進めている可能性がある。

2-2. 剥片剥離技術

第I文化層の剥片剥離技術については、概要報告において、A類とB類に大きく2つに分類し、前者を5cm以下の小型剥片を剥離するもの、後者を10cm前後以上の大型厚手の剥片を剥離するものとした(藤野1992)。A類は打面と作業面を剥離作業の進行に伴って一定の割合で交互に交代するもの(A-1類)、打面を90°あるいは180°転位するもの(A-2類)、作業面と打面が特定できず、石核が楔形石器状を呈するもの(A-3類)に、B類は打面と作業面を交代するもの(B-1類、A-1類に対応)と打面を90°あるいは180°転位するもの(B-2類、A-2類に対応)に細分した。剥片の項でみたように、出土剥片は大半が長さ、幅ともに5cm以下で、5cmを超えるものでも長さ、幅ともに8cmを超えるものはない。剥片としては出土していないが、石核には盤状剥片石核が含まれ、槍先形尖頭器接合資料から盤状剥片が利用されていることがわかる。これらのことからすれば、現状においても先に示した剥片剥離技術の様相を基本的に変更する必要はないと思われる。しかし、石核の項で述べたように、石核は2種類に分類され、打面を転位する1類が主体であるが、打面が固定的な2類が少量ある。2類とした石核には打面転位を行っている可能性のあるもの(第23図132)があり、今後資料数の増加を俟って検討する必要があるが、現段階では打面を固定的に運用して剥片剥離を行う技術を設定しておきたい。先にA-2類としたものは石核の項で2類としたもので、B-2類としたものは石核祖型で、未分類である。

冠遺跡群の位置する中・四国地方では、剥片剥離技術は大きく二つの技術に分類することができる(藤野2001)。I類は打面を固定して(あるいは固定的に運用して)目的剥片を剥離するもの、II類は打面を転位しながら目的剥片を剥離するものである。第I文化層ではII類が主体で、I類は認められるが、例外的である。I類はやや多様な石核形態(130~133の石核)、剥片剥離過程を包括している可能性がある。主として5cm以下の幅広剥片を主に剥離している。出土資料中に縦長剥片、石刃といえるものではなく、目的とする剥片の形態や大きさの特徴がII類による剥片と重複するた

め実資料での区分は困難である。目的剥片がいかなる石器の素材となっているのか判然としないが、小型幾何学形石器、削器、抉入石器、加工痕ある剥片、使用痕ある剥片などに利用されている可能性がある。

Ⅱ類は2種類に細分される。Ⅱ-1類は剥片や盤状剥片を素材とし、素材長辺を主体に打面と作業面を後退させながら目的剥片を剥離するものである(旧A-1類)。多くの資料がこれに属すると思われるが、石核から見る限り、小型石核では石核当りりの剥片製作量はそれほど多くない。Ⅱ-2類は楔形石器状の石核を利用するものである(旧A-3類)。量的にはわずかで、小型石核を主としている。Ⅱ-1・2類は小型幾何学形石器、削器、抉入石器、石錐、加工痕ある剥片、使用痕ある剥片などに素材を供給しているものと思われる。Ⅱ-3類は礫、分割礫を素材とし、打面と作業面を交代させながら盤状剥片や大型剥片を剥離するものである(旧B-1類)。石核から見れば一定量を占めるが、剥片としては出土していない。石核や槍先形尖頭器を中心に素材を供給している。

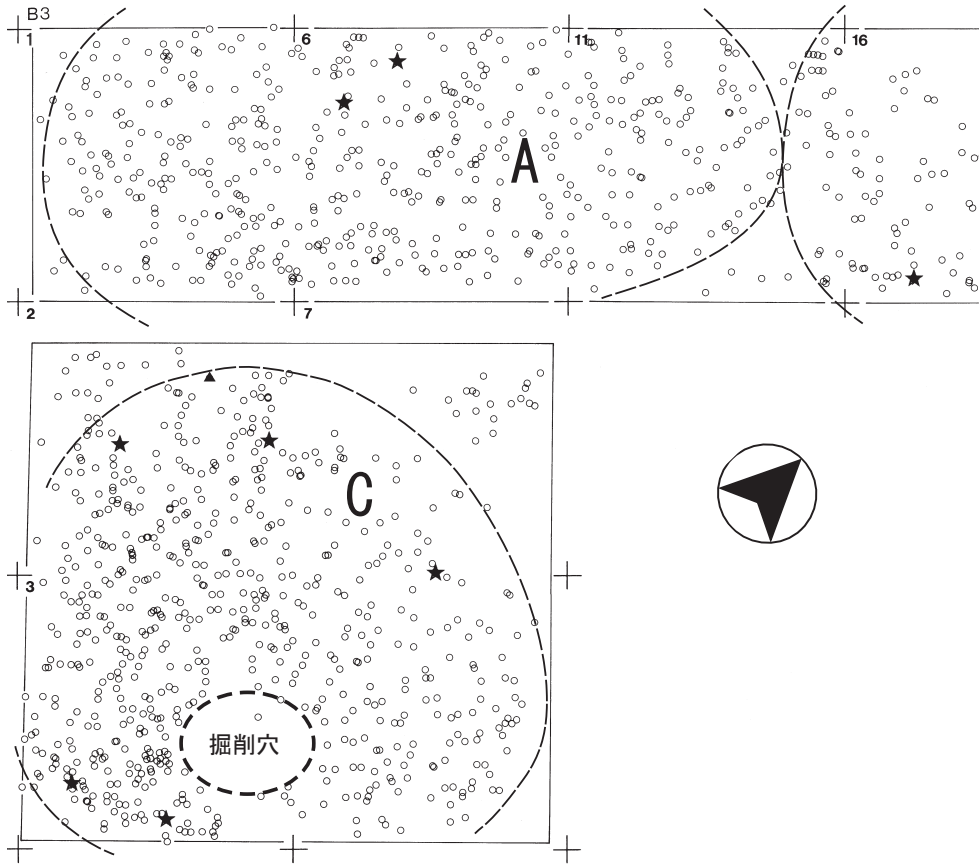
石器素材の面から見ると、石錐、加工痕ある剥片、使用痕ある剥片のなかに槍先形尖頭器製作過程で剥離される調整剥片を素材とすると見られる資料が散見される(16・17・46など)。また、剥片の中にも一定量の槍先形尖頭器製作に伴う資料が含まれており、接合資料の説明の中でも触れた。Ⅱ-1類の剥片と槍先形尖頭器調整剥片は特徴が重複し、個別には峻別できないが、Ⅱ-1類に関連する石核は第I文化層の主体を占めるが、小型品を主体とし、石核片とも言うべき破損品が多い。出土点数の割にはその剥離数(生産量)は出土剥片量に見合うものではないことからすると、石器素材として槍先形尖頭器調整剥片が相当量利用されているとみても大過あるまい。

以上のように、第I文化層の剥片剥離技術はⅡ-1類、Ⅱ-2類を主体とし、Ⅱ-1類の目的剥片は各種石器の素材(大きさから見て基本的に槍先形尖頭器を含まない)として利用され、Ⅱ-2類の目的剥片は槍先形尖頭器、石核の素材として供給されていると見ることができる。一方では、槍先形尖頭器製作の調整剥片がかなりの量石器素材として利用されていることが想定され、槍先形尖頭器が石核としての側面を持っていることが了解される。

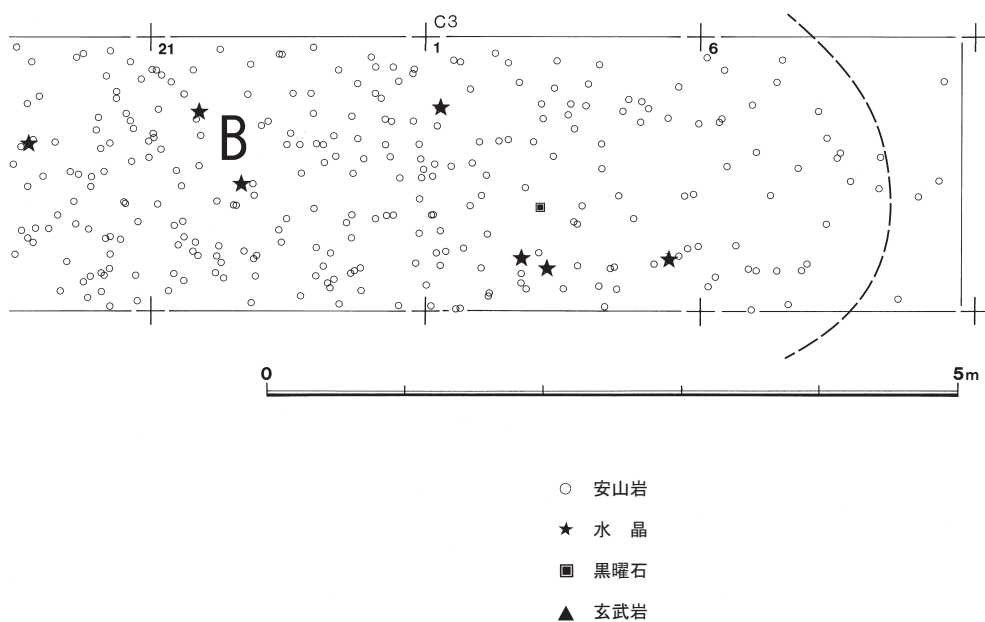
3) 出土遺物の分布状況

3-1. 第I文化層の遺物分布状況

第I文化層出土の遺物は1552点である。遺物は調査区の全域に分布するが、とくに調査区南半において分布密度が高い⁽⁹⁾(第34図)。調査区西部のB3-1・6・11・



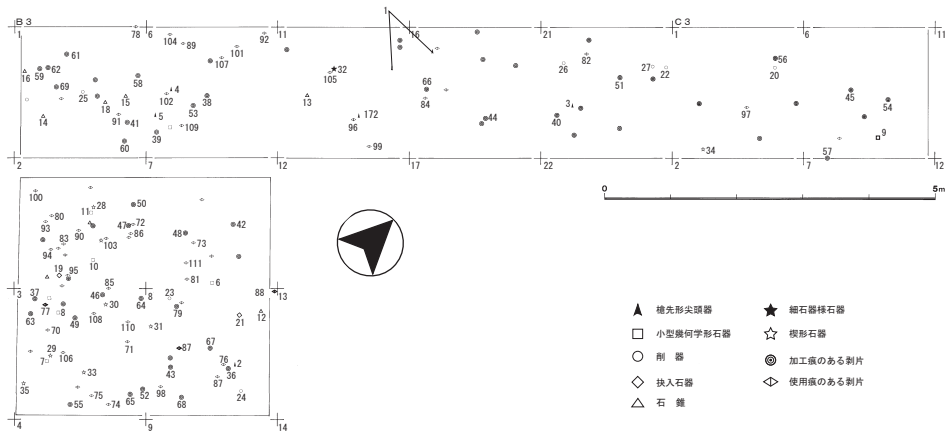
16・21区、C-1・6区（以下、西調査区）ではB3-1・6ではきわめて密度が高い分布状況を示すが、北に向かって次第に分布密度が低くなり始め、北端部のC3-6区ではきわめて散漫な分布となる。詳細見ると、B3-11区北端部あたりから分布が疎らになり始め、B3-16区ではかなり散漫な分布となる。しかし、B3-16区北端付近から分布が再びやや密となり、C3-1区中央部付近から急速に分布が疎らとなっている。B3-16区では西半部の分布がとくに疎らであり、分布の空白も認められる。明確な空白部は認められないが、B3-1～16南端部までとB3-16北半部～C3-6区の大きく二つの分布域に分けることができるかもしれない。B3-2・3・7・8区（以下、東調査区）はB3-3区、B3-2区東半において分布密度が密で、周辺に向かって分布密度が疎らとなり、B3-7区北西部では空白域を形成している。また、B3-3区南東隅も空白域が認められ、南側の第1次調査区では基本的に同一文化層の分布は確認されていない。西調査区との間はやや分布が散漫になっており、明瞭な線引き



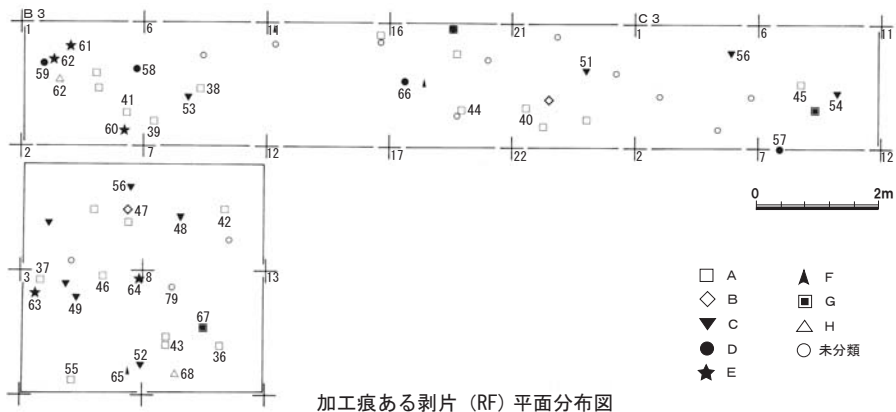
第 34 図 冠遺跡D地点第 2 次調査第 I 文化層石材別平面分布図 (約 1/50)

はできないが、直径 4 m 程度の円形状のまとまりと見ることができよう。以下、西調査区南半を分布域 A、西調査区北半を分布域 B、東調査区を分布域 C として説明する。

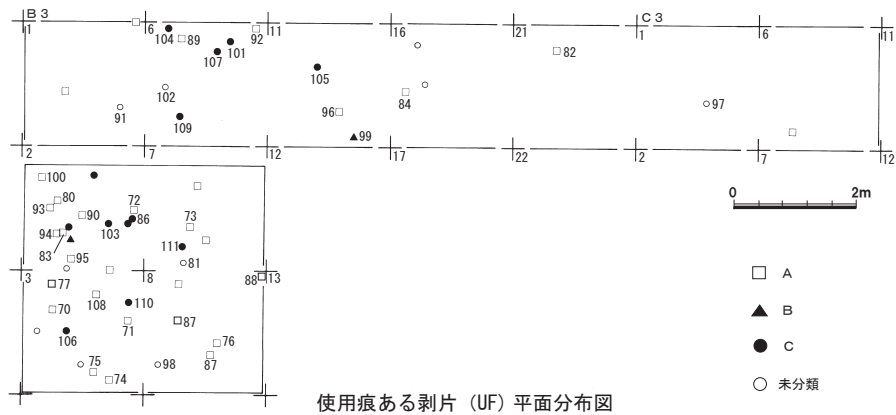
第 I 文化層の石材は安山岩 (1551 点) を主体に、水晶 (15 点)、黒曜石 (1 点)、玄武岩 (1 点) がわずかに伴う構成である。安山岩が各分布域の骨格を形作っていることは述べるまでもないことであるが、各分布域とそのほかの石材の関連を概観してみると、水晶は出土点数のみでなく、異なる分布を示している。分布域 A は 2 点が出土しており、分布のほぼ中心に位置している。分布域 B はもっとも多い 8 点が出土し、ほぼ全体に等分に分布する。分布域 C では 5 点が出土しているが、いずれも分布域の縁辺部から出土した。黒曜石、玄武岩は各 1 点のみで、前者は分布域 B の北部、後者は分布域 C の縁辺部から出土している。黒曜石は比較的分布の中心に近い位置にあるが、かなり分布の希薄になった辺りに位置しており、わずか 1 点ずつであるが、同様の分布位置にあるといえる。安山岩はいくつかの石質に分類することが



第 35 図 冠遺跡D地点第 2 次調査第 I 文化層器種別平面分布図 (1/110)



加工痕ある剥片 (RF) 平面分布図



使用痕ある剥片 (UF) 平面分布図

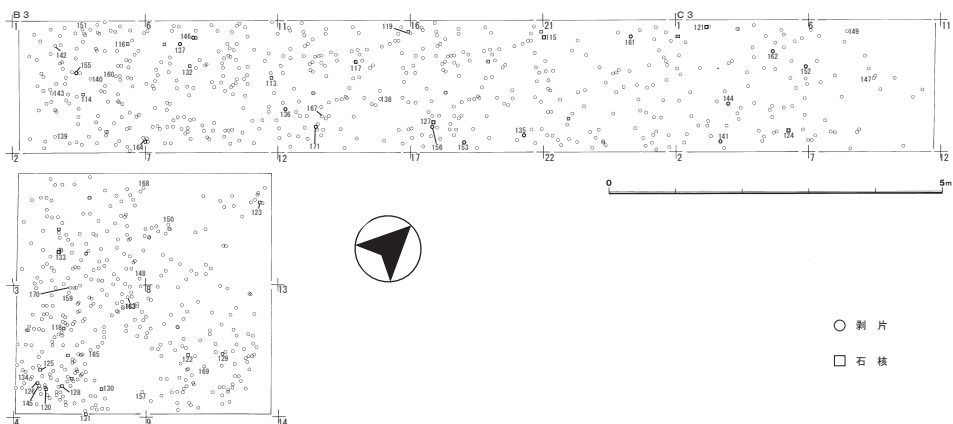
第 36 図 冠遺跡D地点第 2 次調査第 I 文化層出土 R F (上)・U F (下) 平面分布図 (1/120)

でき、石質ごとでみれば、分布に特徴を持っているが、器種別の分布状況を概観した後、後に改めて検討する。

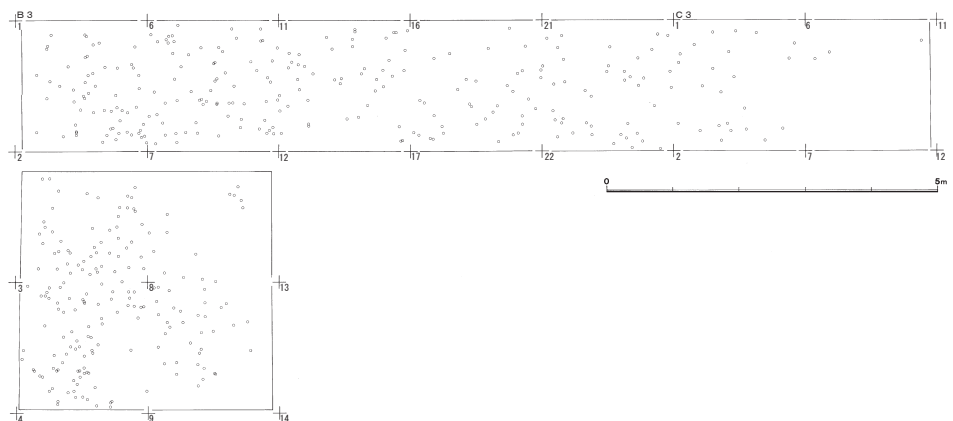
3-2. 石器器種の分布状況

まず、定型石器の分布状況について検討する。槍先形尖頭器は各分布域に少量ずつ分布している。分布域Aでは4点出土しており、南側の遺物密集部に1点、北縁部に3点が分布する。後者は接合資料で、周辺に接合関係を持つ調整剥片が分布する。分布域Bで2点、分布域Cで1点が出土し、いずれも分布域の縁辺部である。小型幾何学形石器は各分布域から出土しているが、分布域Cに集中している。分布域Aでは遺物密集部に、分布域Bでは分布域の縁辺部に位置している。分布域Cでは分布の外縁部に位置し、とくに南側に集中しており、半数は遺物集中部殻の出土である。削器もすべての分布域から出土しており、分布域A・Cに2点、分布域Bに4点が分布する。分布域C 1点(20)を除くと、各分布域ともに遺物密集部内および近接の外縁部に分布する。石錐は分布域A・Bに分布しているが、分布域Cでは出土していない。分布域Aでは遺物集中部を中心に分布するが、分布域Cでは遺物集中部の縁辺部に位置し、対照的な分布を示す。楔形石器は分布域B・Cに分布するが、8点中7点は分布域Cに集中している。分布域Cでは1点を除き分布域の南部に集中し、遺物集中部から外縁部にかけて広がりを見せている。

加工痕ある剥片の分布は基本的に各分布域の分布状況に一致している(第36図上段)。しかし、詳細に見ると、分布域Aでは遺物集中部に分布が重複するが、分布域B・Cでは遺物集中部と北側の外縁部に分布が分かれ、分布域Bでは北側外縁部との間に、分布域Cでは西側の分布域外縁部との間に空白域が認められる。細分形態の分布については、個体数が少ない類型は傾向性を指摘するのが困難であるため、一定量の出土があるA・C・E類についてみる。A類は最も多くの点数があり、加工痕ある剥片全体の分布状況に基本的に一致している。C類についても同様の傾向があるが、分布域Aではわずか1点が分布するのみである。E類は分布域Bには分布が認められない。分布域A・Cでは遺物集中部にのみから出土し、縁辺部には分布が認められない。推定される機能との関係でいえば、A類は切裁的機能を持つもので、便宜的に場所を限定せず利用されているということを示しているのかもしれない。C類は搔削的機能を持つもので、分布の上でも削器のそれに類似する。E類は穿孔的機能を持つもので、分布の上では石錐は分布域Bでは出土しておらず、整合的である。出土分布域での石錐の分布は外縁部にも分布が認められる点で異なるが、E類が便宜的な石



第 37 図 冠遺跡D地点第 2 次調査第 I 文化層出土剥片・石核平面分布図 (1) (1/110)



第 38 図 冠遺跡D地点第 2 次調査出土碎片平面分布図 (1/110)

器であること勘案すると遺物集中部にのみ分布するのはそれなりに意味のあることかもしれない。

使用痕ある剥片は特徴ある分布を示している (第 36 図下段)。分布域 C で集中的に分布しており、分布域 A からも一定量出土しているが、分布域 B にはほとんど分布していない。分布域 C では基本的に遺物全体の分布状況に一致しているといえるが、どちらかという分布域外縁の西側に集中する傾向がある。分布域 A では遺物集中部を避けるように B 3 - 6 区北端部や分布域北側外縁部に分布する。細分類型で見ると、A 類は類型の大半を占めることもあり、全体の分布状況に基本的に一致している。これに対して、B 類・C 類は分布域 B には分布が認められない。C 類は分布域 A

では全体の分布状況におおむね一致しているといえるが、分布域Cでは西側外縁部に多くの資料が分布し、分布域Cにおける使用痕ある剥片の分布傾向が顕著な形で現れている。

剥片および碎片は出土遺物の大半を占める器種であり、遺物分布全体の様相を決定する骨格をなすと思われるが、実際の分布の上でも全体の分布状況と一致しており、碎片も改めて分布状況を説明する必要はない（第37・38図）。ただし、碎片の分布状況を見ると、分布域B南部のB3-21区中央部付近にわずかに東西の空白帯が認められること、剥片の分布と異なりC3-1区北半部より北側はほとんど分布が認められないことが注意される。分布域B南部のB3-21中央部付近にわずかな空白帯は詳細に見ると剥片の分布でもある程度認識することが可能で、主要器種の分布状況とも重ね合わせると、分布域Bはさらに区分できるかもしれない。

石核は分布域A・Cの遺物集中部を中心に分布しており、基本的に全体の分布状況に対応しているが、いくつかの特徴ある分布状況を指摘できる。分布域CではB3-3区南東部に石核の集中的出土が認められ、分布域Cの遺物集中部と一致している。接合資料は少数例しか検出されていないが、剥片・碎片の分布状況とも重ね合わせて考えれば、石核の集中的分布付近で剥片剥離作業が行われ、遺物の集中的分布が形成されたと理解される。分布域Cではそのほかの石核もB3-2区南東部など遺物分布が密集する場所、あるいは隣接部からの出土であり、付近で剥片剥離作業が行われたものと思われる。分布域Aでは遺物密集部からの出土を主体とするが、外縁部からの出土も認められる。外縁部においても遺物分布に濃淡が認められ、石核出土地点付近で小規模な剥片剥離が行われているのかもしれない。

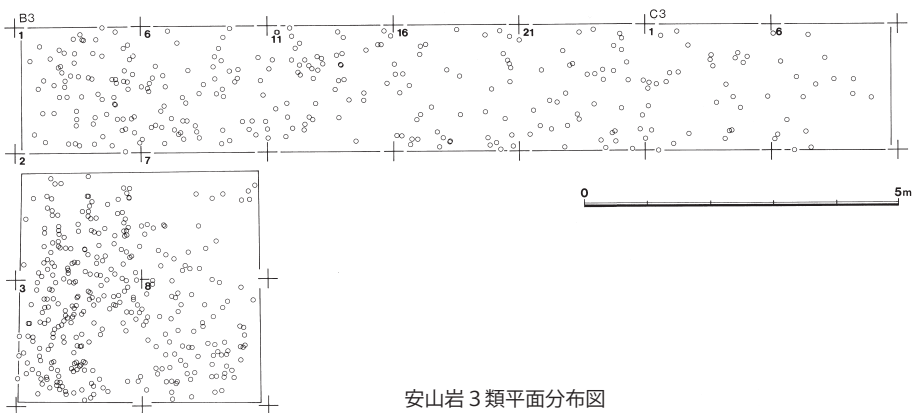
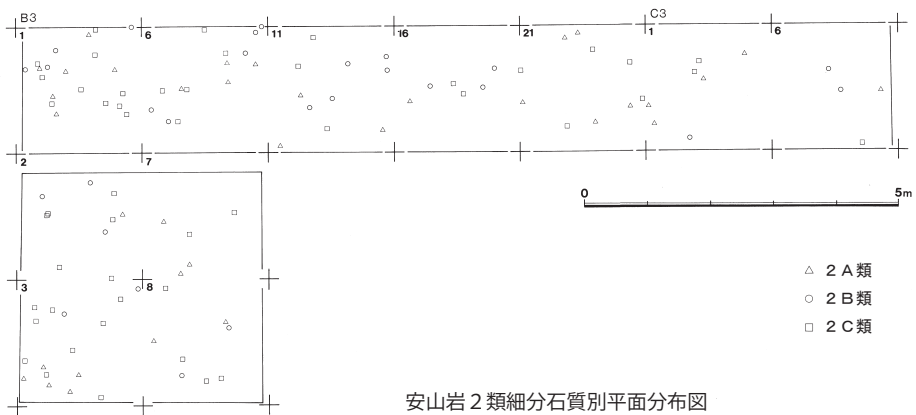
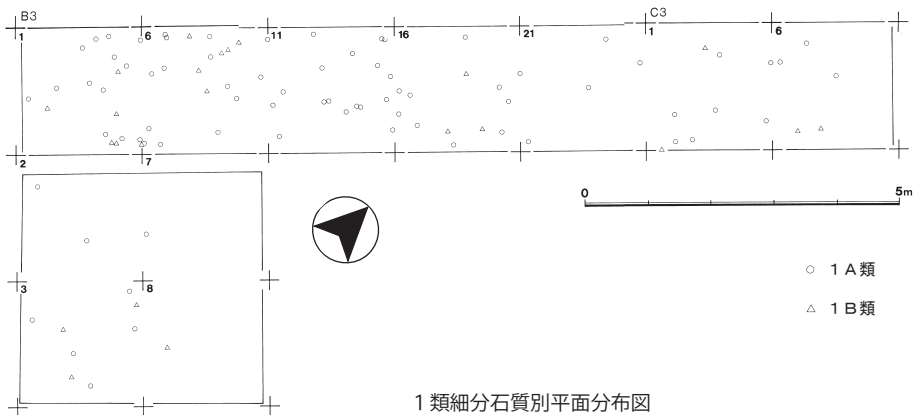
これまで見てきたように、定型石器は器種によって各分布域における分布状況が異なっていた。遺物集中部の形成との関りでは石核の分布状況が重要な位置を占めているようで、分布域A・Cでは基本的に剥片剥離作業の結果と捉えることができ、とくに分布域Cでは遺物集中部と石核の集中分布が一致している。しかし、石核や剥片の項で述べたように、本遺跡では残された石核を見る限り、剥片の生産量はあまり多くなく、接合資料もわずかである。現象的には分布状況、あるいは剥片の出土量との間にギャップが認められる。原産地遺跡であることを勘案すると、かなりの量の石核が持ち出されていると見るべきかもしれない。もう1点は槍先形尖頭器製作との関わりである。本文化層では槍先形尖頭器の製作が行われており、接合資料も存在する。各分布域からの槍先形尖頭器の出土量はわずかであり、多量の調整剥片が残された様相

ではないが、調整剥片と認定しうるものやその可能性のある剥片が多数存在する。遺物集中部形成のもう一つの要因であろう。ただし、槍先形尖頭器は大半が分布域外縁部からの出土であり、破損品である。出土品に限って言えば、大半が直接の製作場所からは移動しており、一部に搬入品を含むかもしれない。また、槍先形尖頭器の接合資料は本遺跡内で製作されたものと推定できるが、分布域Aの外縁部に位置し、隣接部に本接合資料を製作したと想定できる集中部は調査区内には存在しない。隣接部の未調査区に製作場所が存在するものと思われるが、少量の調整剥片とともに搬出され、廃棄されたものと思われる。

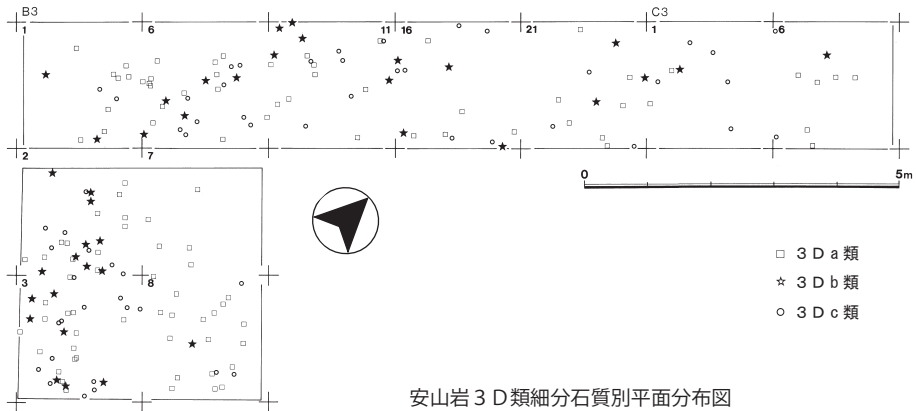
そのほかの定型石器は遺物集中の外縁部や分布域の外縁部に位置するものが比較的多いが、集中部と一致するものも一定量あり、使用の場と廃棄場所が必ずしも一致しないことを示しているのかもしれない。加工痕ある剥片、使用痕ある剥片は遺物分布域とほぼ一致する分布状況であり、適宜剥片剥離を行って使用していると状況を示しているのであろう。しかし、分布域Aでは分布域北側外縁部に槍先形尖頭器、石錐などを含むまとまりを形成している。また、分布域Bでは使用痕ある剥片の分布が認められず、加工痕ある剥片、使用痕ある剥片の細別類型ごとの分布にも一定の特徴が指摘される。遺物分布の状況や石核の分布、出土石器器種の分布的特徴からみると、分布域A北部、分布域Bは石器製作以外の作業場の性格が想定できるかもしれない。

3-3. 安山岩の石質分類と分布状況

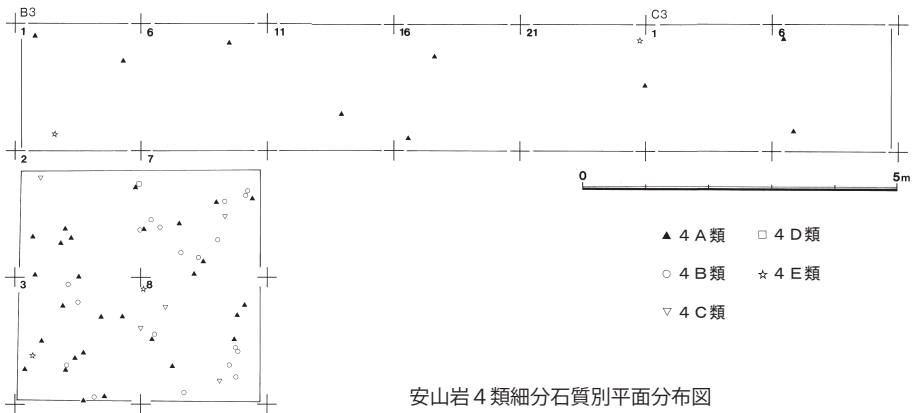
本遺跡が安山岩原産地に立地することから出土遺物のほとんどは安山岩であり、遺跡の構造的には安山岩製遺物の個体単位の分布や動きの分析が不可欠であるが、安山岩は個体ごとの特徴の乏しい石材であり、とくに石器に適した材質はかなり共通した特徴を持っている。したがって、個体に迫るための重要な手がかりとなる安山岩の肉眼的分類は困難であり、大まかな分類を行わざるをえない。出土安山岩の分類は、石質（緻密さ、斑晶の有無や量、風化の度合い）、表面で観察される縞（有無、太さ、明瞭さ）、色調の3属性によって行った。第1の属性である石質は4種類に分類した。1類は非常に緻密で均質性が高く、斑晶がほとんど認められないもの（大剥離面はおおむね滑らかである）、2類は小さな斑晶は多数認められるが、緻密で均質なもの、3類は斑晶を多く含むが、比較的緻密で均質なもの（剥離した面はややざらついた感じがある）、4類は斑晶を多く含み、比較的均質であるが緻密さにかけるものの4種類に分類した。分類はこの石質を基本として、縞、色調の属性の順で細分を行った。最終的には、石質を基本とする大分類4類型、さらに縞の状態を加味した中分類（1類



第 39 図 第 I 文化層出土安山岩石質分類別分布図 (1)



安山岩 3 D類細分石質別平面分布図



安山岩 4 類細分石質別平面分布図

第 40 図 第 I 文化層出土安山岩石質分類別分布図 (2)

2 類型、2 類 3 類型、3 類 5 類型、4 類 5 類型)、さらに色調を加味した小分類 (2B 類、3 B 類、3 D 類のみ細分) の 3 段階の分類を行って分析を行った。ここでは、紙幅の関係から大分類を中心に分布状況について概観し、詳細については別稿を用意したい。

分類の対象は剥片とし、剥片は一定以上の残存部位のあるものとした。分析対象は 934 点で、各類型の内訳は、1 類 99 点、2 類 110 点、3 類 658 点、4 類 63 点、未分類 4 点である。冠遺跡群で採取できる原石は 3 類が最も多く、産出状況を反映しているといえるが、自然状態の原石構成に比べると 1 類、2 類の良質石材の割合が高く、選択的に石材採取を行っている結果であろう。各類型ごとの分布状況を見ると、大多数を占める 3 類は全体の遺物分布状況と基本的に重なる状況を示すが、西調査区における南北分布の濃淡を一層はっきり見て取ることができる (第 39 図下段)。また、分布域 A・C の遺物集中部を詳細にみると、全体の分布では全体に密集している様子であっ

たが、分布域Aでは直径2 m程度の分布のまとまりを認識することが可能である。分布域Cについても調査区南側への集中が明瞭で、東西3 m、南北2 m程度の楕円形の集中部を核としてその周辺に分布している様子がよくわかる。これに対して1類は分布域A遺物集中部を中心に分布し、そのほかの分布域では散漫な分布である（第39図上段）。もっとも出土遺物量の多い分布域Cにほとんど分布していないことは注意しておきたい。2類は遺物全体の分布状況とは無関係に全体的に散漫な分布を示す（第39図中段）。細分類型でも特定のまとまりを指摘できないようであり、少量の持込で、剥片剥離や石器製作にあまり関与しない石材と思われる。4類は1類とは逆に分布域A・Bにはほとんど分布せず、分布域Cに集中的に分布する（第40図下段）。分布域Cでは特定のまとまりを見せず、分布域全体に散漫に分布し、細分類型も同様のようである。

3類の細分類型についても少しだけ触れておこう。3類のうち縞があるが少ない3B類、多くの縞があるが、縞とそれ以外の部分の境が不明瞭な3D類が数の上では類型の多くを占めており、ここでは3D類の分布状況を見ておく（第40図上段）。基本的には遺物全体の分布状況に対応しているが、分布域Aでは遺物集中部の北半から北側にかけて分布しており、遺物集中部とは分布が北側にずれている。分布域Bでは全体の遺物分布密度に比較すると多くの資料が分布する。分布域Cでは分布域全体に分布しているが、とくに南西部に集中する傾向がある。

以上見てきたように、安山岩の石質による類型においても分布に特徴が認められた。安山岩の特質上個体に近い分類ではないが、分布域に関連して認められる類型ごとの分布の様相の相違は石材搬入の背景に相違を予想させ、分布域A～Cはここで行われた活動を反映していると想定される。

3-4. 受熱剥片の分布状況

第1文化層では礫群等の遺構は検出されていないが、受熱痕を有する剥片が24点確認されており、これが唯一火処を推考する手掛かりである。受熱剥片の認定については、主として表面に見られるひび割れを観察し判断した。大きく亀の甲状に亀裂の入っているものもあるが、多くは非常に微細な亀裂が剥離面全体を覆っているようなものである。また、いくつかの剥片については熱により生じたと思われる破損面⁽¹⁰⁾によって確認した。

B3-1区から16区の西端にかけて多く比較的多く分布するが、特定の範囲に集中する傾向はない。この他にC3-1区で3点、C3-6区で1点検出した。ひび割

れの顕著なものが主体で、剥離面のほぼ全面に認められた。B3 - 6 区の石核が 1 点あるほかはすべて剥片あるいは碎片である。該当資料の周辺において炭化物等の集中するなどの状況は観察できなかった。

4. 冠遺跡遺跡群における槍先形尖頭器石器群

前節において冠遺跡 D 地点第 I 文化層の石器群について詳細に分析を行ってきた。最後に石器群の様相をまとめるとともに、冠遺跡群における槍先形尖頭器出土遺跡の様相や位置づけについて言及してみたい。

1) 冠遺跡 D 地点の槍先形尖頭器石器群の特徴

冠遺跡 D 地点第 I 文化層は槍先形尖頭器を特徴とし、小型幾何学形石器、削器、挟入石器、石錐、楔形石器などを石器組成とする。石器素材、石核素材の製作のために剥片剥離を行っており、剥片剥離技術は打面転位を行いながら目的剥片を製作する I 類が主体である。I 類は 5cm 以下の小型剥片を主体に剥離する I - 1 類、10cm 前後より大型の剥片や盤状剥片を目的剥片とする I - 3 類があり、前者は定型石器や加工痕ある剥片、使用痕ある剥片などの各種の石器に素材を供給していると想定される。後者は槍先形尖頭器、石核に素材を供給していると想定されるが、出土剥片において確認することはできず、槍先形尖頭器接合資料でわずかに確認できるに過ぎない。石核にも盤状剥片、あるいは厚手の剥片素材と推定されるものがわずかにある。しかし、I - 3 類に関連する石核を除くと、小型の石核（残核）や石核破損品が主体であり、I - 3 類の技術によって剥離された剥片の利用を跡付けることはほとんどできない状況である。大型剥片、盤状剥片は槍先形尖頭器の素材として供給されていることは明確であるが、調査では槍先形尖頭器 5 点が出土したのみで、I - 3 類に関連する石核から剥離されたと想定される剥片の量との間にはギャップがある。これらのことから、I - 3 類による大型剥片、盤状剥片は遺跡内での槍先形尖頭器・石核の素材のみではなく、石器・石核素材として、あるいは石核や槍先形尖頭器（未成品を含む）としてかなりの量が搬出されていると想定される。

石器への素材供給の面では剥片剥離技術 I - 1 類が主体となっているが、槍先形尖頭器の製作が石器への素材供給の面で重要な役割を果たしている。出土剥片には形態的に槍先形尖頭器の製作に伴って剥離されたと考えられるものがかなりある。剥片剥離技術 I - 1 類に関連する石核からも同様の剥片が剥離されることから、出土剥片を峻別することはできないため、I - 1 類による剥片、槍先形尖頭器調整剥片の比率

を述べることはできない。しかし、出土石核の半数以上は小型品であり、5cm 以上、あるいは 5cm と推定される石核から類推される剥離された剥片の大きさから見れば、出土石器の一部しか素材を賄うことができない状況である。石錐などを中心に定型石器の中にも打面が小さく（あるいは薄い）背面構成が複雑で側面観が湾曲する剥片を素材としているものが認められ、加工痕ある剥片、使用痕ある剥片などにも一定量が含まれていることなどを勘案すると、石器素材として槍先形尖頭器の調整剥片がかなりの割合で利用されていると想定される。

冠遺跡 D 地点第 I 文化層は素材生産の面では、I - 3 類（盤状剥片製作）を基盤とした石核運用と石器素材供給、I - 3 類（盤状剥片製作）を基盤とした槍先形尖頭器の製作に基づく石器素材供給という二重構造的な様相を示している。石器素材の供給において槍先形尖頭器の製作が重要な位置を占めていると想定され、文字通り槍先形尖頭器石器群といえる様相を示している。

出土の槍先形尖頭器は半数が破損品であるが、5 点中 3 点はおおよその形態を推定することができる。接合資料をもつ槍先形尖頭器（第 8 図 1）は最も全形を窺うことができる資料で、製作途上で折損しているが、完成品の大きさとはそれほど隔たりはないと思われる。最終的には長さ約 8cm、幅 2～2.5cm の柳葉形（藤野 1989）を呈するものと思われる。下半部を欠損するもの（第 8 図 2）、下半と先端部を欠損するもの（第 8 図 3）は一回り小型のようであるが、長さ 6～7cm の柳葉形を呈するものと思われる。他の 2 点は素材段階から組成の一部を示しているに過ぎないであろうが、出土調整剥片の大きさなどからすると、6～8cm 程度の中型柳葉形を主体とする組成と推定される。

製作技術の特徴は、先に取り上げた 3 点にはいずれも広く素材面が残されており、厚手の剥片、盤状剥片を素材としていることがわかる。第 8 図 1 は当初長さ 10cm を超える大型品を目的として製作されたため加工量がやや多いが、それでも比較的完成品に近い形状の素材が用意され、素材を大幅に変形しながら完成品に至る状況ではない。他の 2 点は当初から成品とさほど厚さの違わない厚手の剥片が用意されており、最小限の加工で成品に仕上げられるものと思われる。先端部の欠損品（第 8 図 4）も両面に素材面が残されており、同様の特徴が窺える。

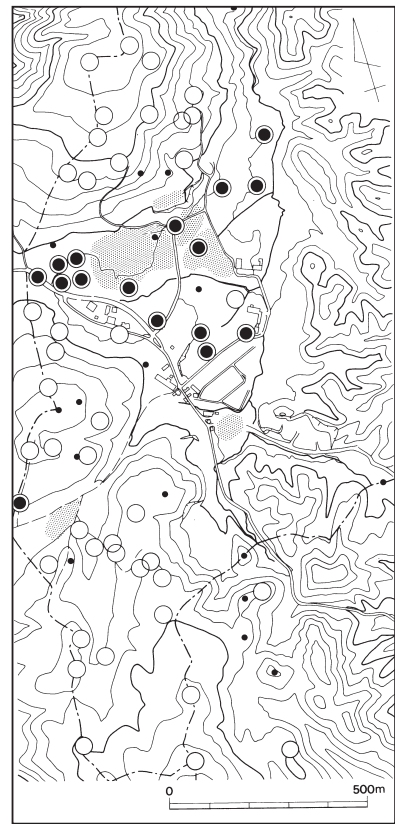
2) 冠遺跡群の槍先形尖頭器石器群と分布状況

冠遺跡群では、冠遺跡第 10 地点（12 トレンチ及び拡張区）の発掘調査が実施される以前から多くの槍先形尖頭器が採集され、槍先形尖頭器石器群が広く分布すること

が知られていた。冠遺跡群において槍先形尖頭器石器群が主要な一時期をなすことは間違いないが、冠遺跡第10地点を除いて、内容が明らかにされている遺跡はそれほど多くない。そうした意味からも、ここで冠遺跡群における槍先形尖頭器出土遺跡の様相を概観しておこう。

冠遺跡群における槍先形尖頭器石器群は第10地点（12トレンチ拡張区）をまずあげることができる。第10地点は1979年に発掘調査が行われ、第V層上部を中心に大型、中型を主体とする槍先形尖頭器石器群が検出された。第10地点は冠遺跡群において主要な槍先形尖頭器採集地点で、隣接する冠遺跡第8地点の立地する低丘陵の東側裾や北側の山麓南裾から冠高原低地部にかけて広い範囲で槍先形尖頭器が採集されている。採集資料は基部を丸く作り出す槍先形尖頭器が特徴的である。槍先形尖頭器とともに多くの縦長剥片、同石核が採集されている。冠遺跡第10地点の西側隣接地の冠遺跡第8地点や冠遺跡第10地点北側の山麓斜面途中の平坦部に位置する冠遺跡第9地点でも少量の槍先形尖頭器が採集され、さらに西側の冠遺跡第14地点でも槍先形尖頭器が採集されている。採集の槍先形尖頭器はやや幅広の中広形木葉形（藤野1989）が多いが、未製品を多く含んでいる。冠遺跡第14地点をさらに西に進むと、冠遺跡D地点であり、冠山南麓の低丘陵や冠高原低地の南緩斜面に槍先形尖頭器文化期の遺跡が広範囲に広がっていると推定される。

冠遺跡第10地点の南側隣接地の冠高原低地に立地する冠遺跡第11地点では集中的に槍先形尖頭器が採集されている。開拓により牛の牧草地、放牧地となっているため、かなり地形改変されているものと思われる。隣接して吉和川が北東流しており、微高地状の地形に立地している可能性がある。冠遺跡第10地点と間の遺物分布は連続的である。多くの未製品を含んで



第41図 冠遺跡高原における第I層の分布と石器の出土状況
（○は試掘地点で、●は石器（槍先形尖頭器が出土していない場合もある）出土地点である。網目は石器分布範囲を示す。）

（大上・沖編1998より）

おり、槍先形尖頭器製作が集中的に行われたことを推測させる。中型品、大型品の製作を主たる目的としているようである。多くが初期から中期工程の未製品と思われるため完成形の推定は困難であるが、明らかに柳葉形となる形状のものがある。中・大型の中細形木葉形、柳葉形を主体とする組成かもしれないが、複数時期の槍先形尖頭器が混在している可能性も高く、今後の調査に期待される。なお、冠遺跡第 10・11 地点の東側に位置する冠遺跡 A～C 地点でも少量ではあるが、槍先形尖頭器が出土している。

冠高原西側にはスキー場が位置し、スキー場造成に伴って冠遺跡 3・5 地点付近の地形が大幅に改変され、多くの安山岩石器が分布する結果となった。この冠遺跡 3・5 地点やその北側の丘陵頂上平坦部付近でも槍先形尖頭器が少量採集されるが、槍先形尖頭器が集中的に出土する地点は知られていない。

冠遺跡 3・5 地点の位置する独立丘陵状地形と南側の丘陵地帯にやや広い谷地形が形成されており、冠遺跡第 4 地点が立地する。南側の丘陵の北側緩斜面を中心に遺物が分布し、槍先形尖頭器を中心とする遺物が集中的に採集されている。やはり未製品が多く、槍先形尖頭器製作が集中的に行われたことを推測させる。

このほかにも、広島県教育委員会による冠遺跡群の総合調査の試掘調査に伴って槍先形尖頭器の出土が確認できる(大上・沖編 1998)。試掘調査は 35 地点について行われ、そのうち第 2・5・8・10・13・28 グリッドの 6 地点で槍先形尖頭器が出土している(第 41 図●印)。6 地点のうち 5 地点(第 2・5・8・10・13 グリッド)は、冠遺跡 D 地点や冠遺跡第 14 地点に近接した場所であり、槍先形尖頭器石器群検出遺跡や槍先形尖頭器採集場所に近い。大きく見て従来の分布域にあるといえる。第 28 グリッドも冠遺跡第 4 地点に近接した場所であり、基本的に新たな分布地点ではない。

以上概観したように、冠高原における槍先形尖頭器の分布はほぼ全域にわたっているが、冠山南麓の冠高原北半の低地部に集中しており、冠高原丘陵部には分布するものの希薄な状況であることがわかる。また、盆地部南半も現状では分布が確認できない(冠高原低地部南側は低地部の中では標高が低く、旧石器時代には湿地状を呈していた可能性もある)。槍先形尖頭器の集中的採集地点である第 4 地点は飛び地的に冠高原からやや奥まった谷あい位置する。同じく丘陵緩斜面部を中心に遺物が広がるようであり、冠高原低地部と基本的に同様の立地といえそうである。これらの冠高原低地部を中心とする地点は原石採取に適した場所かどうかは今後検討すべき課題であるが、近接して河川が位置し、旧石器時代においては原石採取が比較的容易な場所である。

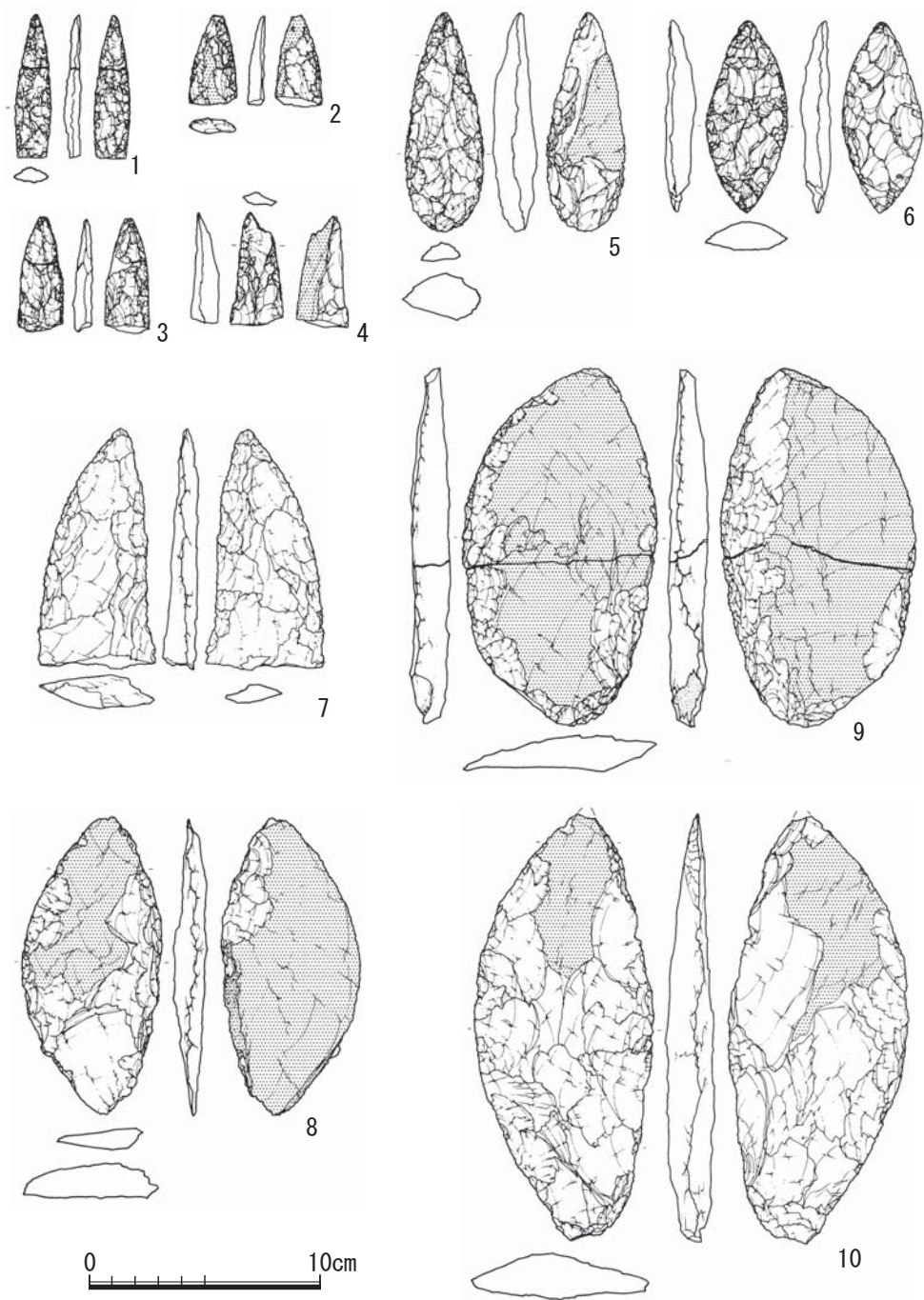
あった可能性がある。やや奥まった位置にある冠遺跡第4地点も谷あい地であり、周辺からの転石が期待できる場所であろう。槍先形尖頭器の製作には多量の石材が必要であることから、採集場所に近く、なおかつ搬出に便利な場所が選択されているということなのかもしれない。

3) 冠遺跡群の槍先形尖頭器の特徴と編年的位置づけ

最後に冠遺跡群における槍先形尖頭器の時間的位置について考察してみたい。これまで内容を検討できる石器群として検出された槍先形尖頭器は冠遺跡第10地点(12トレンチ及び拡張区)のみであり、冠遺跡D地点第I文化層が2例目となる。冠遺跡第10地点(12トレンチおよび拡張区)の石器群は、小規模な調査であり、調査区全域を完掘していないこともあってブロックの数、規模などの詳細については不明であるが、良好な状態で出土している(三枝1983)。第V-1層下部(第V層は冠遺跡D地点の第III層に対比される)を主たる出土層準とし、槍先形尖頭器を主体とする石器群である。槍先形尖頭器のほかに、削器、ナイフ形石器、石錐、抉入石器、加工痕ある剥片、使用痕ある剥片などを主な組成とする。槍先形尖頭器は両面加工を主体に、片面加工、周辺加工が若干伴う。両面加工は中細形木葉形を主体に柳葉形が一定量存在し、中広形木葉形が若干伴う組成である。中細形木葉形、中広形木葉形は中型、大型が組成し、柳葉形は中型である。周辺加工はいずれも大型で、機能的には削器かもしれない。

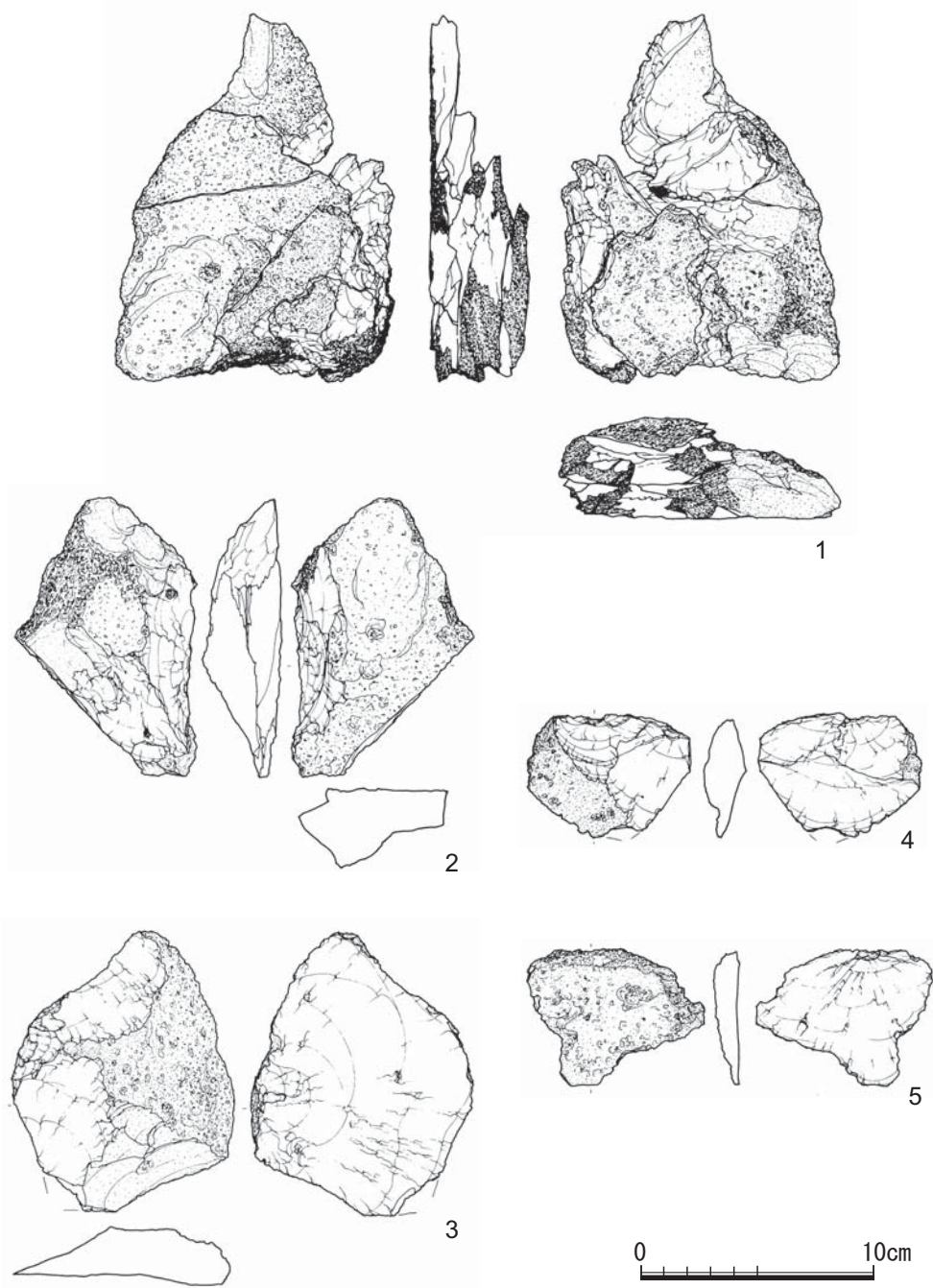
槍先形尖頭器の製作技術については、接合資料などが得られていないことや槍先形尖頭器調整剥片が資料化されていないため、詳細を明らかにすることはできないが、特徴ある製作技術を復元することができる(藤野2004a)。15cmを超える中広形木葉形、中細形木葉形の大型品において広く素材面を残したものがあり、大型では板状剥片を多用して、基本的に祖型を作成することなく、最初から成品に近い形状に成形しているものと思われる。素材の形態的特徴から大きく厚さを減じる作業を行う必要がないためであろう。また、主体とはならないようであるが、祖型を製作して厚さを大きく減じる技術も並存している。中型は相対的に加工が進展しているものが多く、素材を推定できるものが少ないが、後述の素材製作の様子から基本的に剥片を素材としているものと思われ、素材面を残している未製品も散見される。大型同様、素材形状を生かして1工程で仕上げているものとしっかりとした成形、整形段階を持つものがあるようである。

素材は盤状剥片(板状剥片)および剥片を利用しており、接合資料から具体的な製



第 42 図 冠遺跡第 10 地点（12 トレンチおよび拡張区）の槍先形尖頭器石器群（1）
（網目は素材面を示す）

（三枝 1983 より）



第43図 冠遺跡第10地点（12トレンチおよび拡張区）の槍先形尖頭器石器群（2）
 （三枝1983より）

作技術を知ることができる（第 42 図）。やや扁平な亜角礫を素材としており、石理にやや斜行するように剥離を行っている。素材長辺部を作業面としており、打面と作業面を交代させながら盤状剥片を剥離している。そのほかの接合資料や石核においてもほぼ同様な工程で盤状剥片を剥離している。厚さ 2～3cm 程度の盤状剥片を主に剥離しており、いわゆる板状剥片である。

石器群の時間的位置づけは近隣では類例を欠くが、槍先形尖頭器の形態組成などは神奈川県風間遺跡群 B0 層出土石器群に共通する点が多く、時期的にも槍先形尖頭器第 IV 期（細石刃石器群並行期、藤野 1989）に位置づけられる。出土層準は第 V 層最上部を中心としており、層位的にも縄文時代の層準とは隔絶している。

冠遺跡 D 地点第 I 文化層の特徴はすでに述べたところであるが、上述の冠遺跡第 10 地点の石器群と共通点と相違点が指摘できる。石器組成の上では共通点が多い。冠遺跡第 10 地点でナイフ形石器としているものは薄手で小型の剥片を利用し、大きさも 2～3cm 程度である。形態に斉一性を欠いており、調整もトリミング状で細かい。本遺跡で小型幾何学形石器としたものとほぼ同じ器種であろう。そのほかの定型石器においても削器、石錐、抉入石器が主なもので、多様な形態の加工痕ある剥片を多数伴っている。槍先形尖頭器を主体とする組成であることは言うまでもない。槍先形尖頭器の素材は剥片を主体としており、素材を生かした製作法を取っている。

一方、槍先形尖頭器の形態組成や剥片剥離技術の面では相違が指摘できる。冠遺跡第 10 地点では槍先形尖頭器の組成が大型・中型を基本とし 15cm を超える超大型品を含んでいる。中細形木葉形を主体に柳葉形が一定量存在し、中広形木葉形を伴う組成である。冠遺跡 D 地点第 I 文化層は中型を主体とし、大型を伴う組成と思われ、柳葉形を主体としている。剥片剥離技術の面では、冠遺跡第 10 地点では盤状剥片（板状剥片）の製作を基盤として、槍先形尖頭器を主体にそのほかの器種にも副次的に素材を供給しているようである。そのほかの剥片剥離技術が明確でないことからすれば槍先形尖頭器製作の調整剥片を石器素材にかなり利用しているのであろう。冠遺跡 D 地点では槍先形尖頭器製作が石器の素材製作と不可分の関係にあるが、石器素材製作のための剥片剥離技術も存在している。

出土層準から見れば、冠遺跡 D 地点第 I 文化層は第 I d 層下部～第 II 層に主体がある。堆積条件や第 II 層（漸移層）の形成要因が異なるため、単純に対比することはできないが、一つの重要な検討材料であろう。また、完全な組成復元ができる状況ではないが、冠遺跡 D 地点第 I 文化層の槍先形尖頭器は柳葉形を中心とする形態組成

であり、より新期の様相を示している。槍先形尖頭器第Ⅴ期に位置づけられる石器群と見て大過ないであろう。

5. おわりに

本稿では冠遺跡D地点第Ⅰ文化層の詳細な分析を中心に、冠遺跡群における槍先形尖頭器出土遺跡の様相とその特徴について検討してきた。冠遺跡群は西中国山地中央部に位置し、冠山安山岩原産地に立地しており、後期旧石器時代を通じて遺跡が形成されている。槍先形尖頭器出土遺跡についても重要な一時期を形成していることが本稿を通じて明らかになったと思われるが、冠遺跡が位置する中国地方を概観すると、内容が検討できる槍先形尖頭器石器群はきわめて少ない。こうした状況を反映して、本地方においては槍先形尖頭器の編年的位置づけも未だに十分定まっていないというのが現状である。

これまで見てきたように、冠遺跡群では槍先形尖頭器第Ⅳ期（細石刃石器群並行期）～第Ⅴ期に形成時期の一端があることは間違いあるまい。冠遺跡における槍先形尖頭器の出現や槍先形尖頭器石器群成立の契機など、これから明らかにすべき問題も多い。とくに第Ⅳ期は細石刃石器群との関係を明らかにする必要があるとともに縄文文化の開始と深く関わっている時期である。冠遺跡群において細石刃石器群の関連資料はきわめて希薄であり、槍先形尖頭器石器群が広く分布していることと深く関わっているのであろう。今後、これらの問題を解決するため、基礎的な資料の新たな視点での検討を行うとともに、新たな資料の蓄積を行い、この問題を解決する糸口を探って行きたい。

本稿で検討した冠遺跡D地点第2次調査には、藤野のほか、当時広島大学の教官であった川越哲志先生、中越利夫先生、大学院生であった竹広文明、学部生であった高島豊、野島洋子、沖 憲明、杉浦真理、高添千代子、高田美由紀、中島信親、大鳥居 仁、本田代志子、広島大学統合移転地埋蔵文化財調査室在職中の吉井宣子、山口県在住の下瀬洋一が参加した。出土遺物の整理は、藤野、竹広、高島、野島、沖、杉浦、高添、高田、中島、大鳥居、本田、吉井が行った。本稿使用した石器図面は、整理参加者が分担して実測したもので、藤野が浄書した。石器の説明のうち、「槍先形尖頭器、小型幾何学形石器、削器、石錐」については大鳥居、「受熱剥片の分布」については野島が作成した文章に藤野が加筆・修正し、再構成した。また、安山岩の石質分類と分布状況は藤野と杉浦が行った分析に基づいている。平面分布の浄書は主として高添が行った。また、本稿の挿図作成に当たって、総合博物館埋蔵文化財調査部門永田千織、山手貴生が協力した。このほか多くの方々の協力により本稿を作成することができた。この紙面をかりて謝意を表したい。

注

- (1) 報文では上層石器群を第Ⅰ文化層、下層石器群を第Ⅱ文化層としている。しかし、第2次調査では3枚の旧石器時代文化層が検出され、最上部文化層は旧石器時代末～縄文時代初頭と考えられる槍先形尖頭器石器群であった。第2次調査の槍先形尖頭器石器群を第Ⅰ文化層と呼称することとしたため、混乱を避けるため、ここでは原報告の文化層名を使用せず、上層文化層、下層文化層と呼称した。
- (2) ここでは全て折れた面について折断面と表現する。折断面の生成については意図的な折断、剥離に伴う折断などが考えられるが、意図的な折断と明示していない場合はいずれか不明であることを示している。
- (3) 加工痕の角度および素材縁辺の角度は5°単位で表示したが、実際の測角では1°単位で行っている。5°単位表示に際しては実測角を二捨三入した。
- (4) 細かな剥離面については使用起源でないものを含んでいる可能性が強く、今後さらに検討が必要であるが、ここでは仮に使用痕の可能性のあるものとして取り上げ、分析した。
- (5) 剥片縁辺については長辺と短辺の大きく2つの部位に分類した。長幅比1.0以上を縦長剥片とした場合、縦長剥片では打撃方向に平行する縁辺が長辺、直交する縁辺が短辺となる。ただし、先細りの剥片の場合、短辺は存在しない。
- (6) ここでいう剥離痕の大きさは剥離痕の幅を示している。
- (7) 素材剥片の形状については個々の剥片から剥片生産技術を厳密に復元することが困難であることなどから、単純に剥離方向を基準にした平面形で分類した。素材剥片の剥離方向を主軸とした場合、主軸方向を長さ、主軸の直交方向を幅とし、長さが幅より長いものを縦長形状、幅が長さより長いものを横長形状とした（長さと幅のほぼ等しいものもあるが、それはその都度述べる）。また、ここで使用した縦長剥片は連続的な縦長形状の剥片の生産が読取れるもので、背面構成は主要剥離面の打撃方向と同一の剥離面のみあるいは同一方向が主体であるものを意図している。横長剥片についても同様である。
- (8) 使用法や機能については複数の手法を用いることが必要であるが、現状では顕微鏡観察などの分析が困難であり、肉眼観察による資料属性の分析を中心とした。確度の高い機能推定は将来の研究の進展に譲りたい。
- (9) B3-1・6・11・16・21区、C3-1・6区についてはすべて第Ⅴ層まで調査したが、B-2・3・7・8区は第Ⅲ層上面までしか調査をしていない。したがって、本遺跡の遺物包含状態からすると、B-2・3・7・8区の遺物分布状況は第Ⅰ文化層の様相の一部である。しかし、第Ⅰ文化層の遺物の出土層準が第Ⅰd層下半～第Ⅱ層にあることからほぼ実態を反映しているとみなして分析を進める。
- (10) 特定の方向から力が加わった痕跡がなく、いわゆる剥離面とは異なっている。フラットな面を成しておらず、複数の方向からのひび割れの進行の結果生じたと考えられるギザギザの激しい割れ面を呈している。

引用文献

- 梅本健治 1983 「冠遺跡、1980年度の調査」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(4) 広島県教育委員会。
- 大上裕二・沖 憲明編 1998 『冠遺跡群Ⅴ - 1991～1996年度の調査-』広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター。
- 沖 憲明 1998a 「1996年度の発掘調査の概要」『冠遺跡群Ⅴ - 1991～1996年度の調査-』広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター、134～157頁。
- 沖 憲明 1998b 「1992～1994年度の発掘調査」『冠遺跡群Ⅴ - 1991～1996年度の調査-』広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター、19～123頁。
- 沖 憲明 2001 「分布調査の概要」『冠遺跡群Ⅷ - 冠遺跡群発掘事業最終報告書-』広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター、7～12頁。
- 沖 憲明・久下 実・岩井重道・藤野次史・妹尾周三編著 2001 『冠遺跡群Ⅷ - 冠遺跡群発掘事業最終報告書-』広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター。
- 三枝健二 1983 「冠遺跡、1979年度の調査」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(4)

広島県教育委員会。

- 潮見 浩 1985 「冠遺跡発見群の顛末」『広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』Ⅷ 広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室、123～124頁。
- 妹尾周三編著 1989 『冠遺跡群 D地点の調査』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第80集（財）広島県埋蔵文化財調査センター。
- 藤野次史 1985 「広島県佐伯郡吉和村冠遺跡群採集の遺物(1)」『広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』Ⅷ 広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室、91～124頁。
- 藤野次史 1989 「日本列島における槍先形尖頭器の出現と展開」『周陽考古学研究所報』第4集。
- 藤野次史 1991 「広島県佐伯郡佐伯町神宮原遺跡採集の遺物」『旧石器考古学』43。
- 藤野次史 1992 「広島県冠遺跡D地点第2次調査の概要について」『広島大学文学部内海文化研究紀要』第21号 広島大学文学部内海文化研究施設、1～24頁。
- 藤野次史 2001 「出土石器群の年代と様相」『冠遺跡群Ⅷ -冠遺跡群発掘事業最終報告書-』広島県教育委員会・（財）広島県埋蔵文化財調査センター、76～104頁。
- 藤野次史 2004a 『日本列島における槍先形尖頭器』同成社。
- 藤野次史 2004b 「槍先形尖頭器の製作工程からみた石材入手の様相 - 神奈川県月見野遺跡群上野第1地点遺跡第Ⅳ文化層出土資料の分析から -」『考古論集 河瀬正利先生退官記念論文集』河瀬正利先生退官記念論文集刊行会、7～24頁。
- 山崎信二 1976 「中・四国地方における先土器時代文化の横剥技法」『考古学研究』第22巻第3号、62～84頁。

図版1 冠遺跡D地点第I文化層出土出土の旧石器時代遺物(1)

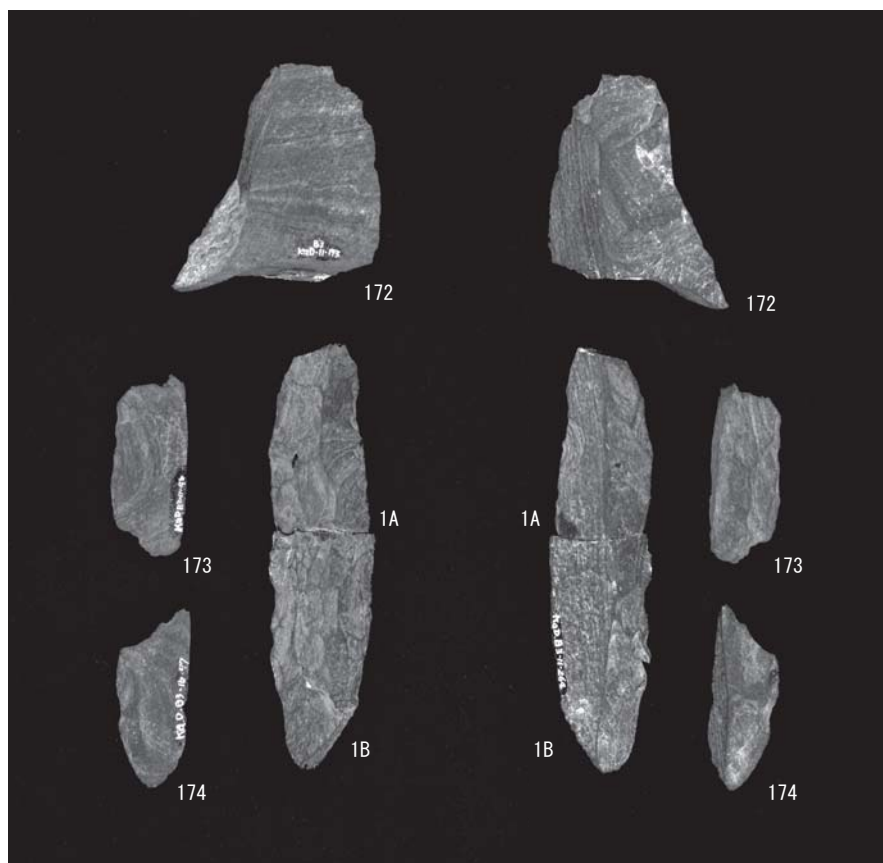


図1-1 槍先形尖頭器接合資料(左:背面、右:腹面)

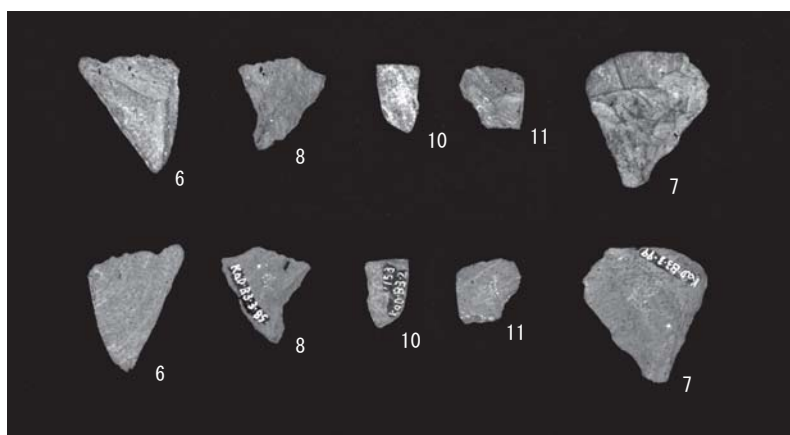


図1-2 小型幾何学形石器(上:背面、下:腹面)

図版 2 冠遺跡 D 地点第 I 文化層出土出土の旧石器時代遺物 (2)

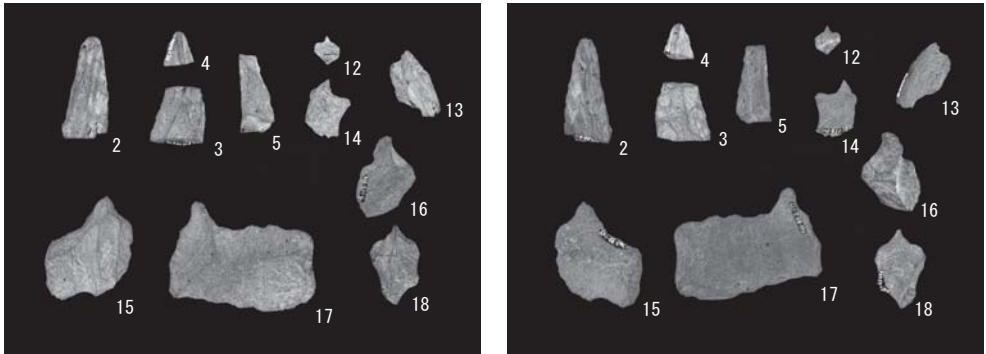


図 2-1 槍先形尖頭器 (1~4)、石錘 (12~18) (左:背面、右:腹面)

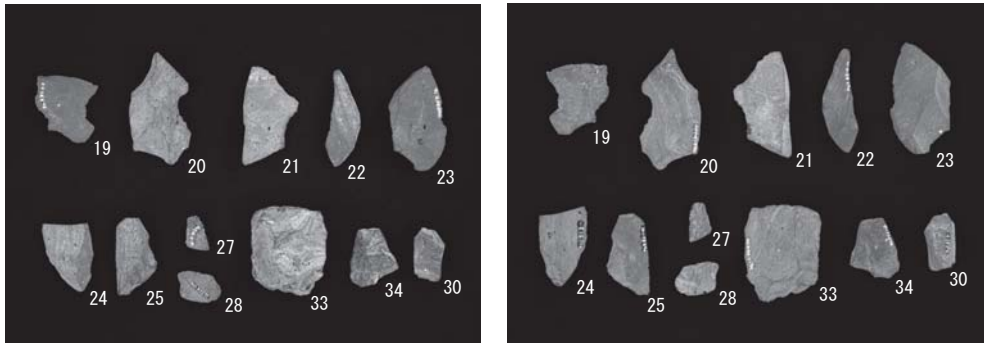


図 2-2 抉入石器 (19~21)、削器 (22~26・27・28)、楔形石器 (30・33・34) (左:背面、右:腹面)

※図版 1・2 の写真の番号は第 8・9 図および第 31 図の番号に一致する。